

関西学院大学総合政策学部

2017年度 秋学期

日本語Ⅱ レポート集

大学生生活の希望

目次

1 クラス（担当：牲川 波都季）

留学生の視点から経済と政治について学んでいく

王 朝（オウ チョウ）

国際向きの将来

温 馨（オン シン）

実践とチャレンジ性を身につけよう—良い人間関係を築く

戎 芸（ジュウ ゲイ）

経済成長のための福祉—少子化の根本的な問題の解決を目指す

全 晟珉（ジョン ソンミン）

環境と経済を両立させるための四年間

張 中来（チョウ チュウライ）

自分の目で見に行きたい

陳 鏡夫（チン キョウフ）

私の日本紀行—当地の文化を感じる

梅 佳椀（バイ カカン）

認知することから解決できる

尹 汝文（ユン ムヨン）

豊かな人になる

李 夢昊（リ ムコウ）

2クラス（担当：勝部三奈子）

社会問題の学び

李 先佑（イ ソンウ）

大学のANA夢

王 康（オウ コウ）

一人旅で新しい自分に出会う

欧陽 文静（オウヨウ ブンセイ）

大学でやりたいこと

呉 限（ゴ ゲン）

日本旅行を通じて疎通を学ぶ

鄭 太泳（ジョン テヨン）

精神科についての勉強—大学の中で

陳 釗填（チェン チャオテン）

いい習慣を身につけたい

龐 曉鈺（ハウ ギョウギョク）

原子力と温暖化

李 暉強（リ ウエイチャン）

自分を賢く、卒業後競争力のある人材になることを目指す

劉 格（リュウ カク）

コミュニケーションを身につけたい

魯 晶媛（ロ ショウエン）

3クラス（担当：横野 さゆる）

新しいいろは

金 佑錫（キム ウソク）

有意義な大学生活に送る

石 勝（セキ ショウ）

新しい米中冷戦時代の幕開けと私たちの暮らし

孫 政勝（ソン マサカツ）

知識人になるために

韓 建溟（ハン ゴンホ）

この4年間でなりたい自分になれるのか

プー プー マウン

大学時代の異文化コミュニケーション

万 静杰（マン セイケツ）

ワンパターンではない人生の「正しい」決め方

文 世煥（ムン セファン）

言語によるグローバル社会の促進を検討する

李 億成（リ オクセイ）

より良く伝えるために

李 春海（リ シュンカイ）

この四年間

李 彤琳（リ トウリン）

1 クラス

担当 牲川 波都季

留学生の視点から経済と政治について学んでいく

担当教員：牲川 波都季

クラス：日本語II(1)

名前：王朝

1. 中国の高校から日本の大学まで

いい成績で志望した高校に入った私が、高校時代に反抗期を迎えに来た。そのため私の高校時代が無茶苦茶になって、最後は憧れた中国の大学に入れなくなってしまった。卒業してから、今の私は何がしたいのか、何ができるのか全く分からなくて、大変戸惑うようになった。ただ、高校でのことを振り返ると、後悔だらけのがよく分かった。自分の将来の生き方を探そうと思って母国を離れ、日本に来て、改めて勉学を始めた。

日本に来ると、日本のいい大学に入ることを目標として勉強し続ける日々を過ごしていった、遂に関学に入った。しかし、大学に入ると、日本の大学に入学しようという目標もなくなり、また躊躇ってしまった。だが、前よりもっと頑張って勉強を続け、高校で失ったものをできる限り今から取り戻そうという思いが変わることはない。

だから関学で授業を受けることは私にとって極めて貴重な機会であり、知識を吸収することを中心として、大事に過ごしたい。

やはり高校時代では勉強する科目が全て決められたし、受験科目以外のことを勉強する余裕もない。ところが大学に入ると状況が変わった。以前が知らなかった分野や学問と触れ合えるようになって、自分のペースで勉強することが可能になる。それによって、知識欲が生じ、知識欲をどんどん満足していくことが大学で一番やり甲斐があることだと思う。

2. 政治学と経済学に興味深い

私は留学生の立場から見ると、当地の大学生の気持ちとちょっと違うかもしれない、国家という概念はますます大事になってきた。日本で生活するというよりも体験することである。この隣国は私の母国とどこが違うのか、なぜそんな違いが生じるのか。このような問題は私一人だけでなく在日留学生みんな日々考えている問題ではないかと思っっている。これらの違いをもたらすのは国自体もしくは国民自身というより、その国を運営する政府や彼らが制定した各制度・政策の違いの方が主に国家間の違いを作り出すのではないかと私が考えている。

日本に来てから、いつも様々な政党によって様々な政治的イデオロギーを持つ立候補のポスターが見られた。その中では有力政党からの有名な政治家もいるし、ただの政治的理想を持っている一般の方も偶にいらっしゃる。さらに幸いなのは最近日本の総選挙が行われて一旦その雰囲気を経験した。驚いたことは、日本をより良い国にしたいと思っっているはずだった市民たちは、総選挙で53%の投票率から民衆が政治に対する関心が低いと示された。民主的政治のおかげで、せつかくの自分の声を政府に反映できる絶好の機会があるのに、近半数の人しか投票権を行使しなかったということはとても不思議だと思う。こんな中国で見たこともない光景で刺激を受けた私は、必ずいつか日本の政治を知りたいと思っ始めた。

日本の大学での授業の中で、中国の経済成長を例として挙げられたりすることと中国の台頭について研究している先生も想像以上に多いである。そんなことで私は誇りに思っただけより、そもそも経済って何だろう、どうして中国は経済成長できるのか、これからも成長し続けるのかのようなことに思っ込んでいる。それらの疑問によって経済という学問に関する興味が生じた。経済学を学ぶことで中国だけでなく、日本の経済の現状や先行きについてももっと理解できるようになりたいと思っっている。

さらに、政治学と経済学の授業を受けている時、私は他の授業よりいつも集中できる。そして毎回の授業が終わってから、本当に自分がいっぱい知らなかったことが知るようになって、知識欲が満足されたと感じている。

目標があると戸惑うこともなくなった。これから大学での勉強には、政治学と経済学に関する学問を中心とする勉強していきたいと思う。

3. 政治学への探求

中国の政治と違って、世界で最も多く行われている自由民主的政治に触れたい。その中では、日本の民主制度はまた欧米と違って、日本の特色がある。しかも私今は日本で留学しているから、日本の政治を知るにとって最高のチャンスと言っても過言ではないでしょう。

そして私は中国人であるとしても、正直に言うと中国の政治についてもほとんど知らない状態である。日本に来てから図書館やマスコミで中国を研究している日本の学者の著書やインタビューを見かけることがたくさんある。やはり貴重な留学の機会なので、外国の学者たちが中国の政治をどう考えるのか、自分がこれまで受けていた教育とどこまでちがうのか、これだけが私に対して非常に魅力的である。そのため、日本の政治を学びながら、余裕がある時図書館などを利用して、日本人の立場から見る中国の政治についても自学するつもりである。

4. 経済学への探求

中国の改革開放政策を行って以来、著しい経済成長を果たせ、国民の生活がどんどん豊かになったことは私にも実際に感じていた。だが、中国の自慢の市場経済が近年においてはだんだん減速しつつあり、さらにこの状態は将来も引続くのようなニュースが最近ネットでたくさん出てくる。こんな厳しい経済状況が変わらないと社会全体の発展の妨害になってしまうだろう。そういうことが起きた原因はなぜだろう？どう対処すべきか？それらの疑問を解明するために、アジアで初めに市場経済を行った日本の経済に関する経験を見習うことがとても重要になってくると思う。

5. 公共経済学に着目

政府という切り口で研究していこうと思って、『公共経済学入門』という本を選んだ。本書は主に公共経済学の基礎知識にめぐって、政府が様々な形で市場に介入することを経済理論からその必要性を解釈してきた。

本書で紹介された厚生経済学の第一基本定理から、政府が市場に一切関与しないとき、最も効率的な分配ができ、つまり社会全体の富が最大になることが表明された。しかしこれが公平性の面を全く考えていない場合のため、実際の社会においては極めて不十分なことである。

だから、厚生経済学の第二基本定理が登場し、市場を完全に個人に任せれば各人が単純に利己的な経済活動しかしないため、貧富の差が拡大しつつ、結局とんでもない混乱が生じるかもしれない。そんな悲惨な結果にならないために、政府の市場への介入は、競争均衡を保った上で公平性も兼ね備えた状態に調整できることが理論付けされた。

その理論を裏付ける典型例としたのは政府が主導する所得再分配政策の下で維持している社会保障制度である。これは政府の公共経済活動によって、社会各階層の矛盾を均衡し、社会の公平と安定を保つために一番メインとなる手段だと言っても過言ではない。

本書の内容は日本社会で存在している社会問題の例をテキストで多く挙げられるため、一見で無味乾燥に思える経済学の図でも理解しやすくなる。さらに留学生とする私には一般生活でなかなか触れない日本財政に関する実情も多少知られるようになった。

たとえば『公共政策学入門』の第9章「所得再分配政策」の内容から、日本現在の社会保障制度が直面している問題点が多少知るようになった。

『平成29年版高齢社会白書』によれば、65歳以上の高齢者人口と15~64歳人口の比率を見てみると、昭和25(1950)年には1人の高齢者に対して12.1人の現役世代がいたのに対して、平成27(2015)年には高齢者1人に対して現役世代2.3人になっている。今後77(2065)年には、現役世代1.3人で1人の高齢者を支える社会が到来する。社会保障制度や再分配政策にもかかわらず、あくまでも富裕層のお金を奪って低所得者に賄うことである。分配のバランスをしっかりとらないと、様々な問題がどんどん出てくるでしょう。

日本の場合に戻ると、社会保障の財源は社会保障料及び税金によって賄われなくなってしまう。とはいえ、どんどん厳しくなっていく少子高齢化社会では社会保障を削減することは決して容易ではないだろう。仕方がないものだが、政府は赤字公債を発行しつつある。ところが、公債発行が常態化すれば、公債残高が積み上がってくる。政府の利払費も巨額になり、公共サービスや社会保障給付のための支出を賄うことが一層難しくなる。各方面の要因で社会保障制度が行き詰まりになってしまい、それで一連の社会問題をもたらした。現役世代の負担が重くなり、世代間の矛盾も激しくなる一方である。その時になったら、社会保障制度は公平な社会を実現するためであるとかまだ言えるのだろうか。

さらに日本の社会保障制度における問題点から、私は中国現在の社会保障に視線を移した。近年誇った経済成長で経済大国と呼ばれて来た中国は、実際に社会内部は非常に大きな格差が存在している。中国の内陸地域と沿海地域の格差を解消していくことは、恐らくこれから中国政府が数十年も取り込んでいく環境汚染問題並みの大きな課題だと考えている。日本社会で長年も続けている社会保障制度を参照し、中国の格差問題の解決に啓発をもたらすことを大学で考えていきたい。このような留学先と母国の視点転換することは、留学生として1つ大事な学び方であると思っている。

公共経済学の勉強に関しては、決して一つ領域のこと限らず、様々な分野が関わってくるのが非常に多いわけである。そもそも国家を運営することだから、問題を全般的に考慮しないといけないだろう。したがって、政府の活動をもっと深く研究するために、いろんな分野を触れることが必要である。それによって、より多くの視点や切り口それとも立場で問題に取り組む能力が、ある程度養われるかもしれない。つまり問題に対する観察力や分析力を上げることができるのではないかと信じている。

6. 将来への憧れ

『公共経済学入門』のおかげで、政府の活動についてもっと興味があるようになった。今から言うと、将来の夢は政府の一員として政策の制定に参加し、国の発展に力を入れたい。だから大学卒後の進路については、公務員になりたいという考えが時々出てくる。しかし公務員になれば本当に自分の予想通りに働けるか、どこまで自分の理想を実現できるのかななどの疑問も持っている。

どう考えてもとりあえず単位や進路などのことに拘らず、できるだけ自分が知らないことを知るために勉強した方が現時点の私にとって一番やるべきことだと思う。

参考文献

上村 敏之 (2011) 『公共経済学入門』 新世社

日本語授業に関する感想

大学で受けた日本語授業は日本語学校にいる時と違って、文法単語を中心とする授業ではなく、意見の交換やお互いの評価そして文章で伝えることこそが大事にされている。それに単なる日本語を学ぶではなく、どうやって言いたいことを日本語で相手に伝えるのか、つまり日本語を身につけるという目標だと思う。またこの授業で日本語をたくさん話せる機会を与えられるだけでなく、韓国の留学生と交流する環境も作ってくれる。日本語レベルの向上や他の留学生との交流という目的はこの授業で確実にできたと思っている。そして今後日本語授業で同じ国同士にも関わらず、できる限り日本語でコミュニケーションすることをみんなと一緒に改善していきたいと思う。

実践とチャレンジ性を身につけよう

——国際向きの将来

担当教員：牲川 波都季

作者：温 馨

日本語（1）クラス

● はじめに：

一度中国の大学に入った経験がある私にとっては、大学生活に憧れる気持ちより実践な能力チャレンジ精神を身に付ける方がもっと大事だと思う。なぜかというと、大学で鍛えてきた能力を通じて経験者になると目指す。将来に仕事に向いての準備が大学時代からしておこうと意識しているからだ。

● 人生のやり甲斐：

「自分の力に限って多少に助けたらいいなあ」と考え始めたきっかけは人によって様々であろう。その助けるとは人間として、世界にどのような貢献を与えるのか、つまり自己価値と指す。

将来国連に関わる機関で、又は NPO や NGO などの組織で働きたい。世界貧困問題に取り込み、その解決方法、すなわち政策によって解決して行きたいのは私的な生き甲斐だ。つまりこういった仕事は私にとって、自分自身の生き甲斐と今依然貧しい現状に苦しんでいる人たちの生き甲斐のためにもっとも貢献するのは共同体感覚である意味になった。

● 決心から出発：

高校時代に模擬国連という活動に何度も参加したことがある。国際会議のような形式で、活動の参加者は国又は地域のリーダーみたいな役割をする。様々な国際的問題に絞って、議論したり、話し合ったりすることで、最後に解決策を見つけたものだった。

活動で「Why Poor」というドキュメンタリー映画によって、アフリカやイタリアのような地域の人々「貧富格差」にかかわる経済や政治問題のせいで、貧しい現状に苦しんでいる姿を見た。教育条件を備わるおろか、時々刻々に飢餓線上に喘ぐ人は大勢いることが分かった。そして医療条件の欠乏のため、小さな傷で死亡率が驚かせるほど高い、最低限の生活すら保障できないという状況になってしまったことに非常に感心していた。特に子供達の瞳から生きていくと

いう命に対しての渴望が見え、本格に同じ人間としての生存尊厳から出発点にして、「自分の力に限って多少に助けられたらいいなあ」と考え始めた。難民や経済格差などの問題にする関心が持ってきた、やはり色々な国際機関の仕事を通じて、将来は世界の貧困地域に対する支援という決心をさらに固めた。

国連のような国際機関では、円卓で国々の政府や地方自治体などの要員が国際問題に総合的な把握及びそれに対する解決方法を取り組むという仕事モデルである。この世界舞台で活躍としたら、自分の価値感が最大限に実現されと考える。

● 楽しみな大学プラン：

「大学」の「大」は単なる学生の数、キャンパスの規模だけでなく、幅広い知識を学習、人との知り合いや合作などの人間らしい文化、文明的な能力を身につけることだ。この「大きさ」は将来の国際向こうの仕事には必ず深い影響を与える。今から準備して出発するのは個人的でポジティブな学習する方を考え始めなければいけない。

そこで、最初の考えから今まで、将来の夢のため、実践してきたことは留学して、総合政策学部を選択した。そして今から、この以上、大学生になった私は、様々な社会的責任感を持って将来の進路にせよ、夢にせよ、取りあえず大学4年の時間で新たな物事を体験すること。それをしながら、経験を積んでチャレンジして進む。

最初の段階ではしっかり総合政策に関わる基本知識を身につけたい。その以外にはボランティア活動で実践できるように、ドイツ語や言語学概論などの授業は履修科目として受けることだ。そして多言語要求の世界に対応できるため、英語は向上ため、毎日の単語プランを立つことも必要である。1年の時間にわたって、ほぼドイツ語と英語の日常対話ぐらいのレベルが話せるようになることを目指す。この小さなターゲットから努力したいと思う。

ところが、チャペルアワーの時、先輩たちは東南アジアなどの諸国に対する様々な支援プログラム活動に取り込んでいることを聞いた。当地の人々の生活を営む姿がもっと知り、夏休みの時間でこういった支援活動に参加しに行きたい。現地に出ることによって、たくさん問題を発見する上に、現地の人々の気持ちと共感したい、学んだ知識を活かすことで解決策を探る。つまり大学生としての私、と社会の間で実践な渡し橋をかけるのは活動の真の意義とい

う考えがあるから、必ずボランティア活動に参加して、社会の慈善事業に自らの力に限って貢献しようと思っている。

● 大学でのチャレンジと実践:

もちろん大学の段階は確かに高校時代より能力をかなり伸ばしたのが。本当の社会人としての経験は未だ不十分で、考え方も甘いかねない為、ソーシャルスキルを鍛え方としてボランティアや支援プログラムの参加が必要だろう。

プログラム活動は人との接触の貴重な機会だ。しかも、経験が大変不足のため、最初からきつとうまくいけない。だがいくら困難でも、その難しさは動力に変える。屈服しない気持ちを持って現地の大変さが体験しながら、様々な人々と付き合うことで、とりあえず人間関係の扱い方などの能力を磨きたい。そして、授業でも、現場でも、学習した知識などは自分の日常生活の中での一部になる、心からの情熱を持って頑張りたいと思う。

将来の仕事は世界に向くことから、世界中の国々の文化が認識すべきで、大学院の時はドイツなどの国へも行ってみたい。ドイツは日本と同じ、社会的なルールや規則は厳守することも重視している。いつも大まかと言われていた私にとっては貴重なやり直す機会、仕事の方にも大きなメリットがあると思う。そして三、四年生の時、カリキュラムはあまりきつくないから、その余裕の時間は日本で独、中三国の文化交流の活動に参加したい。特に2020年の東京オリンピックのような世界レベルの活動を期待している。幸いのボランティアになり、視野を広げ、楽しんでいきたい。

● チーターになりたい私:

私はいつもチーターみたいな人間になりたい。様々なことが目標に定め、その目標に向いて最後までやり込む。しかし最初は誰でもできることは長い間に経つと、諦めてしまった人は少なくないだろう。だから、最初の一步から踏み出すのは大切。自分を選んだ道へ進んで、チャレンジしていくのは必要。大学4年間の時間を十分に利用して、仕事、さらに人生の生き甲斐のために、悔しくない大学生活を送れるように、いくら大変でも諦めずに頑張りたい。

● 読書のレビュー:

グローバル化の進展しながら、世界に悪影響させ、諸多な不平和の素因が存在している。歴史上残された政治(イデオロギー)、経済、宗教、色々な問題に誘発された貧富格差、難民、そしてテロ等は以前より激しくなっている。

また、グローバル化に応じて、多民族や多国間の交際の増加も実際に問題の複雑性は一層に深刻させた。もちろん、そういった世界性問題になる誘因は幅広く関連しているが、せんじ詰めれば、やはり異文化の中の「異」と関わる問題であると考えている。

こういった「異」とは別に「差」の意味していない、「違い」とはいえる。私たちの留学生にとりては、本来、外国へ行って、異文化コミュニケーションをとる上に、さらに世界市民にとって国際的で多角の考えの必要さは非常に不可欠で、異文化間で相互的な理解を促進すべきだ。そして、私の人身で将来的な夢も世界中の国々へ行って、いろんな出会いをして、特に国際レベルの支援活動という仕事に通じ、本当の世界市民になりたい。

今度の夏休みは、ゼミと日本語の二つの授業で今後の研究したいことに拘るのはテーマとして論文の書くことを要求された。論文の方は「日中共同で対アフリカ支援プログラム」というテーマを決めた、やはり日本と中国の違うイデオロギーを背景し、ガバナンスのような政治的や社会的な価値観などの諸要素が不統一で、日中間に置き、どのような合作を行って対アフリカ支援の目的が達成できるのかと意識した。それは対アフリカ支援のやり方より、さらに問題点になった。そして、自らの将来の国連などの仕事のつながりがあるから、最後が西谷真規子によって編著された「国際規範はどう実現されるか」という本を決めた。

本書は2部、9章に構成される。主に国際規範の適切な倫理性と複合ガバナンスのアクセス及び今の国連やNGOのような様々な国際性事務機関の仕組みや実態などの問題を検討し、違いの価値観においても、その違いに関わらず、複合なガバナンスで国際問題を実現すべきという論点を提出された。

上記の論点に私にとってはさらに国際性のことに対しての考え方や角度を豊富された。例えば：人々の普通のイメージは国連とは国際的、そして、国々間の合作している組織であろう。しかし、国連のような組織の仕組み及びその動態問題は捉える人が多くない。特に今の国連のような国際組織では一国の覇権秩序、腐敗など、実際に様々な世界性問題（テロ、貧困、戦争、宗教等）の解決には実効性がさらに下がることは現実である。

そのゆえ、今の国際のメカリズムにゆえ、ガバナンスの調整が必要、以前の伝統性のガバナンス方法のみならず、補完性と相乗効果を起き出せるような政策で戦略の国際協力と妥協によって調整すべきではないかと私はこう考えた。

やはり読書する前、国際機関に関するそのグローバル化の裏で、存在してい

る諸問題点についての意識が浅かった。関心を持つ領域の知識がしっかり備える。専門問題に対しての知識欲を養い、物事に全面的の見方が身に着け、このいろんな能力を生かして、実践に使う、言葉に止めるだけでなく、今からチャレンジしよう。

● 授業の感想:

800字は無理かなと思った私と、今まで何千字でも構わないと思っている私になったのは、この伸ばし幅こそ授業の価値であろう。

この長い文章まで書けるのは字数だけが増えることわけではない。文章を書くによって、自らは問題に対する分析能力を伸ばしたことはないだろうか。この日本語の授業は文章を書くことで、私たちの考え、意見をみんなにはっきりとして伝えられる能力を養うことだ。いつも一つのテーマを絞り、話し合ったり、質問をしたりするによって、話し方が上手になった上、問題を解決する方法も身につけたそう。

しかし、段階によっては、文章を通じる伝えるスキルも違っているため、読み手に情報を勘違いされやすいので、いくらアドバイスをしてくれれば、無駄になりかねない。つまり、納得かどうかことである。そのもらった意見を本当に意識しながら書き直そう意欲が出るのがと気がしている。さらに、その抵抗感も出でくる恐れがあるかもしれないのではないだろうと考えている。効率上にも関わるかもしれない。

● 参考文献:

- 一、平野克己、「経済大陸アフリカ」、中央公論新社、2013
- 二、ジェイン ジェイコブズ他2名、「発展する地域衰退する地域」：地域が自立するための経済学、筑磨書房、2012
- 三、田島麻衣子、「国連で学んだ 価値観の違いを超える仕事術」、ディスカヴァー・トゥエンティワン、2016

良い人間関係を築く

クラス1 ジュウゲイ 戒芸

大学に入ってから、そろそろ半年ぐらいである。春学期の生活に通じて、色々な考えが浮かんでくる。今年の夏休みは、前の発表とレポートによって、自分の計画通り、人間関係を築くことに関する本を読んだ。私は他人と交流することが好きで、時の流れに伴って、どんどん興味深くなった。どうやって良い方法を活用して喋られるか、進む中の絆として悩まれている。

人間関係という言葉は、もちろん、人間と人間の関係のことである。学校や社会や集団など、色々な場合におけ、人と人の関係である。我々の人間はゆりかごから墓場まで、いつでも人間関係を持ち、様々な人間関係を営んでいる。ひとりの人生には、良好な関係もあるし、陰悪な関係もある。また、長期間にわたり継続されることもあるが、せっかく築き上げた関係が、短期間で崩壊してしまうこともある。人間関係が悪くなると、様々な症状が現れるかもしれない。例えば、家庭内で夫婦関係や親子関係が歪むと、離婚や家庭内暴力となっちゃうことがある。また、学校において様々な原因によって人間関係が歪むと、校内暴力とか、いじめとか、登校拒否などとなっちゃうこともある。

人間は共感できる能力を持ち、コミュニケーションで大切な役割を担っている。話し方はいい人間関係を築けるかどうかの肝心である。だから色々調べて、

「人を傷つける話し方、人に喜ばれる話し方」という本を選んだ。人は誰でも、自分の顔や体や、こういうような具体的なものに評価しやすいだろう。そして、大体客観的に判断できる。しかし、「自分の話し方」みたいな抽象的なものに評価することはしにくい。さらに、あんまり気にしない人も大勢いる。著者の渋谷昌三さんは心理学専攻、文学博士である。この本は心理学の面から、七章に分け、違う場合によって、具体例を挙げる同時に、適切な話し方を人々に伝えている。

第一章は「余計なひとこと、大事なひとこと」である。この章節では、日常生活でよく使っていることばも特定の場合で余計なことばになるかもしれないということをお伝えしている。特に印象を残した部分は「頑張れ」ということばである。ダイエット中の自分に「頑張って」という、テストのため勉強している友達に「頑張って」という、毎日仕事のため残業している父に「頑張って」という。でも、本当に役に立つのだろうか。もうそれらのことに苦しんでいる人たちに対しては、言い過ぎると、逆にプレッシャーを与える可能性もある。だから、この短いことばのかわりに、具体的な解決策やアドバイスをしながら、期待性なことばを言うと、きっと役に立つと思う。「良いことが続々起きるよ。」は無意味な「頑張れ」より、いいだろう。

このポイントは、これからの生活中、大事なことだと思ふ。なぜかという、自分の経験である。高三の時、昇学試験のため、毎日疲れてたまらなくても、一生懸命頑張っている。ある模擬テストで、予定より悪い結果を受けた。「もう無理」「疲れた」「諦めたい」という思いがどんどん出来ている。友達も先生も、「大丈夫だ、もうちょっと頑張ってみて！」と言われている。しかしその時は「本当にできるかなあ」と思って、なかなか進まない。母が「ちょっと休憩したほうがいいね、ちゃんと自分の態度を調節して、本を読むとか、映画を見るとか、リラックスしてから、また始めましょう。できると思うよ、信じている。」と励まされた。それは具体的なアドバイス、確かに、ただの「頑張れ」より、自分にとってまたモチベーションを持って始まった。この章節を読んだら、その中の原因はようやく分かった。もしこれから周りの人がこのようなことに苦しければ、私もきっとこの方式で、良い解決案の道に導く。

大学四年の間、必ず色々な人と出会える。彼らは自分一生の親友になるかもしれないし、これからの人生に対して大きな影響を与える大切なヒトになるかもしれない。だからこそ、自分がよく笑顔で人と付き合う。周りの友達は切ない時がある場合も、できるだけ自分の力で慰める。それで、友達いっぱい作ったことができる。

しかし、人間関係を築くことというのは、お互いに相手の不足を補うことである。いつも適当な方式で各自の欠点を指摘し、それらの問題を改善するために手伝うとか、これが本当の有意義な人間関係だと思う。もしこのような正直的な人と出会えれば、この四年間がもっと充実な四年間になれると思う。この目標を実現するため、色々な活動で、まず自分を充実する必要があると思う。

入学した前、色々調べた中で、関学の国際貢献活動に興味を持つようになった。ホームページから、在学中の皆さんが様々な国に行って、ボランティア活動をしたことが分かった。その時、一番印象を残したものは皆さんがフィリピンへ行ったことである。自分の力で、老人の介護や子供たちの教育などの領域に貢献した。私も日本人の皆さんと一緒に、発展途上国に支援したいと思う。しかし、今の私にとって、色々な問題が存在している。どうやってそれらの人に交流するのか、どの方式で彼らの敏感的な思いを保てるのか。この本を通じて、いくつかのポイントが活用できると思う。第七章の「心のニュアンスを伝える」とか。「相手はどう思うのか、もし自分が相手になると、どう思うのか」。相手の立場から、よく考えたほうがいい。子供たちも、老人たちも、難民たちも、発展途上国から出身した留学生の立場から考えたいと思う。現場に立って、原因や問題点を見つけて、自分の力で多かれ少なかれ改善したいと思う。

この目標を実現するため、話し方のスキルはもちろん、言語的な技能はベースである。この四年間は、日本語も英語ももっと頑張りたいと思う。まずは日本語。今日本に住んでいますから、日本語が毎日使っている。特に、私は今居酒屋でアルバイトしているから、日本人との交流がどんどん増えている。仕事のことも、お客さんとのしゃべるも。各方面から、日本語を活用する。その上、自分で単語や文法を勉強して、日本語力が必ず上昇する。

次は英語。外国語も、話し方の技術は共通だと思う。前文により、もしボランティア活動をすれば、東南アジアの発展途上国へ行くつもりである。それらの国は大体英語を使っている。今英語の日常会話は大丈夫だけど、海外に行き英語に対する制限があるから、TOEIC または TOEFL など専門的な英語力も必要だと思う。今は色々な準備を作り、来年に受験するつもりである。

二年次になると、総合政策学科に入りたい。他の学部と違い、単調的な一種の専門知識だけではなく、色々な分野を及ぶ必要がある。環境の面でも、公共の面でも、言語文化の面でも、この学科は総合的に人間と社会と自然と繋げる。それから、総合的な視点や方法論（例えば経済面と政治面）を通じて、今それぞれの問題に対する解決策を作り出す。これから世界市民として、各方面の能力を高めたいと思う。

ところで、私は旅行が好きで、この四年間せめて8回にしようと思う。夏休みやゴールデンウィークを利用して、日本国内でも海外でも、行ったことがない所へ行きたいと思う。新しい景色を見られるし、多種多様な人に出会えるし、自分の経験として積みたいと思う。今年の夏休みは、首都圏に行った。東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県、茨城県、色々な観光地に行った。計画を立てた時の期待や楽しさは全部溢れてきた。旅行の過程は幸せだ。もちろん、旅行の途中も多種多様なトラブルが起きた。しかし、自分の経験と技能で、よく解決した。これも進歩の一部だと思う。

十月末の時、大阪に住んでいる友達と一緒に、京都へ行った。一泊二日の観光だけど、すごく楽しかった。そちらに行く前、二人で資料や路線図や時刻表などを調べて、計画を立てた。違う意見を持ったけど、ディスカッションして、順調に進んだ。

実際に行った日は、自分が住んだことがある東京と今住んでいる神戸と比べると、全然違う雰囲気を感じた。京都は昔の首都として、歴史的な文化が深く、伝統的なものを守っている。神社とお寺はあちこちに分布し、町で歩きながら、いつの間にか重い感じが出てきた。これがその町の独特な魅力だと思う。連続三年外国から来た観光者が一位になった稲荷神社では、オーストラリアから来た方と英語で交流するとか、中国人の団体に日本語を説明するとか、その旅行自身以外で、自分の技能を活用できたことは楽しい。人間関係でもいいし、自分の能力でもいいし、違う方式で上げられた。

今までの経験のおかげで、入学してから、楽しい生活を毎日送っている。勉強することだけではなく、学校の活動や色々な人との出会いなど、ラッキーだと思う。この四年間はできるだけ多い友達に作りたいと思う。日本人も韓国人も、どんな人でも、互いに長所を取り入れ、短所を補える。言語力もアップできるし、コミュニケーション力もアップできる。

大学にいる四年間は実に短いと思う。自分の留学生生活を充実させるため、自分がしてみたいことやチャレンジしてみたいことを明確になったほうがいいと思う。しかし、今大学に入ったばかりから、実は目標とか自分でもまだ迷っている。とにかく、一生懸命頑張りたいと思う。できるだけ多くの本を読んで、旅行に行き、友達を作って、どんどん進む。自分の大学生活を充実させたいと思う。

日本語授業に関する感想：

大学に入ってから、色々な迷う点がある。初めのときは、自分がやりたいことというテーマに興味を持つこととか、達成したいこととか書いていた。それから、どんどん深く考えて、もっと詳しく説明して、四年間の具体的な計画をようやく完成した。書いていた過程の中で、自分が本当にやりたいことは何か、大学の間どんな目標が届けるのか、そして、どんな知識や技能を身につける必要があるのか。こういう色々な問題を、全部この授業に通じて明確された。

自分のクラスと他のクラスから意見をもらって、できるだけ良いレポートを書けるよう、みんな一緒に頑張っていた。不適切なところをたくさん書き直したけれども、最後の相互自己評価表の中でも、残っていた問題点もいくつかある。例えば、自分が総合政策学科に入りたい気持ちと、それが重要だと思う理由が曖昧だと言われた。その部分は、自分が本当にやりたいことだからこそ、自分しか書けない理由を詳しく書いてほしい。

また、選んだ本と人間関係のつながりは誤解を起こすかもしれない。その話し方と人間関係は本当に関係があるのか。文章の中で明確に書いたほうがいい。これらの意見をまとめて、自分の返事と理由を説明した。それから、良くない部分を少し書き直した。

このような交流を通じて、日本語レベルも上げて、会話の能力も上げた。これからも皆さんと一緒により良い能力を持つよう、努力したいと思う。

経済成長のための福祉

少子化の根本的な問題の解決を目指す

ソンミン

今世の中にはさまざまな問題があるけど、私はその中でも少子高齢化が一番興味深い。これは私が日本への留学を決めた理由でもある。私が高校生になった時、私は軍隊のことを色々調べてみた。それは自分の未来をむしばむ軍隊に対する怒りのためだったかもしれない。そして色々調べて自分なりにまとめてみた。韓国はまだ休戦中で北朝鮮は次々と挑発している。いつ戦争が起こるかわからない状況なので兵力を常に配置しておかなければならない。しかし人口問題のためその兵力の維持すらできなくなる可能性もある。韓国はすでに2001年超低出産国家に入った。70年代ベビーブームの時、1年に百万の子供が生まれたが、01年55万、02年40万に落ちていまや1年に40万以上生まれえない。1年に100万ほど生まれえないと青年層が維持できなくなるので、この通りなら2020年には兵歴維持ができなくなる。なおかつ現在米国の大統領であるドナルド・トランプは孤立主義で、在韓米軍の駐屯費用の値上げや撤収などを唱えている。北朝鮮に脅かされてる今の状況で十分な国防力を確保できないのはかなり危険なことだが、まだ韓国には根本的な解決先を出す動きは見えない。

少子化は実に恐ろしいもので、少子化が原因で起こる問題は軍隊だけではない。出産率は年を重ねるたび低下しているが、それとともに医学技術はますます発達しており平均寿命は上昇しつつある。結局増えた老人たちを扶養する税金を数少ない若者たちが全て負担せざるをえないため若者たちの収入は減り、酷くなる資金難で今や結婚さえ諦めてしまう若者が増えて状況は悪化する一方だ。そのうえ深刻な就職難、労働者搾取、職場内不平等などの問題もまだ解決できていない状況の中、若者たちの負担は日々日々高まっている。

ではこれほど大事な問題を解決できないのはなぜだろうか。私が考える理由は以下の通りだ。

今の社会で結婚というのはもう若者たちに魅力的ではない。結婚は様々なリスクを同伴する。結婚が必須だと思われた昔はお金がなくても生きていけるなら構わないという認識だったが、今はそうではない。結婚が損だと思っただけならしなければいいことだ。そして若者たちはメリットよりデメリットが多い結婚より一人で暮らすほうを選んだ。もちろん愛する人と一緒に暮らすのは確かに魅力的なことだが、それには色んなことを諦めざるを得ない。自由、趣味活動、余暇、さらに子供を作るなら育児のストレスと経済的な圧迫が加わる。少し寂しいが適当に働いて自分が好きなことをしながら暮らす人生と、子供のために夜遅くまで働くことを繰り返す人生の中で人たちは自由の方を選んだわけだ。

もし結婚をしようとしても結婚のカットラインが高すぎる。今の時代は愛だけで結婚できる時代

ではない。今の社会で結婚をするためには「育児費用と妻の生活費を(日本の専業主婦率はおよそ70~80%)夫一人が全部稼いでも余裕があるほどの能力」が必要だ。結婚生活と子育てにはあまりにも沢山のお金がかかる。生活には家と家具が必要だし、育児にも莫大なお金がかかる。韓国の場合、結婚資金の70%以上を男性の方から準備してくるのが当たり前だという認識があるので20代後半~30代前半に結婚するなら親が金持ちであるか、それとも自営業が大繁盛するしかない。そして30代にある程度余裕ある結婚生活ができるほどお金を稼げる人は上位10%以内の人たちしかない。つまり大体の人は結婚したら貧しい生活をするしかないということだ。しかし「結婚は選択」と認識づけられている今、わざわざ貧しい生活を選ぶ人が果たして存在するだろうか。しかし社会が進展しながら結婚のカットラインは高くなったが、賃金はそのカットラインを追いつけない。これは国から育児奨励政策でお金道を一つでも減らしてあげることが必要だ。

人口は減り続けているが、結婚はもう必須ではない。自分の状況と条件を考え、メリットとデメリットを把握して結婚を選択する時代になった。政府が少子高齢化を問題と認識して、解決すべきだと思っているなら、育児の芸能放送みたいなおかしい対策ではなく、人たちがなぜ結婚を諦めたかを分析する根本的な解決先を探すべきだと思う。結婚に対する認識の変化、子育てが厳しくなる理由、経済的余裕を持たない理由、政策の現状と対案を考えると、福祉の仕組みを変えることが少子化解決につながる方法だと思う。少子化が深刻な国々は子育てを奨励する政策がどれだけできているだろうか。出産を避ける一番の理由である育児費用、その中でも一番負担が大きい教育費の支援、仕事を辞めず育児を続けられる育児支援サービスや仕事両立制度はあるのか。あるならすべての人がそれを気軽に使えられるよう、その政策を補助する法規はあるのか。

結婚をして子供を作るというのは簡単なことではない。特に経済的な面で真剣に考えるべきの問題だ。例を挙げると韓国では女性が妊娠したら退職を勧告される場合が今でもあって、育児と仕事を両立しにくい社会雰囲気が存在する。男性の場合はもし妻が専業主婦だったら独身の時より経済的負担が3倍以上増える。独身の時は月200~300万(20~30万円程度)で富裕とは言えないけど自分の趣味一つぐらいは楽しめる生活をする事ができるが、扶養する人が二人も増えたら月500万、600万を稼いでも足りない貧しい生活をする事になる。お金に余裕がないと家庭不和につながって、最悪の場合離婚まで行くこともある。そしたら年収500万を超えない人はあえて結婚をしようとするだろうか。

すべての人は利益を求めて行動している。あえて損する行動をする人はいない。もし表面的に損害に見えることをしてもその中身にはさらに大きい損害を防ぐために、その人との関係のためになどの理由があるものだ。今の福祉政策は主に非生産人口や弱者のためのものが多いが、そ

れが人道的な範囲を超えて過度なレベルの支援をしようとする動きが見える。国の政策は税金で行われるものだから、生産人口の立場から見ると自分たちののお金を奪って非生産人口に与えることにしか見えない。つまり自分にとって「損害」なことだ。国を支えている主体である若者たちに損を与えている国の未来はどうなるだろうか。若者たちが黙って奴隷のように国のために自分を犠牲してくれるだろうか。それとも他のところに逃げるだろうか。今もこういう問題のために他の国へ逃げ出す若者が多いが、少子高齢化は今も進んでいて今の通りなら未来の若者は税金の負担がさらに重くなるはずだ。豊富な福祉で票をたくさんもらいたい気持ちもわかるが、もっと現実のことを考えるべきだとおもう。

北朝鮮との問題も見逃すわけにはいかない。まだ韓国は休戦中で北朝鮮は核まで持っている。結局北朝鮮に対抗するほどの国防力が必要なのは確かなことだが、少子化で兵力を維持できないならそれなりの対策を立てなければならない。例えば米軍などの海外軍人を仕込んだり、女性を徴集したり。しかし海外兵力で領土を守る国は外交においてかなり不利な立場にある。まして輸出で飯を食っている韓国は、外交での不利な立場ということは大きなリスクとなる。女性徴集のほうも問題がある。‘男女の身体能力に差があるので女性は兵役に不適合’と憲法に書かれているので女性は兵役を果たさなくてもいいというわけだ。しかし同じく兵役不適合判定をもらった男性は代替服務として公共機関で2年間働くことになっている半面、女性は身体検査も受けずそのまま免除ということは明らかに性差別だという意見も出ている。そして現在も職業で軍人をやっている女性も相当いるし、人口の問題もあるのでこれからは男女関係なく、実際に兵役に適合するかどうかを判断することが大事だと思う。

私は今回福祉に関する本を読んだ。その本には現在の福祉政策は弱者、非生産人口に焦点を当てているものが多いと書いてあった。そして私は今の韓国の福祉政策について考えてみた。非生産人口への高い福祉水準のために高い税金を使うことは果たして正しい判断だろうか。もちろん弱者への福祉に反対するわけではない。しかし上にも書いている通り、人(若者)は利益を求めて行動している。もし国がこういう無茶な福祉を続けると多分生産人口はその国から出ることになるだろう。どのみち経済成長のためには若者の力が必要だし、当然国はその若者たちへの支援にもっと力を入れるべきだ。生産人口外の人たちへの過度な福祉より若者たちの福祉のほうが大事だと思う。GDPが増えるとその分税金も増えるわけだし結局生産人口外の人たちへの福祉水準も増えるはずだ。私は若者たちが余裕を持って肯定的に生きてほしい。それで私は社会福祉を勉強して経済成長を図る研究をしたい。

授業の感想

今年のレポート授業で自分がこの大学生活4年間なにをするかをじっくり考えてみた。最初の時は日本に来た理由、総合政策学部を選んだ理由をである少子化について書き始めたが、いまいち

ぼんやりした感じで友達から“本当にしたいことは何？”ということまで言われた。今考えてみると話し合いで他の人に意見を聞くことが私のレポート作成において一番役立つことだった。私はこの授業の本質がレポート作成ではなく話し合いのにあると思った。色んな人と話しながら自分の大学での目標を決める子もいたし、自分の目標がさらに明確になった子もいた。とにかく大学に入った以上、4年間に何か目標を決めなければならない。今すぐ思い浮かばなくても結局何か一つはしなければならない。この授業は自分を絞るのにとっても適切な授業だった。私もかなり自分を絞って目標を決めて結論を出した。その過程はしんどかったけど私が大学生活をする4年間においてなくてはならない経験と結果だったと思う。

参考図書

若者の雇用・社会保障（脇田滋・井上英夫・木下秀雄）

現代福祉学概論（杉山博昭）

日本に来てからもう1年半、大学一年生になった私はこれから環境問題と経済について勉強しようと思った。なぜなら、私は環境問題こそ中国と日本の一番違うところ、また、環境問題は直接経済と関わっていると思うからである。

去年の四月、私は来日したあと一番慣れないことはゴミの分別である。中国での私が住む地域はもえるゴミも、もえないゴミも、全部一つの袋に入れて捨てても大丈夫なのである、それにゴミ捨ての時間も限定されてない。ゴミの分別は最初とても面倒なことだと思ったが、今考えれば、そんなに面倒なことではない。その後、日本であちこち旅行して、日本の環境の美しさに感心した。特に、水道水は直接飲めることは、私にとってすごく驚いたものである。

私の出身地の江蘇省は中国で経済的に優れている地域である。特に近年、急速な発展を遂げているが、その反面、環境破壊は深刻な問題となった。今思えば、私は幼い頃から、周りの環境がだんだん悪化していた。当時ふるさとに帰ると、時々街中の空気はいやな匂いがする。多分、近くの化学工場による排気が原因だと思う。「大気汚染になるだろう、でも仕方がない、経済発展のためだ」と思わずこう考えてしまう。しかし、本当にそれでいいのか、あの時の自分は分からなかった。

あの時こんなに関心があったものの、大学入学した以来、学校で様々な分野の様々な知識を学んで、いつの間にか、この熱意を忘れていた。今回の夏休み、帰国した私はようやく自分が勉強したいことを思い出した。それは持続可能な社会を実現するための知識である。夏休み中、私はほぼ毎日両親と散歩していた。しかし、毎回散歩の途中、口の中から変な感じがする。時々軽い喘息症状まで出てきた。調べたところ、どうやら近年話題になっているPM2.5が原因だそうである。PM2.5は今まで何度もニュースで見たことがあるが、やはり自分に直接関係無いと思い、どこか安心している。しかし、経済が発展するにつれ、近年、ふるさとの空気がどんどん悪くなっている、私も被害者となって初めて環境問題の大切さに気づいた。

PM2.5の発生には、自然環境によるものと人為的なものがある。ニュースによると世界各地で大気汚染が原因で死亡する人が2013年には合計550万人以上に上り、そのうちPM2.5の汚染が深刻な中国・インドの合計の死者数が全体の55%を占めたことが分かった。汚染物質を多く排出する工場の設備や車の排ガス、石炭の燃焼、肺がんなどを引き起こしている。中国の最大原因は石炭の燃焼で、2013年には

産経ニュース：<http://www.sankei.com/world/news/160216/wor1602160013-n1.html>

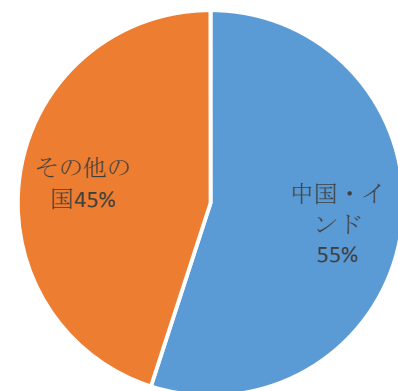
石炭の使用だけで約36万6千人が死亡したとみられる。しかし、別に中国政府が何の策を立てていないわけではない。最近では、老朽化した石炭火力発電所や鉄鋼所を修繕すること、自動車の排気ガスを削減するために規制をさらに強化することなどを行った。ただ、大気汚染がもうここまで深刻になった今ではどれも効果が薄くて、あんまり効かないのである。

それにPM2.5だけではなく温暖化、酸性雨、森林破壊、オゾン層破壊などなどの環境問題も存在している。そんな背景の中、化学の世界では毎年、新たな未知の物質が多数検出され、多くは有害かどうかですら確認できず、そのまま排出された化学物質。つまり、科学の発達とともに自然界にない物質が地球上に少しずつ蔓延している。たった数十年の時間で地球存亡を脅かす環境問題がもういくつか起きている。

私は一刻早くこの現状を変えたい。しかし、今の自分には力不足で立ち向かう力も、知識も、自信もない。少なくとも分かったことが一つだけある。こうなってしまったのが経済と環境のバランスが崩れたからのことだと思う。私たちの日常を支えている生産業や農業や工業には、健全な環境があってこそ成り立っている。よって環境汚染により、経済活動はもちろん、深刻な場合は人間が生きにくく環境になってしまうかもしれない。それに私たちの暮らす地球では、地震、台風、津波、

世界各地で大気汚染が原因で死亡者数合計550万人

■ 中国・インド ■ その他の国



土石流など、人類にとっては有害な自然現象がいまでも続いている。つまり、害があるのは必ずしも人間が招いた事態だけではなく、自然災害にも、環境を破壊している。

こうしたことを防ぐためには、ただ現状一番深刻な問題だけに集中してはいけないと思う、政治や行政などに関する幅広い知識も必要である。環境は確かにすごく大事なことであるが、だからといって国の発展を止めるわけには行かない、汚れた土地や空気など新技術できっとなんとか救えるはずである。その前に、後から救うよりも、こうならないように私たち経済と環境のバランスをちゃんととることが一番大事なことではないだろうか。こうすれば莫大な環境保全のための費用も少なくなる。ゆえに、私は来年総合政策学部総合政策学科で学びたい。そして将来、私は自然保護、環境行政、環境法、環境経営、資源利用などの専門的な視点から環境技術を使ったビジネスで持続可能な社会を実現する。

書評：PM2.5 危機の本質と対応：日本の環境技術が世界を救う

石川 憲二 日刊工業新聞社、2015

著者は、本書の序章でPM2.5の基礎知識を読者に詳しく説明した。PM2.5とは何か？簡単に言うと大気中に浮遊している小さな粒子のこと。直径は約人間の髪の毛の太さの20分の1以下、PM2.5その名前はあくまでも粒子のサイズのことである、化学的な成分までは特に特定していない。主な発生源は燃焼などによって直接発生、あるいは様々な物質の大気中での化学反応によって生成。例えば火山の噴煙、工場、火力発電所など。そして、浮遊する物質は風に乗って広がっていく。だからこそ、中国大気汚染が日本人の関心を集まっているのである。しかし、理論上は大陸から由来するPM2.5によって私たちが健康被害を受ける可能性はあんまりにも低いので、ちょっと考えにくいのである。そもそもPM2.5によって健康被害が確かに生じているのか、その問題すら曖昧で、確証されていない。だから少なくともPM2.5は健康への影響は大きいのではないと考えたほうがもっと正しい。とは言え、怖いのはPM2.5と一緒にやってくる毒物である。それは二酸化硫黄と粉塵の濃度、この二つの数値が高ければ高いほど、毎年の死亡者数も高くなる。

第一章は中国の大気汚染は21世紀型の環境問題について紹介した。主に中国大気汚染の特殊性をめぐって議論した。1：信頼できるのはアメリカ大使館のデータ、2：PM2.5など汚染物質の濃度が異常、3：長期化したまま改善の示が見えない、4：環境基準や規制があっても機能しない、5：綺麗に見せたい首都の周囲がもっとも深刻。このような順序で話を展開した。

第二章ではPM2.5対策の成否が中国の未来を決めるかどうか、分析を始めた。たくさんの実情を分析した結果、継続性のある社会を実現するには、莫大な費用がかかる、まして13億の国民を抱えた中国は大きな混乱もなく運営を続けていくには環境対策が欠かせないという結論に至った。

第三章、たくさん例で日本の環境技術は世界トップクラスだと読者に伝えている。そして石炭火力発電所、自動車に関する環境技術は中国が大気汚染を解決していくうえで欠かせない技術であり、得意とする日本にとっては大きな市場を開拓チャンスである。それから、著者は中国人の平均年収と富裕層へのもっと高度な技術の提供などについてビジネスの話をした。最後、今後の環境投資は工業分野だけではなく、水質や土壌汚染対策としての環境投資も今後は積極的に行うべきだとその理由を説明した。

第四章のタイトルは拡大していく環境ビジネスの世界市場、この章で中国とインドの環境ビジネス市場を分析した、中国みたいな発展途上国はまだまだ環境対策が遅れている国が多い、このような国では経済成長が成長すればするほど環境技術が必要な時必ずくる。こうすれば環境ビジネス市場の門が確実に開くだろう。

まとめ、環境技術を使ったビジネス市場は経済のためだけではなく、大事なのは地球環境の悪化を食い止めるにも有意義であること。だからこそ、その先端に立っている日本はもっと自信を持ってその分野に力を入れるべきだと著者が主張している。

自分との関連づけ：

私は将来環境保全の技術者や学者ではなく、ビジネスの力で環境技術を活用し、各地地域ごとの環境を改善できるような人になりたいから、本書の内容「環境ビジネス」と共感している。それに、私は今日本にいるが、家族はまだ中国にいる。だから、PM2.5人体への影響についても関心がある、本書を読んで少し安心した。近年ふるさとのPM2.5は主に建築開発によるもので、人為

的なものであるが化学工場による排気ではないので毒物が含まれていないはずである。だから、中国にいる家族のことは「大丈夫」と言える。

結論：

以前、中国のスーパーやコンビニなどで商品を購入したらレジ袋が無料でもらえる、しかし、2008年から有料化となった。なぜなら、捨てられたレジ袋が街中に散らかる「白色汚染」が大きな社会問題となっていた。だから、前文のPM2.5といい、「白色汚染」といい。私は今まで注目した環境問題が結局政府の政策に頼るしかなかった、あるいは心の中にどこか「どうせ政府が何とかしてくれる」と思っているであろう。しかし、自分が被害者になってから、考え方が変わった。以前より環境問題に対して関心を増した。そして、この本を読んだ後、地球の環境を救うには、必ずしも環境技術者や政府の高官になるとは限らないということが分かった。ビジネスの力を活用することによって環境技術も商品になれる。間接的とは言え、確実に地球の環境を改善できる。こうすれば環境と経済のバランスが取れた社会をいつか実現できるはずである。だから、これからの三年間、総合政策学部総合政策学科で力いっぱい励むつもりである。

参考文献：

産経ニュース：<http://www.sankei.com/world/news/160216/wor1602160013-n1.html>

PM2.5 危機の本質と対応：日本の環境技術が世界を救う

授業への感想：

入学前、日本語の授業があるとは思わなかったので、少し驚きました。しかし、日本語学校の授業と違い、文法や単語の勉強ではなく、レポートの書き方の勉強とはホントにいいと思います。授業中、議論する時グループのメンバーが自分の言いたいことをホントに理解しているかどうか、どんな話し方がもっと説得力があるのかなど、今までは全然考えたことがありませんでした。もし言い方が間違っていたら、意味が大きく変わることが分かりました。そして、私自身話をするときどんな話し方をすべきかを徐々に意識できるようになりました。グループに分かれて相手のレポートを評価するのも自分の成長と繋がります、一人ひとり考え方が違っていても勉強になると思います。この授業を受けて、皆からもらった意見のまとめ方が最初はどのようにしたらいいのかが分からなかった、なぜなら、相手の意見は自分が必ず納得しているわけではありません。しかし、その部分はまだ足りないのも事実ですし、努力して考えるしかなかった。そのため、この一年間大変勉強になりました。

自分の目で見に行きたい

陳鏡夫 チン キョウフ

大学に入って、高校と違う。全部の時間が勉強するだけで、使われている。ですから、先輩もいろんなことをしているそうに見える。サークルとか、アルバイトとか、まだ私と同じの新入生たちも、2年生、3年生のとき、海外留学を目指す人いるも。

私の趣味は読書である。小学生の頃、アンデルセン童話やグリム童話など本をよく読んだ。中学生、高校生は小説や歴史や社会研究とか。それらの本の中に、書いた土地、歴史、人を自分の目で見に行きたい。そして、本をただ見るだけではない。昔はこんな一言があった、「夫以銅為鏡、可以正衣冠。以史為鏡、可以知興替、以人為鏡、可以明得失」。本を読むだけではなく、現実の問題に対しても、役に立つと思う。

日本に来た以来、人、文化、政治、経済に関すること、いろいろ面白いことが見ていた。日本に来たばかり、面白い画面が見ていた。一人は朝の道で掃除している、私から見ると、既に綺麗だったが、その人は道に一片の葉が残っているだけでも、その葉を片付けなければならないような気持ちを持っている、そして掃除している。このような日本らしいのやり方ことはこの一回だけ見たことがあるではない、こんなことを見て、ある程度日本人のやり方を示していると思う。ですので、未来も世界の他の国に行きたいと思っている。いろんな国の人、社会、文化を見たら、必ずいろんな考えが出てくるはずと思う。例えば、イギリスのロンドン博物館に行きたい、マルクスはここに資本論を書いた。中国は社会主義だから、社会主義を支える重要な理論はマルクスがどんな環境で資本論を書いたか、当時のイギリス、いわゆる、ヨーロッパは社会背景がどんな状況になったか。とうしてマルクスがこんな考えが出てくるか、何を解決したいのか、何の目標を達成したいか。これらの一切はわたしにとって、とても興味深いものである。

東京に住んでいるときも、東京の国立西洋美術館に行ったことがある、その時に展覧している作品は15世紀後半から16世紀初頭にライン川下流域の町で活動していたドイツの銅版画家の作品である。その作品が当時の人の生活を表す銅版画である。人々の生活における信仰の重要性を示している。宗教改革の前の場面ですが、像の前で祈る者に煉獄での罪の償いを2万年分免除する《聖グレゴリウスのミサ》など、なかには「聖」なことがある、でも、当時の信仰生活の「俗」な側面にも明らかに見えるものも含まれていった。¹でも、それらの絵の面白さが完全に分からない。なぜなら、その絵が表現したいことが全然わからないからだ。当時の歴史背景、まだ作家はどんな人も知らない。当たり前、絵の面白さも分からない。

ですので、大学の授業科目を勉強する以外、これらの国の歴史や文化を勉強しなければならない。わざと日本に来ていた、大学に勉強している4年間、日本にも、もっと了解したい。だから、東京に2年で住んでいた、大学を選ぶときも関西の大学ほうが行きたい。今も関学で日本史概論の授業がしている。そして、今まだ英語が下手なので、未来は他の国に行くときも日本に来る時と同じように、当地の言葉もわかるように交流して、旅行して、暮らして、いまはそう思っている。日本語を学ぶ経験という外国語を勉強する経験も、英語を学ぶとき、役に立つと思う。まだ興味を持つ知識を勉強して。これからも大学で勉強した分析方法や考え方が学習生涯に役に立つと思う。

文化いわゆるある国の特色は最も直感に感じさせるのはすぐ目に映る景色だと思う、毎日身の周りにある建物、道はそういうことでしょう。これは自然から与えてくるものではない、人が作ったものだ、ですから、そのものは必ず他のところにいない、特別なものがあると考えていた。

文化もキャリアーが必要なので、前に書いたように、東京の国立西洋美術館に行ったことがある。国立西洋美術館は上野公園の中に作らせている、毎年春が来ていたときに、多くのひとは桜の木の下に座っ

ている。友たちと一緒に話をしたり、すしを食べたり。これは日本に特有の景色だと思える。そうかもしれない。ですから、東京を計画しているときに、その官員、そのデザインしているひとは、自分のところの中に、こんな景色があったから、東京のあるところに、ひとは春がくるときに、桜をゆつくり見るところを計画していたのではないだろうか。

当然だが、都市計画がただこのようなことを考えているわけではない。文化、資源、アクセスなど原因で人があるところに集まった。より多く人口があったら、より多くの機会が出てくる。小売店を作る、レストランを作る、工場を作るとか。このとき、都市はいろいろなサービスを提供する、仕事も提供する、都市の魅力も高まる。そのとき、さらに都市化が進んでいたら、小売店、レストランに商品、食材を提供するために、農耕する、工場を作る空地が必要なので、でも、都市の中心地の地価が高いから、都市の少し外に作る。このようなことになったら。都市の外部で工場、農場を建てる。都市はますます拡大していく。まだ、都市で道路、鉄道、上下水道などインフラを整備して、利用者数が多いほど、平均すると、コストが低くなって。これは「規模の経済」と「集積の経済」ということである。

都市の計画はその国の政治理念を反映する、同時に政治理念の方法が都市の形態をつくる。もし都市を形成すれば、すぐに政治、経済、社会、個体の行動基準や枠になっていた。

東京の都市計画もこのようなことを考えた上で、いままでの形に発展していた。都市によって、特定の地理条件、特定の歴史文化で、特定の産業を持つ都市がある地域に集まることがあった。イギリスのロンドンを例にすると、産業革命が最初に発生したイギリスで、商業の発展のために、融資、投資など金融サービスの需要がもっと求めていた。ですので、ここは世界最初の金融中心になっていた。そして、イギリスの植民統治の拡張で、植民地の商業の融資、投資の資本もイギリスのロンドンを依頼しなければならない。ですので、昔のイギリスの植民地が独立したと言っても、まだイギリスに深く影響されている。ですから、東京のような都市は、自国の視点から見ると、どう建設していくか、どのような役割を果たしていくか。世界の視点から見ると、東方の独特な都市として、まだどのようになるか。

『都市計画の世界史』を読んでいた。本は最初の城の誕生を代表する城壁から、近代都市計画を用いて、築いた都市まで。5000の時間のなかで、城と都市に関わる思想、形、人物があったか、そのことを書いていた。

日本に来たそろそろ3年間で、札幌、東京、京都、大阪。神戸に行ったことがあった。「都市はそれ自体、土地に付着し、個別性の強い性格を持っているが、時空を超えて他の都市文明とも相互に影響を及ぼし合っている。」²。本に書いたように、私が見ていたところも。繁華の東京都で、道に白いシャツを着ているひと、上野公園の周りに着物を着ているひと、原宿に変な服を着ているひと。大きい都市にいろんなひとがいた、いろんなものがいた。大阪も東京と同じ大都市だが、音が違う。大阪は東京よりほうがにぎやか、むしろ、騒がしいという形容詞もっとあっているかもしれない。これは、初めて大阪に来た、大阪が最初で私に感じさせたことである。他のことのもいろいろあった。これらのことは、その土地、その都市の個性だと言えるかもしれない。

本が城と都市に関わる思想、形、人物を紹介し、説明し、総結した。でもそれは全部過去のものである。本が書いた歴史と現在の都市から、私がほうが考えたいのは、未来の都市はどうなるでしょうか。超高層のビルが立てて、リニアモーターカーがビルの谷間に通り抜けている、買い物も家から出なくでも、ドローンで届けられる、家にARで教育を受ける。最近のニュースにあった、あるバス会社はシェア自転車の軌跡を調べた、そして、バスの路線を変えて、その路線の利用者数は昔の3倍になった。³ ですから、未来の都市は、立体的な、智能的な都市と思う。

多くの社会問題を解決していくことやもっと豊か生活を追求することは技術の進歩、経済の発展のために、これで実現可能になった。現在の都市はある国、ある地区、最先端の技術と大量な資金、まだ人材。これらの要素が交流して、新たな技術、商品を作って、都市から地方まで拡散し、わたしたちにもっと豊かな生活をもたらした。

現在の大都市は人口の集中で、住宅、交通、教育、環境の問題がいろいろ、社会の発展に対して、私たちがもっと豊かな生活を追求することに対して、大きい障害になってしまった。一体どうなるのはまだはっきりわかっていないけど、今の都市が存在していた問題を解決した都市と思う。そして、総合政策学部の基本理念が書いたように、「自然と人間の共生、人間と人間の共生」が最も重要なことと考えている。

1 [3]

2 [1 ページ: 8]

3 (2)

授業のコメント

日本語の授業を受けた一年間で、まだほかの授業で、日本の大学でどんな方法で勉強していくことが、ますます分かっていた。日本語の授業で、まずタイトルを選択し、資料を収集し、そして自分の考えと収集した資料をまとめた上で、発表する。

最初みんなが選択したタイトルや書きたいことは、ほぼ不明確や自分が何を書きたいもわからないことがあったと思う。しかし、一年間の授業時間を経て、範囲と発想を縮めて。考えも少しずつ、明確になった。聞き手の側から見ると、ほかのひとが自分の考えを縮めるや補足することもとても勉強できる過程と思う。人々が関心があることが違うので、でもその問題について、あなたも考えたかもしれない。ほかの学生の思いを聞いて、その問題に対しての理解は、より深くになれると思う。

でも、ほかのひとが発表する人に質問するときに、書いたものを全般に理解した上で、そして質問することは、このような質問が多くないと思う。

私の日本紀行

—当地の文化を感じる

梅佳煥

日本語学校の時、友達に旅行が好きなので、いつも私に連れて他の所に行く。日本語学校を通っていた時、いつも一緒に座って、先生は私たちに「君たちは本当に兄弟みたいだ」という話があったことがある。休みの日、私たちは多いところへ行ったことがある。奈良の東大寺とか、名古屋の名古屋城とか、様々な文化をみにつけて、とても楽しい。大学で、休みの時間が多いから、もしずっとうちにおいて、パソコンゲームをすると、頭が痛くて、体も悪くなる。旅行をすると、美味しい空気が吸うことができるし、ストレスも解消できる。そして、休みの時間を利用して、もっとたくさんの観光地に行きたい。

私は中国浙江省余姚市に出身だ。小さな町なので、みんなが生活しやすい。本を読んだり、旅行をしだり、市民たちは豊かな生活をする。大きなストレスが感じにくい。

日本の町によって、感じた気持ちが全然違うと思う。私は名古屋へ行ったことがある。本州の名古屋と言えば、中間地点の都市として存在している。そして、名古屋人の性格は関西人の熱心と関東人の慎重と合わせる。高校生の時、自分が旅行する途中、名古屋出身のおじさんとあった。おじさんは中国語の案内書を持った。しかし、中国語を話せなかった。そして、一緒に様々な所へ行った。おじさんは山頂にある寺を見に行かために、何回休憩しても、きっとできた。そして、名古屋人は最後まで諦めない人と言われている。おじさんが日本に帰って、私に手紙が届いた。私にとって、この手紙が宝物のようなことだ。

大阪で2年間に住んでいた経験がある私にとって、朝通学の時、大阪人の歩くスピードが非常に速いと思う。大阪は大都市として、毎日電車を利用する人が多いし、電車が数分間であるから、早く歩かなければならない。同じ関西圏の京都と言えば、お寺とか、紅葉とか、有名な物が多い。私にとって、女の子が着物が着て、ゆっくり歩くことが一番美しいと思う。京都が昔の首都として、伝統を守る必要がある。何回も鴨川の岸部に行ったことがある。友達と鴨川の岸部の椅子に座って、洋菓子を食べていた。知らず知らずのうちに、二人の美女がゆっくり歩いて、ニコニコしている笑顔が私たちに惚れた。友達は私に「どうだ」という話を聞いて、私は「京都の女性と結婚したい」ということを答えた。あの時、手中のお菓子に比べて、女の子たちは本当に天使のような人だ。

ただ美女たちではなくて、京都の美食も美味しい。私にとって、天ぷらが一番美味しいと思う。それは何故だか、京都の天ぷらは口触りがいいし、繊細な食感だし、人気がある。特に初夏の間に、天ぷらの専門店に入って、生ビールを飲みながら、アツアツな天ぷらを食べる。これは汗まみれの人が砂漠に歩いて、突然いっぱい生ビールを見たように感じられる。こんな気持ちが本当に素晴らしいと思う。私はこんな天ぷらを食べて以来、いつも夢の中に見たこと

がある。機会があれば、是非もう一度行ってみたい。そして、旅行の途中、人でも、食べ物でも、建物でも、自分に対して、多くの楽しめることが発見することができる。

日本語学校を通っていた時、先生は夏の北海道を勧めたが、私のイメージに、冬の北海道へ旅行したほうがいいと思う。そして、夏休みを利用して、一度行ってみたい。また、大阪に住んだ時、仙台の牛タンに関する店が多い。そして、何回も食べに行った。他の人から仙台で美味しい食べ物が多いと言われることがある。そして、仙台も行きたいと思う。

いつも二人で旅行いくことではなくて、友達が行けない場合、一人で旅行することも好きだ。友達と一緒に旅行することに比べて、一人で旅行する方はもっと自由だ。例えば、他の人と旅行の計画を話さなくても、自分が直接にカバンを負って、自分が好きな所へ行ける。例えば、友達と旅行する時、私にとって、食べ物のホルモンが嫌い。一方、友達はホルモンが大好きだ。私の食習慣のために、友達はホルモンを注文せずに、両方も食べられる料理を注文する。そして、レストランを決める時、人によって、偏食があるので、相手の好きな食べ物ものを考えざるをえない。一人で旅行したら、ただ自分が好きな物を選べることができる。また、一人で旅行したら、当地の人文文化に触れる時間も多し。一人旅行なので、途中で交流する人がいないので、自分が写真を撮ったり、当地の人を話したり、こんな時間が多いから、当地の人文文化を感じやすいと思う。

イザベラバードの日本紀行

29017172 梅佳煥

夏休みの間に、イザベラバードの日本紀行という本を読んだ。この本を選んだ理由はこの本の主人公は日本人ではなくて、外国人として日本に来た。外国人に視線でこの本を書かれた。そして、イザベラバードという人はイギリス人だ。本の内容によって、一八七八年四月の頃、体の健康を回復するために、イザベラバードは海外旅行をした。旅行地を迷う時、友人から日本を勧められたので、日本に来た。そして、イザベラバードは本州内陸と蝦夷を数か月かけて旅をした。また、イザベラバードは旅行しながら、当時の日本の様々な文化を紹介した。本の中に、イザベラバードは旅行の途中に、不愉快さ、退屈、困難、楽しさも体験した。

一八六八年明治維新から、日本の現代化改革はだんだん発展していた。西洋の技術はだんだん受けていた。イザベラバードは来た時、日本の鉄道とか、工場とか、盛んに作られていた。工業化を改革するながら、伝統的な物も存在していた。交通機関の中に、荷馬とか、人力車とか、普通で存在していた。イザベラ雨が降った時、農民は蓑を着て、街に歩く人は唐傘をさした。本の中に、内容に関する挿画もあるので、わからない場合、挿画をみると、わかりやすくなる。外国人に対して、日本の代表的景色と言えば、富士山が一番印象がある。本によって、イザベラバードも富士山の姿に惚れた。イザベラバードの日本紀行はただの旅行記事ではなくて、当時の文化も紹介した。例えば、ある男性はある女性に興味がある場合、男は相手の女性の親の家に錦木の小枝をとめつけて、それが無視された場合は男自身も無視されたが、相手の娘が歯を黒く染めれば、両親の同意を得られたということを書いた。本によって、昔の風俗と今の風俗に比べて、非常に違う。イザベラバードは旅行しながら、当地の人文、食べ物、植物などのことも注目して、本州の北の方

の地域、例えば、青森県、秋田県のコメの味が美味しい。140年前、イザベラバードは日本語はわからなくて、一人で日本に旅行をしたことはすごく偉かった。そして、たくさんの所を旅行すると、各地のメリットが分かるようになってきた。ただコメの美味しさではなくて、お盆を見たら、頭の中に何故お盆が行うという質問がある。そして、自分が問題を了解して、分かるになる。自分が旅行しながら、日常生活に気にせず質問を了解する機会があるので、知識も増やすことができる。

私は本を読んだ後で、当時のことも想像できるようになってきた。また、旅行の考えることも深くになってきた。人によって、旅行をする目的が違う。例えば、今の社会のスピードが速いので、ストレスをためる場合が多い。そして、旅行はストレスを解消しやすい。旅行と言えば、ただお金を準備したら、大丈夫だと言う人が多い。しかし、イザベラの記事によって、ただお金のことではなくて、自分の目的が何かという質問が自分で答えることが必要だ。自分が興味も持つことを事前に調べて、毎日の計画を立てることも重要だ。そして、私にとって、今から旅行をする前、自分は直接にカバンを負うことをしないほうがいい。計画がなくて、突然に旅行をするということのデメリットが多い。例えば、路線が分からなくて、ホテルの予約もないし。そして、後悔するかもしれない。逆に、旅行をする前に、自分で行きたい所の情報をちゃんと調べることがもっとも大切だ。十分な計画を立てると、時間も無駄せずに利用することができる。当地の人文文化を尊敬する必要だ。旅行地のルールを守って、文明的観光するべきだ。新聞によって、観光客は不文明的な行為はいつも見られている。当地の文化を尊敬せずに、文化の体験もうまくできない。日本の観光地によって、様々なルールがある。例えば、古いものを触らないこととか、土足厳禁とか、ルールを守って、文化を身に着けることはうまくできる。また、例えば、京都へ行く時、観光客は着物を着る体験機会がある。観光客は美しい着物を着て、綺麗な花火を見て、京都の人文文化は体験しやすい。また、日本の神社に行く時、福を祈るために、多くの人は箱にお金を入れることがいつも見たことがある。外国人なら、500円玉とか、100円玉とか、50円玉とか、価値は関係せずに、箱に入れる。一方、日本人は箱に入れるのが5円だ。昔の時、私は日本のおじさんに聞いたことがあるから、5円はご縁の意味だと答えられた。これは面白いことだ。また、神社に入った後、手洗い場へ行く人が多い。原因は知らずに人に対して、ただ手を洗う。調べると、この意味は汚れを落とすからだ。また、神社によって、拍手の数も違う。普通の神社は2回ですが、しかし、島根県の出雲市にある出雲大社は4回だ。これも出雲大社の特色だ。そして、ちっぽけなことに、面白いことが発見することができる。旅行の途中、わからないことは他人からもらえて、自分にとって、楽しくて、価値があることだ。

大学の4年間で、大切な時間を無駄せずに使って、好きな所へ旅行して、自分にとって、好きなことをやる。ただ大学の授業で学んだ知識が満足できず、旅行で見た知識も身に付けたい。日本にいる時に、様々な所へ行って、様々な人文文化を身につけて、もっと楽しい生活を過ごしたいと思う。

授業の感想

他人の意見はちゃんと聞いた後で、何回も直したら、もっといい文書になる。

選んだ本

イザベラ・バード.(2016). イザベラ・バードの日本紀行. 東京: 株式会社講談社.

柳沢 小実.(2016). 大人の旅じたく. 東京: 株式会社マイナビ.

山口 誠. (2010). ニポンの海外旅行. 東京: 筑摩書房.

認知することから解決できる

ユンヨムン

私は、メディアの役割の中で、社会問題を教えて、もう少し良い社会に進むことができる役割を重要と思います。私と私の周りの人から得た様々な問題を広く知らせて同じ被害を受ける人たちが生じないようにしたいことは私がメディアを学びたい一番大きな理由です

人なら誰でも社会の中で生きていく構成員になるしかないと思います。コンピューターやテレビ一つない山奥の原住民生活でも社会というものが存在することに構成員が一人じゃないなら、社会問題は絶対に生まれるものだと思います。私は今まで暮して、いくつかの社会問題を見て、また、私もそのような問題を経験した経験がありました。このような理由が私がメディアを学びたい決定的な理由になりました。

経験といえば私の友達は軍隊にいたとき、訓練を受けていたが、片方の耳の聴力を失うことになりました。しかし、軍隊では私の友達に何らかの補償もしてくれませんでした。担当する業務のみを変更されただけで、金銭的な補償や他のいかなる補償もなしに聴力を失ったまま1年10カ月の軍生活を終えなければならなかったです。こうした場合は私の友達だけの問題がありません。本当に重要な20代の20%を1カ月に10000円~13000円を受け取り、24時間軍隊で訓練を受け、すべての生活に統制を受けているにも関わらずそれに対する補償と福祉は先進国を目指す国にしては後進国よりできなかったのが現実です。しかもこのような男たちを無視する女たちに多くの失望感を感じる今日ごろです。憲法でも、男女いずれも国防の義務を持つと書かれているが、実状は海外旅行率1位が20代の女性、社会進出が2年遅れている男は絶対に家を買わなければならないという現実、男は軍隊で殺人技術を学ぶという言葉を聞くこと、休暇を出た軍人にコーヒー1杯無料というイベントも女たちの不公平という反発でなくなることもありました。このような仕打ちは絶対に戦争をしている国とは思えないほど不便で安易な現実だと思います。

他の経験は以前にほかの大学にいるとき、現場実習をする期間に私は建設会社で実習をしていました。その中でしっかり固定されていない階段から落ちた私は治療費もほとんど得ることができませんでした。教授もどうでも仕事を縮小させようとばかりするのを見て私は大きな失望感を感じたし大学を辞めるようになった決定的な理由になりました。また、徴兵のための身体検査が兵務庁再び行われることになったんですけど結果が確定される前まで1年の間、私はそのどのようなものもできませんでした。芸能人の兵役忌避で基準はひどくなるが、いざ芸能人たちは軍隊に行くまいとあらゆる手

段を使う事件もたくさんありました。もちろん私が経験して、周囲の人が経験したこのような問題以外にも多くの問題点は今も当然あると思います。

私はこのような不当さを経験することを暴露したいと思います。不当さを知らなかったり、これを知っているのに、解決しようとせず放置すれば、その問題点はいつかは、みんなに不利さで行って来ることができます。したがって、私たちは何を解決するとき必ず問題点を知っており、それを見つければならず、それらを私が直接解決できる役割をすることはできなくても人々に知らせる役割を果たしたいと思います。したがって、私は全般的なメディアを習って究極的な目標、ドキュメンタリー製作を必ずしたいです。一般的にニュースや新聞で文字だけでその状況を効果的に伝えるには限界があると思います。学校で勉強して、他の大学で作った映像とかを必ず報告動画を作る過程も学びたいと思います。したがって、私は、ドキュメンタリー製作をしたいのに日本の放送局で就業をしたいです。昔から日本の様々なドキュメンタリーを見たし韓国より放送する回数ももっと多いに日本の放送局だったら私が学ぶことが多いと思いますその中で私は、福島原発事故に関連されたドキュメンタリーを見る機会があったが、かなり感銘が深かったです。私がずっと日本にいても韓国にいても私が属した社会をもう少し好きに私が作ったもので、助けを与えることができれば、その達成感は言葉で表現しないと思います

そのため、これから大学4年間は私が望むことを思いながら生きていくことができるように準備できる重要な時間だと思います。メディアはもちろん、必ず必要な英語も勉強して色んな人に会い、彼らの文化も理解しながら経験を積むことができる少ないゆえ、今後、4年は比較的短いように感じられるかもしれませんが、私にできるのは最大限努力すること。それだけでも確実にしたいと思います

今度の夏に『原発プロパガンダ』という本を読んで会社と企業の宣伝で事実を公表せず、その事実を歪曲して全く異なる事実を作り出すケースが何があるのか考えてみました。様々なドキュメンタリーとニュースを探して2013年3月に起きた福島原発事故が一番適切と思いました。

その時私は韓国にいました。原発事故が起きた日から何日間、メディアでは原発爆発が起きた日からチェルノブイリ原発事故規模を上回っている人類最悪の原発事故とはニュースが毎日休む間もなく報道されました。国内と国外専門家らの事故原因の分析、最悪のシナリオ、日本の対処など多くのことを見ました。ナショナルジオグラフィックで放送をした福島に関するドキュメンタリー番組では当時、日本にいたスイス人が事故直後に欧州で報道されるニュースと日本で報道されるニュースを総合して見ながら日本では縮小発表ときちんと究明をしていないものが多いということを指摘したし、何年経った今までも現在進行形だという意見が支配的でした。しかし、事故が起きた後に時間が

あまり経っていなかったにもかかわらず、放射能の半減期と事故の規模に比べれば、とんでもなく短い時間だったが福島で生産された農作物を食べながら大衆を安心させるCM、放送がON-AIRされていました。

確かに国家は、国民を安心させなければなりません。しかし、嘘で安心をさせるのはさらに悪い結果をもたらす恐れがあると思います。放送で農作物を食べた芸能人は数日後に被ばくの判定を受けて、また他のアナウンサーは白血病の診断を受けました。安全と国民は安心させようとする試みが、むしろ毒になって正反対の効果を産みました。福島原発事故の主な犯人である東京電力では初めての福島原子力事故を4段階で発表したが、米国とフランスの専門家たちの多くの指摘に結局、認め、7段階に修正しました。そして当時首相は、原発で爆発が起きた1時間後まで東京電力で何の報告を受けていなかったのは韓国でも少し有名です。果てしない偽りでなんとか危機を回避しようとした東京電力のイメージは失墜し、その年に環境団体エネコンとグリーンピースに世界最悪の環境破壊企業の賞を受賞するほど東京電力は安逸さの頂点を示してくれました。ずっと問題を認知し、事実だけを報道したなら、今よりはずっとよかったのという意見が支配的であるため、それにおいてメディアの役割は本当に重要だと思います。

最近ドキュメンタリーを見ると、同じテーマを何回もしたり、数週間にわたって放送することをよく見ることができます。もちろん放送局が無料で運営されるシステムがないことをよく知ってます。どの企業であれ企業の第1の目標は利益です。話題性が高いことを放送したら、視聴率が上がるようになって放送前後のCMのオファーが増え、自然に放送局の利益が上がることです。そのため、最近放送家たちのドキュメンタリー多様性は大きく違わないです。私がもし、放送局に就職して私が制作したいのに対して不十分な根拠として制裁が入ってくるようになったらYoutubeというプラットフォームを利用、その場所でも私が望むことを見せてあげたいと思います。Youtubeが成長するようになり、1人のメディアという言葉が生まれ、急激に成長しました。携帯電話一つだけあっても撮影と送信が可能で、かつ視聴者の立場でも、どこでも見ることができるとに接近性はTVよりさらに強力で波及力も最近の推移を見ると、TVにも負けなれないと思われれます。それで多様性を尊重していなければそこでも見せてあげたいと思います。

メディアの一番大きな力が何かと何かと私に質問するなら私は波及力と言えます。私たちが生きてみて直接見聞きする情報としては、世の中を生きている難しいです。メディアはあなたがどこにいても、情報を届けてくれて、また人と人を連結させてくれる重要な媒介体だと思います。これと一緒に何を大衆に伝え、どうアピールするのかということがメディアを作ることに重要なポイントだと思います。それで私は大学で広告や映像制作のようなメディアを学びたいです。2年生の時のメディア学部に進学して広告と現代メディアに対する勉強をもっと深くする計画です。私の友達が

経験したことと、世界中で起きている様々な事件、ほとんどの社会問題において私は解決が可能だと思います。天災は防げないが、人災は防ぐことができると思っています。もちろん、すべての社会問題がそうであるように、短期間に一度に解決することはできないのです。可能性がどんなに低いとしても、結局可能かできないかの50:50と私はいつも思って来ましたが今もその考えには変わりはありません。それで一抹の可能性があるとすれば、社会の問題は、大部分解決が可能だと思います。その方法でメディアが占める部分は決して少なくないはずであり、今後もさらに大きくなるものなので私はこのようなメディアを学びたいと思います。ドイツのナチス政権フアウルゲッベルスの有名な言葉の中には"うそと真実の適切な配合は本当に大きな効果をもたらしている。"という言葉があります。私はこんなことを否定して社会問題の解決に真実だけを報道し、大きな助けになる人がなりたないので、メディアを勉強したいです。

『原発プロパガンダ』著者：本間龍，出版社：岩波書店 2016

授業の鑑賞

4月までは韓国の日本語塾で日本語の勉強をしたのが全部だったのが、大学に初めて来て同じ留学生たちと教授に専門的に教育を受けるのは初めてだった。それぞれ国籍は違うけど、同じ日本語を習いながら会話と作文、発表など、今後社会に出て使用しなければならない基礎的なスキルを学ぶよい機会だと思った。まだ日本語を学ぶものの中には、基本的なものを学ぶ1年だったけど、かなり意味がいて、多くのことを学んだと思う。日本語の教授たちはいつも親切、留学生にあって心配なものを手伝って教えてくれたし、留学の初めの頃に、心を得られない私たちに高等学校の担任の先生のように1:1で応対してあげたりもした。とても良い日本語授業だった。同じ教授に4年間ずっと授業を受けたいほどありがたいことがとても多かった。本当にありがとうございました。

豊かな人になる

総合政策 李 夢昊

実は私はあまり真面目な人間じゃないです。生まれからしっかり勉強したことがありませんでした。この関西学院大学で勉強して私にとってはとても幸運なことだろう。それで、大学でわたしは自分の将来、一体何かをしたいだろが真剣に考え始めるべきです。

まず大学で海外ボランティアを体験したいです。大学でたくさん時間があります。人生の暑休みと言います。私はこの時間を利用してボランティアをやってみたいです。海外に行って視野を広げます。自分の国や日本とほかの国の違い見たいです。有意義の人生を送りたいです。そして自分好きな分野の専門知識を勉強したいです。将来の目標を目指して頑張ります。

世界で有意義なことがたくさんありますが私は一番やりたいのは国際ボランティア活動です。私は幸運な人です。中国で生まれるのはほんとに幸せです。中国は強く大きい国です。戦争がなく経済も豊かです。でも世界でほかの苦しい国まだあります。世界はユートピアじゃないです。でも人々の心でやはり理想郷みだ世界があります。私もおなじ戦争がなく人々が幸せ世界がほしいです。それで私はボランティア活動をやりたいです。あのたち苦しんでいる人々に助けます、あの理想な世界もっと近くほしいです。

昔コーチューブでアフリカの子供が踊るビデオを見たことがあります。服がボロボロで靴もないです。後の部屋は 藁葺き で作ったのです。でも彼らの舞はとても上手です。笑顔も素敵です。こんな素敵な笑顔を持つ子供は教育もないしご飯も食べられないです。私はこんな光景を見て心がいたいです。私はこれらを助けたいです。もっといい生活を過ごすことができます。そしてかれらたちなぜ生活はこんなに貧しいのにこんな嬉しい踊ることができるか疑問がうまれました。現地に行って、自分の目で確かめます。特にアフリカ大自然の環境問題も気になります。地球でいま一番自然的な場所はアフリカです。その人類最後の浄土を守りたいです。自分の子供に地球の姿を見ま、地球はビルだけじゃないです。自然問題いまとても大切と思いきす。

大学の時間はとても短いです、わたしはその有限な時間でいろいろなことを体験したいです。特に海外ボランティア活動をやってみたいです。いろいろな国へ行って中国と違う風景を見ます。ほかの国の民俗や文化を了解します、自分の視野を広げます。私はただそのままの普通の旅行は嫌いです。普通の旅行は写真を撮ったり金を使いたり、私にとっては無意味なことです。ただ人生の無駄使いです。私は昔日本へ一度旅行したことがあります。1か月ぐらいかかります。現在は日本に3年に住みました。感じはぜんぜん違います。昔旅行のときは新鮮感があります。写真をたくさん撮りました。物をたくさん買いました。そしてうちへ帰った後何も残らず。いま日本にも三年に住みました。こんな新鮮感もないです日本のいいことや悪いことが知ることができます。旅行はかならず自分の人生にとって有意義なことをしなければなりません。海外ボランティア活動は旅行としてやって、または困る人に助けます。世界中いまは沢山不幸な人間や事情があります。例えば戦争や自然災害によって家がなくなった人がいます。人類の発展によって動物の生存環境が破壊されました。私はかれらたちに何かを助けたいです。特にアフリカへ行きたいです。ビデオ中に見たことを自分の目で見ます、耳で聞きます。現地に行って自分ができることをやってみます。そして大学で勉強したことを利用して、ほかの人に助けたいです。昔中国に司馬遷という文学者がそいう「人は元より一死あれとも、或いは泰山より重く、或いは鴻毛より軽く」。私は泰山のような重く人生は大分不可能です。でも私は自分の命をもっと重くほしいです。私はなにもしなくてただ毎日同じことをやっご最後そのまま死ぬ結局はいやです。人生はいつか突然終わるかもしれないです。でも私が生きるのときは世の中のところをもっと知るもっと楽しいものほうがいいです。私の座右の銘は二つがあります。「いまに生きる」と「life is game」この言葉は私の生き方を表しました。ゲームはいつか gameover に迎えます。でもひとはなぜゲームをやりますのか。やはりゲームの中には何か自分に対してよいことがあります。人生は一度しかないです。いつも真面目で疲れてはほんとに残念です。人生で遊ばいいです。自分がやりたいことをやればいいです。人生で過ぎた経験はゲーム中の装備みたいなものです。自分をもっと強くなる。そしてわたしはボランティアこの装備は一つレア装備である。それで、私は日常の生活はいやです、そのまま毎日同じのことをやるのは人生の無駄使いです、人生の時間は有限です、この有限な時間で自分をやりたいことをやるのは大切です。普通な人生を一時やめて新たな生活を過ごします。大学の4年間にボランティア活動をやって自分の人生にとって何かは有意義なことを探します。そして自分の人生で有意義なことをやります。

それでこの人生の意義は一体は何ですかの疑問が生まれました。私は有意義な人生を送りたいですが、でもこの意義は私に対してはどんなものですか。ボランティア活動はただ人を助けるだけじゃないです、ボランティアに参加するとこの経験は自分人生の一部になる、この経験は命の中に隠れています。自分の人生はより豊かになり。この旅行こそ、自分目の中の世界はまた新しいことに表した。単に生きているのではないです。そして海外ボランティアも海外旅行に見ることもできます。これで私も旅行の意義を探したいです。旅行は人生に何効果があるのか?楽しいか?私はそう思うじゃない旅行は金を使ってもとても疲れることです。そうなに疲れでなぜ人は旅行するのか。私は新しい人を見て自分と違う文化を感じては旅行の意義だと思います。人は世の中一番おもしろい生物です。

人々の性格や考え方は違います。新た人に知り合っは奇妙な体験です。新たことを発現すると自分も豊かになります。旅行の意義とボランティアの意義を加えて二倍になる。一つ国を旅行をすると三四日の時間は足りないです。ただの「馬上花を見る」と思います。この国の文化を知りは大切なことです。旅行後ろのことを探すはほんとにやるべきこと。毎日 SNS で誇るじゃないです。自分何かをもらえるのは考えるのほうがいいです。

二年生になった私はメディア学科に入つつまりです。現在の世界上でメディアはとても大切な存在です。メディアがあれば私たちに家で世界を知ります、世の中で行くことをわかります。そもメディアいまも嘘と真実があります。私はメディアを利用して真実を人に伝えます。メディアの中に私は一番興味を持つのは写真です。写真と新聞やビデオと違います。新聞とビデオを見るは時間をかかります。でも写真は一瞬間で見られます。人に伝えることはもっと印象を残ります。それで私は写真を撮るのは好きで、写真で他人に世の中で行くことを伝えます。写真が好きからいろいろ素晴らしい写真を見ました。難民の 写真で難民の苦しさを感ず、環境破壊の写真や動物を殺すの写真もたくさんみました。それ写真は私にとってとても大きい衝撃を受けました。写真で自分と違う世界を見られます、自分が知らないことを知られます。私はいつも NATIONAL GEOGRAPHIC を見っています。この中の写真はとてもきれいで衝撃があります。世界での各地で写真を撮ります。海や火山や人が届かないの写真を見て大自然の奇妙を知ります。でもこの中自然破壊や動物が消っていくが見られます。私もこんな写真を撮りたいです、ほかの人に伝えたいです。写真で道具としてもっと多く人の力を利用して、苦しい人や動物を助けます。

国際ボランティア活動はとても有意義なことです。普通は自発的に参加する公共的な援助活動。自身の志意にかかわっています。でもただやりたい気持ちがあればボランティアをやるのは難しいです。ある人に役に立つ技能が必要だと思います。技能があれば社会に貢献すること。特に国際ボランティアはもっと有意義である。異なる文化に接触することができます。自分の常識を超えてもっと広い世界が見えます。自分の価値も豊かになれることもできます。さらにボランティアはたくさん領域で表しています。

私は特に興味がある領域は村落支援と国際ボランティアです。現在の発展途上国の国建設で福祉と教育などはまだたくさん問題があります。そして私は建築関係の問題を解決したいです。上水道敷設、トイレ建設、集会所、学校等公共施設建設、道路補修など全部はこの分野にあります。これみたいなボランティアはとても計画性が必要だと思います。そして事前の調査はとても大切だと思います。そうしないと場所によっては紛争に巻き込まれる可能性もあります。

それてほかにはまたいろいろなボランティアがあります。保健医療協力、教育協力、子どもとかまだたくさんあります。それで私留学生にかかわるのは国内の外国人に対する国際ボランティア。日本でいまは大量な外国人が暮らしています。日本の福祉や医療などを受けることが問題はどうか?国籍や民族などの異なる人びとが対等することできるかどうか問題になりました。そして公共施設での言語問題とか医療の言語交通問題もたくさんあります。それななどの問題いまもいろいろな解決方法があります。多言語医療問診票や多言語生活情報とか私は外国人としてとても役に立つ。まだは外国人は日本との文化の差がありますので日本のルールとか理解しにくい可能性もあります。そしてこれを解決するも大切です。

国際ボランティアは文化の壁を超えてもっといい世界を作る大切なことです。人々の関係をもっと近くになります。自分も新たな世界を見られます。

1. 山田恒夫, 国際ボランティアの世紀. 2014, 3.

日本語授業は私にとってとても有意義である、日本語をよりよく使うと日本のことをよく理解できる、日本語授業で日本語でレポートを書くと大学生活もとても役に立つである。

2 クラス

担当 勝部 三奈子

社会問題の学び

李先佑（イソンウ）

私は韓国人である。私は2年前、高校3年のとき受験をして韓国の大学へ合格した。しかし、あまり評判のいい大学ではなかった。当時の私は'その大学に入学するか。それとも他の事を探してやるしかないか。'二つの考えで悩んでいた。その二つの考えで悩んでいる私に高校の友達に日本の大学への入学を勧められた。私に日本の大学入学を勧めてくれた友達は日本語に興味を持っていて勉強して、本人も日本の大学に入る試験に備えているところで、悩みがあって落ち込んでいた私に気軽に勧めてくれた。偶然にも私の父親の友人の息子も日本への入学を目指していて、私の父親にも勧められた。昔、自分の親戚の中で日本へ住んで、私に簡単な日本語を教えてくれた親戚がいた。あのとき学んだ経験もあって"他人に比べて楽に学べるかな。"と考える一方、"外国は怖いし、合格するに長い時間が経つんじゃないか。"という新たな考えが私の頭の中にできて、その両方の考えで再び悩み苦しんでいた。しかし、いろいろ悩んだ後、日本への入学を決心という答えが私の頭の中から出た。なぜかというところ、日本は社会、経済、科学、国民意識など色んなところから韓国より先を進んでいるからだ。私の将来の夢はアナウンサーや記者や放送局に関わる仕事、などの色んな形で大衆に情報を伝える仕事がしたい。しかし、去年韓国で起きた大統領弾劾事件は政府の圧力によって報道しにくかったのをある勇敢な放送局の報道により、全国に知らせるようになった。こういう事件以外にも今後、韓国で様々な社会問題が起こるかも知れないが、その社会問題の解決方法がすでに日本ではあると考える。そのため、今後起こる社会問題の解決方法を日本に行って学びたいと考え、日本の留学を決心した。

私は子供の頃から人の前に出るのが好きだった。昔からテレビに出て色々をやってみたいと考えていた。また、昔から韓国で起こっている様々な社会問題に触れるとそれについて色々考えることがいつもある。例えば、少子化問題についてのニュースなどを聞くと、その問題が起こる原因や理由を考え、その問題を解決する方法などを考える。このように社会問題の原因と結果に興味を持っていて、それを調べたり考えるのが好きだ。また、韓国の大統領弾劾事件で政府の圧力で報道できな

かったのを勇敢に報道をした放送局のアナウンサーや記者の話をした。その話を始めて聴いた時、その放送局に対する感謝と尊敬ができて、私もそういう人達みたいに関わりたい、隠している情報を勇気をもって報道する人になって、マスコミに関わる仕事に就きたいと考えた。将来には放送局会社に就職し、アナウンサーや記者になりたい。そのためには高いレベルの教育が必要だと考える。その一環として韓国の先を走ってG7の一員でもある日本の大学への入学はいろいろなことから私の役に立つと考えた。今はまだどういう内容を学ぶかを教えてくれなくて内容は詳しく分からないが、タイトルから見ると、'情報福祉社会構築論'に興味があり、自分に必要だと考える。なぜかという、上記に書いている通り、正確な情報だけを報道するという志を持っているアナウンサーや記者になりたい。そして、そういう志を他の人にも持ってほしい。それで、難しいかも知れないが、私が直接、誰でもそういう気持ちが普通に持てる社会を作りたいと考えて授業を受けたいと考えた。韓国の大学に合格した私にちょうどいい時期に偶然にも与えられた日本への留学はいいチャンスだと考えた。それが日本への留学を決心した理由である。

大学へのちゃんと合格した以上、今から大学4間の間でやりたいことは学びだ。大学は自分で講義を決められる。その機能を十分に生かして放送局に入るために必要な講義を探して勉強したい。現在は1回生のこともあり、大学というところが始めてということもあり、まだ漠然で何も詳しくは決まっていない。とりあえず、今は気軽に自分に簡単そうな科目を選んでそれらを勉強し、学校にシステムに慣れながら今後自分の必要な勉強が何かを探したい。

2回生からはメディア学科を選びたい。上記に書いている通り、放送局に就職したいこともあるが、学校のホームページで見た'メディア学科の目的は私たちが抱えている諸問題を総合的に考察し、解明した事象や政策を映像・メディアとして社会に発信するための知識や技術、政策立案能力を身に付ける。'というスローガンがある。そのスローガンを始めてみた時からの私は自分が目指しているアナウンサー、記者が持つべき志にとってもあっていると感動をしてメディア学科で勉強をしたい気持ちになった。学科の科目の中で上記に書いている'情報福祉社会構築論'から'メディア文化政策意思決定学科'や'社会モデル分析'等を学びたい。これらも私が求めている社会の構築に役立つと考えて学びたい。

学校を卒業したあとは、韓国と日本両方どちらの国で就職しても構わないが、できれば、韓国での就職を考えている。なぜかという、韓国の放送局に就職し、日本のことに関する報道をする記者になりたいからである。日本のことを調べたり、日本へ派遣などの形で日本の様々な出来事を報道したい。また、これから韓国で起こる社会問題の解決方法を日本が持っている、その解決方法を韓国の社会に提案してみたい。

今回、三つの本を選んだ。一つ目は「メディア社会の歩き方・その歴史と仕組み」(伊藤武夫)だ。この本は新聞、放送、メディアの各側面からのメディアの見方をわかりやすく掲示した入門書だ。二つ目は「メディア社会・現代を読み解く視点」(岩波新書、2006年)だ。この本は加速していく情報化社会のなかで私たちはメディア現象をどう捕らえ、どう接するべきかを工夫して鋭く読み取るかを提示してくれる本だ。最後は「マスコミは何を伝えないか・メディア社会の賢い生き方」だ。この本は誤報、やらせ、報道被害等の最近起こっているマスコミの問題について報道の仕組みやその問題点について検証してマスコミを含むメディアとの賢い付き合い方を探る本だ。

以上の三つの本の中で私は三つ目の「マスコミは何を伝えないか・メディア社会の賢い生き方」という本を読み、そのレビューをしたい。

「マスコミは何を伝えないか・メディア社会の賢い生き方」は2010年9月に岩波書店で発売された下村健一の本だ。その内容は時間が経つにつれ、人々の心はだんだんとマスコミに対して不信が高まっていく。それでマスコミに働いている著者がマスコミという立場とそれを受け取る市民、両方の立場から現在のマスコミの問題点を改善する内容だ。著者が言いたいのはマスコミが何を伝えてないかを考える必要があるということだ。わかりやすく例えをすると、上記にも書いていることだが、私の母国である韓国で最近起きた元大統領の弾劾のことがその例である。当時の朴(パク)大統領の悪行をマスコミに報道しないように朴大統領を含む、政府の職員たちが圧力をかけていた。あの圧力があって、今は全国に知らされているが、一瞬、マスコミは伝えるべきのことを政府の圧力に怯えていて伝えていなかったときがあった。この本はそういうマスコミの問題を改善しようという内容だ。また、マスコミだけではなく、マスコミが報道する内容を見ている我々、視聴者にも責任があるという内容もある。どういうことかという、間違った報道をするマスコミも問題

だが、その誤報を見て煽られる大衆にも責任があるということだ。そのため、著者は大衆がメディア・リテラシーを持つことを望んでいる。

私がこの本を選んだ理由は、本の中に書いていることが私が目指すアナウンサーや記者が持つ志と一致しているからである。どういう部分が一致しているかという私の場合は'韓国で大統領の弾劾事件が起こり、私はその時からマスコミに対する不安や不信ができてしまった。そのことがきっかけとなって、自分でマスコミの関わる会社に就職して、そういう隠されたことを暴き、大衆の前に暴露して大衆に安心して携える報道がしたい。'が著者の気持ちと一致していると考え。それを叶うためにも「マスコミは何を伝えないか・メディア社会の賢い生き方」で携わっている事件とその解決方法を学んで参考にしたい。この本の中でメディア・リテラシーという単語が出る。メディア・リテラシーとは、世の中にある沢山の情報メディアを主体的に読み解いて必要な情報を引き出し、噂や間違った情報の真偽を見抜く能力のことだ。下村さんが言う通り、私もメディア・リテラシーという能力を身に着けたい。そのカギとなるのが日本への留学だと私は考えた。上記に書いている通り、大学でメディア情報学科に入り、授業でメディア・リテラシーを身に着けて、鍛えたい。どんなカリキュラムがあるかは今はまだわからないが、それらしい授業を選んで色々学びたい。

今年の4月から始めて、今までこの'大学でやりたいこと'のレポートをやりながら感じたのは、自分の初めてのレポート能力に比べて、今の自分のレポート能力がいつの間にかパワーアップしていたを気付いた。最初はレポートを書いたことがあまりなくて、どんな風に書いたらいいかわから書くコツもなく、今より書くのに時間がかかった。しかし、今はどういう風に書いたらいいかがすぐにわかるようになり、時間も昔よりかからない。また、他人のレポートを見ながら問題点をコメントをすることを繰り返し替えるので、他人はもちろん自分のレポートで問題点があったら、その問題点が見えて、どう直したらいいかがすぐわかるようになった、気付かないうちにこうやってパワーアップのは、私のレポートの枠を決めて下さった先生と私のレポートにコメントをしてくれたほかの学生のおかげだと考える。とても貴重な時間だった。ありがとうございます。

おう こう

王 康

大学のANA夢

日本留学目的

日本の特殊な文化は確かに様々がある、しかし、私にとっては日本の航空会社に引き付けられる。その中でも日本の全日空会社「ANA」に一番に憧れている。初めて全日空という航空会社を知った時は、2003年の日本の職業ドラマ『Good Luck』である。このドラマは同時の社会人中に強烈な反響を引き起こした。『Good Luck』はこのドラマで日本の社会に全方向的に全日空の現代経営理念、航空部門のつながりと会社の仲間の絆をはっきり示した、私もこのドラマを見たことがあるから、この航空会社に入りたいと思って。そして、全日空は『Miss Pilot』様々なドラマと映画を通じ自分自身の会社影響を広がった、立派な会社で働きたいから、一つの理由が全日空だ。全日空の国際部で働くことは私の一つの夢で、私の日本への留学の希望も全日空に入ることだ。全日空の国際部を気に入っているかの理由は、自分が飛行機について物が好きだ、同時に国際に関する仕事も好きだからだ、しかし、その場合は長時間海外で働けなければならない。個人としては家族の側に待っているも大切なことだ。もしかしたら、私は航空会社の国際部に入ったら、毎日国際の航空ファイル进行处理することができるし、自分の家も帰られるし、二、三年間おきに、海外の航空会社に出張できる、家族一緒に暮らしも邪魔しないですから、航空会社の仕事は私に対して、全ての希望点を満たす仕事だ。

全日空参観

最初は日本語があまりできなかったが、毎日全日空の公式ホームページを読んで、この中で様々な情報と専門な言葉を習得した、そして、全日空のマイレージカードを手に入れた、これは私に一番嬉しいことだ。今まではこのカードまだ大切に保存している。

そして、2015年の夏には、基礎的なビジネス日本語と書く能力は行けると思ったので、すぐに全日空会社の事務に全日空の話しを詳しく知りたいことについてメールを送った。最初から、返事の希望を持ってなかった、なぜなら、このメールを送り目的はただ自分の趣味だけで、そして、全日空はそん

なに大きく会社が私のような人に一人一人を返信するはありえないはずだと思ったからだ。しかし、全日空のスタッフは翌朝に返信しただけではなく、私に夏の全日空見習いを紹介してくれた。このメッセージは私にとって本当に夢のようで、自分の長年の趣味と夢に少しずつ近づいた。

このきっかけで全日空の格納庫とメンテナンス整備場へ見習い機会をくれた、そして、東京へ行って参加した、この見習いを通じて全日空会社の整備、ルール、基準を一度大々的に了解した、全日空の理念を初めて身を持って実感した。

大学努力方面

その日で二つ講座を聞いたが、それらは私にとって大切な思い出となった。その一つは現在の航空会社の職業分類と分析だ、まずは現在欧米のみならず日本にも規模が大きな航空会社の一般職国際部の係員の募集基準としては、高いレベルの外国語の能力、国際視野の分析力、そして地域地理の知識を身に付けることが求められている。それとも、総合政策学部は良い国際資源とチャンスを提供しているので、私はきちんと利用したい、国連プログラム関連の授業を勉強し、自分の国際分析能力を努力して勉強するつもりでいる。

まずは国際視野の分析力方面、来年から国連プログラムに進みたい、この専門の中で私は国家と国家企業間の協力の方式を理解することを学ぶことができます。航空会社の業務を開拓するため、主に国際線の発展に頼る。

同時に外国語の能力、国際についてファイル処理する時、簡単なフランス語も必要だ。フランス語は世界で最も厳しい言語、国際のファイルを作る時必ず一つのバージョンはフランス語だから、フランス語の基礎レベルを習得することが必要だ。

見習い日は飛行機のシュミレーターを体験した、この中では全部英語のコミュニケーションだ。今の英語のレベルは普通の着陸と離陸の指示を理解できるけれども、もし緊急事態に遭ったら、英語で全然喋れない、後は完全的な話すことができない、自分の英語限界値を見た。だからこそ、大学期間で英語に関する授業は不可欠である。この4年間は言語の授業、通常の学校のテストを修了することだけでなく、言葉対応専門テストのICAO「国際民用航空組織」の英語のテスト能力認定を認めたい。同時に、全日空の毎年の就職情報も続けて集中するつもりでいる、できれば、毎年夏に全日空の東京本部へ行って、見習いを続けたい。

全日空の参観後、私は大学の最も重要な専門方面は言語力だと思って、単純な会話ではなく特に様々な言葉を用いて、様々な国の情報を読み、理解し、自分の仕事の中に運用できる。

以上、私は4年間でやりたいことです。

本の選び

私が見習いと講座を通して、私は全日空に入る必要な基本専門知識を学ぶことが分かった。でもこの会社の文化を理解できないことは、この会社の仕事をもらうことも難しいと思っている。全日空は私にとって夢だけではなく、もっと私の1つの長い目標である。

だからこそ、学校で知識の方面を頑張りたい、本の方面、全日空会社内部を了解したい。二つの努力方面を一緒に進みつもりでいる。最後の目的は全日空に入社である。

「仕事も人間関係もうまくいく ANA の気づかい」この本は私に述べた全日空グループに入りたいために、仕事の専門知識に加えて、同時に私によりわかって全日空航空会社の内部文化。私はずっと多くの方面からこの会社を知りたいと思っている。この本は私にとってどの会社に必要な専門知識を検討するが必要ないと思っている、私は主に別の角度から見て、別の全日空会社に必要な知識を勉強したいと思っている。

全日空会社の基本

全日空、全日本空輸（ANA）は日本の航空会社だ。全日空の親会社は「全日本空輸」。全日空はアジア最大の航空会社の一つである。全日空は「スターアライアンス」航空同盟メンバーの一つとして、2007年3月、全日空に22,170名の従業員がいます。1999年10月、全日空は正式にスターアライアンスが加盟。全日空と同時に世界500強の会社一つ、その会社中でアジアのエリアで唯一の1家5つ星の航空会社。

この本の中で紹介する内容について、私は6つのポイントをまとめた。

- 1、安全性と信頼性に基づき、オールニッポングループは、乗客にとって魅力的な環境を作り、フレンドリーなサービスを提供し続けます。
- 2、世界中の人々によりよい体験を提供すること。
- 3、安全性と信頼性に基づき、全日空グループは安全性を最優先に考え、
- 4、ガイドとして乗客を取る、社会に返済し、新しい挑戦を満たす。
- 5、意思決定に自信を持って、議論に強い関心を持って、実装する信仰；
6. 競争力のある人材とコラボレーションを有効に活用し、全日本グループを強固にする。

全日空会社サービスの特徴

「この本は、ANAの行動指針をまとめた本であり、社員の体験エピソードやビジネススキルを分かりやすく解説している。特に目新しく学べたことはないが、相手を思いやること、一歩先を創造して行動することは、プライベートでもビジネスシーンでも土台なんだと改めて復習になったこの本は特別に人を観察する方法を重視して、」

— 読書メーカー タテさんの感想・レビュー

「相手の要望の言外に、本当の目的が存在する場合がある」-P86 ということが書いてある。

観察や時には質問によって、人の本当の目的を叶えようとする、例えば、ANAは約100種類の人々が喉が渇いた時、水を飲みたい様子を分析した、イラストモードを利用して説明する、だからANAは5つ星の航空会社です、サービスに基づいて、人間の心理的発掘すると思います。

本のレビュー

またこの本にはANA社員たちが日々実践してきた経験がまとめてあります。この本は全日空の『口伝の技術』と呼ばれる。

『気づかい』とは、想像すること、耳に心地よい言葉ではありますが、どうしても曖昧なイメージが付きまっています。なぜなら、『マナー』はマニュアル化されていても、『気づかい』は個人の裁量に任されていることが多いからです。』-P006

ANAは航空業に対しては、面白い会社と思っています。この会社中には、どんな職業のスタッフも必ず、サービス業の職場とプロ航空技術の職場の体験が必要です、本は『仲間を気づかわない人は、お客様も気づかえない』と『プロは常に逆算して決める』、この二つ章節を気に入ります。

「簡単説明は気づかいは本来、人から自発的に出てくるものです。そのためこれまでは、属人的で『気づかいは生まれつきのもの』『個人の属性』というのが一般的だったかもしれませんが、ANAでは気づかいは一人のスキルにとどめておくのはもったいないと考えます。ある人が行った気づかいはよかったら、それをチームで共有化したり、仕組み化したりして、全社に広げています、組織に伝染します。』-P204

引用：

「仕事も人間関係もうまくいく ANAの気づかい」

読書メーカー <https://bookmeter.com/reviews/65744387>

日本語授業一年間の感想

この1年の中で、日本語の運用についての論理的思考の能力をアップになったと思っている。最初は、文章の書き方が志望理由書を似ている、書きたい内容が多い、しかし、順番性がない。そして、やりたいことも多い、一番大事な専念したいこともない。

初めて意見によって変更された時には、レポート全体覆して書き直した。しかし新たに書かれた文章は、本質的に何も変わっていなかったと思った。この時初めて認識したのは、文章を改めるのは、文章を書き直しではない。

この時、私は少しずつ意見の修正を検討し始めた。まず、日本人の考え方を考える、その前に書いたレポートは直接中国語のロジック通り書いた、日本語の特徴あまり考えたことがなかった。次は一貫性があり、自分が一番やりたいことを分割して説明する。最後は、日本語の文法を整理することだ、日本語の話し方と書き方は別々の単語があるので、以前はその方面重視しなかった、この一年間できちんと鍛えられた。

一年間で、様々な勉強になった、現在は日本語でレポートを書くにも、緊張感もない。徐々に、日本語が自分の第二目の母語になるつもりでいる。

一人旅で新しい自分に出会う

オウヨウブンセイ
欧陽文静

1. きっかけ

小学校のとき、国語教材のある文章を読んだ。それは13歳のウクライナの女子が一人で汽車を乗って旅行するストーリーだった。当時わたしはただこの女子は勇気があると思っただけだった。しかし、今の自分と比べたら、私はその女子に憧れ、尊敬すると思うようになった。それは私がなかなか一人旅できないからだ。世の中には、女性一人で知らないところへ旅行するのは危ないと考えられている。私もそう思っている。が、わたしはやはり一人旅を体験したい気持ちのほうが強いから、大学生のうちに、一人で行く旅行を経験したい。

これまでは友達や家族で行く旅行が多かった。楽しかったが、行動が制限され、相手に気を使うため、本当に見たいところが見回れなかった。また、頼りにできるひとがいるおかげで、かえって責任感も半減した。一方、一人旅はまったく違う。完全に自分の勉強になる。ある本は「一人で行く旅行は課外授業であり、修行です。」と書かれていた。確かに、一人旅は大変だ。行き先を自分で決め、旅行計画も自分で立て、宿泊ホテルの予約も自分でして、現金の交換の自分で行う。大変で、頭を使う。誰も頼りになる人がおらず、自分だけが頼りである。だからこそ、一気に成長できるチャンスになる。それに、観光地や博物館など、吸収力がアップする。自由に見回すこともできる。その結果、何倍も質の高い旅行が楽しめるのである。

2. 一人旅の経験

実際に、私は日本に来て1ヶ月ぐらいのとき、一人で神戸からUSJ（ユニバーサルスタジオ）に行った経験がある。そのとき、全然ルートも分かっておらず、日本語も通じず、大阪まで電車で、そのあと、タクシーで行ってしまった。帰る道に迷って、深夜2時まだ帰れず、とても不安だった。結局私はすぐ近くのホテルに泊まることになった。今思い出したら、その過程で、不安感があったが、少しした刺激のある経験だった。怖かったが、私は始めて外国でまったく知らない町に旅行を体験することがどれほど楽しいものかと強く感じた。このため、私はこの大学四年間で、もっと一人旅を楽しみに体験したいと考えている。

3. 一人旅したい理由

一人旅というと、自分が行きたいところを決め、やりたいことを自分で決め、自分で計画を立て、自分でリスクに備える必要がある。旅行といっても、グループ旅行もあるが、なぜ一人旅を選択するのか？理由は三つある。一つ目は自分が好きなことを知られるチャンスであるから。新たな発見があったとき、一人だと自由に時間をかけて掘り下げることができる。その結果、今まで興味がなかったことに気づくチャンスができる。前に書いたUSJ

に行った例でいうと、私は知らない人と話すのは苦手でも、自分から先に話したら、相手と交流することが好きになることに気がついた。これは自分でも昔から気づいていなかったことである。二つ目は自立できるから。わたしはいつもだれかに未来を任せる状態だった。しかし、一人旅では、見知らぬ土地で、自分がしっかりしなければならない。一人旅だと、このような自身の成長を望める。実は、USJ から戻った後、私はインターネットで具体的なルートを調べて、3ヶ月後に友達に連れて行った。今度は自信があって、友達と楽しかった。わたしはその”失敗“の経験あったからこそ、自分が成長できたと思う。三つ目は新たな出会いがあるから。現地の人や同じく旅行者と仲良くなれるチャンスである。このように、一人旅は自由で縛りのない旅行になる。そして、新たな発見ができる大チャンスでもある。

このように、わたしにとって、旅行は勉強である。旅行を存分に楽しめるのは、大学生までだ。成長につながるから、人生の早い段階で経験したほうが、視野を広げることには役に立つ。私は一人旅を通し、自分の好きなことをはっきり言えるようになりたい。他人に依存しがちであり、自信がない自分を変えたい。

4. 一人旅ための試し

そのため、私は一回生の時、夏休みを利用して旅行に行った。一人旅ではなかったが、前と違って今回は私が初めて計画した旅だった。まず、私と友達は広島へ行くことに決めた。そして、そこで何をするか、どのぐらい時間かかるかをしっかり考えて計画を立てた。それで、列車の時刻表を合わせて、ホテルの予約もできた。今回、私たちは広島で焼きそばを食べたり、有名な観光地を巡ったりした。厳島神社へ行って、午後は海で遊んだりした。夜は船に乗って、とても素晴らしい景色が見ることができた。次の日も予定どおりに楽しい旅をすることができた。しかし、少しトラブルがあった。それは私たちが列車の中で話を盛り上げて、列車の時間を見漏らしてしまったのだ。その結果、計画と違って、1時間遅くなってしまった。不安だったが、自分が旅は意外もあり、もしかして楽しい思い出になるかもしれないと気軽に考えたら良いと考え直した。自分も今後の旅の中で、こんなミスをしないよう、気をつける。

今回の経験は、将来自分の一人旅に役に立つと考えている。まず、友達に頼まず、自分が旅行計画を立てるようになった。また、旅の中遭う可能性があるトラブルがあっても、自分は不安にならず、解決策を探す考え方に直すことができた。これらは1人旅を実現するため重要な経験だと思う。

5. 本の内容に関して

今回の経験を生かし、さらに旅を充実したものにするため、私は酒井修一先生の『理想の旅は自分でつくる』という本を読んだ。この本は私のような旅行の不安を解消してくれるものとしてヒントにした。たとえば、ホテル、航空券、現地での移動手段どのように選ぶ

べきかについて詳しく説明してくれた。それに、近年増えつつある、ひとり旅について、皆の旅が思い出深いものになるため、酒井修一先生はこの本を書いたようだ。

旅作りの中で、私が一番不安になる点は言葉がわからないこと。もし現地で、ヘルプが必要な場合、言いたいことが伝わらなかつたら、不安を感じるだろう。酒井修一先生の本の中はこれについても詳しく説明してくれた。スマートフォンなどに翻訳アプリをダウンロードしておくか、24 時間体制で緊急対応をしてくれる旅行会社を選んでおくか。それに、旅で想定されるトラブルやその解決策について知っておくことも重要である。この本の中にも、個人旅行の不安を解消するため、いろんな場面で遭う可能性があるトラブルとその解決策を説明してある。これは個人旅行に絶対役に立つと考えられる。

それ以外に、本の最後は、夢を叶えた旅人たちの旅行記を収録してある。オーロラを見た後でバードウォッチングを楽しんだり、ぶどうの収穫に参加したり、福祉施設の視察旅行にでかけたりと、個人旅行には無限の可能性があると考える人々。酒井修一先生の言うとおり、旅は自由の中に存在すると感じた。

6. 感想について

この本を読んだ後、わたしは旅づくりの中で最も大切なことは何かをわかった。それは旅の目的を決めること。ただ行き先を決めることではなく、そこで何を見て何を感じるかを目的とすることである。そうすれば、忙しい日常生活に戻ってしまっても、旅の記憶は色褪せることはない。酒井修一先生が「旅は、人生にも似ています。人生の目的を明確に持って生きている人は自分なりの考え方や主張を持ち、状況に流れることがあまりありません。その分、人生の満足度も大きいのではないのでしょうか。」(P. 52) と書いた。これは私にとってひとり旅最も魅力があるところだ。私はいつも道にも人生にも迷う時が多い、が、もしひとり旅を通し、自分の人生の少しでも役に立てば、これほど喜ばしいことはない。

当然、知らない場所へ行ったら道を迷うことが多いだろう。私はいつもそうだ。聞くのが恥だと思う時も多かった。しかし、旅で私が迷うより聞くことが大事だと分かった。現地の人との交流が産まれるから。例えば、美味しい店を探すとき、現地の人に聞いて、その人と会話したりすると、仲良くなれる可能性もある。そんな偶然な出会いも旅の楽しさではないだろうか。また、旅に帰ってきたら、私は酒井修一先生の本を最後に書いた人たちのよう、写真を整理して旅行記を書きたいと思っている。将来自分はどんなことをしたか。どんな人生だったか。思い出を表現したいと考えている。「人生を変えるほどの出会いと感動を生み出す旅」を何年経っても、忘れたくない。一人旅の記憶が日常生活に戻っても、鮮明に覚えておきたい。

そのため、自信がない自分を変え、自分が未来を他人に任せないような一人旅を、何度も経験したいと思っている。

7. これから

大学四年間にかけて、私は夏休みや冬休みの時間を利用して、できれば、一人旅を何回も経験したいと考えている。まずは日本国内の旅行をしたいと思っている。ところが、この一年間の日本語の授業を受けて、私は書く練習と話す練習をたくさんやったおかげで、日本語の能力は前と比べて、高めることができた。日本国内の旅行なら、昔一番恐ろしい言語の問題なく、いけると確信している。それに、交流授業で、それぞれの人と接することで、違う価値観や文化を持つ人と話し合い、いいアドバイスをもらうことができた。また、違う人の文章を読んで、旅行にも、人はそれぞれと考えている。一人でご飯を食べることも旅といえる人もいるし、現場でボランティアをすることが真の旅と定義される人もいた。人によって、旅についての考えはそれぞれが、これを聞いて、おもしろいと感じた。これにも一人旅の参考になると考えている。

8. 結論

要するに、私は一人旅したい目的は自信がない自分自身を変えること。それと、一生の思い出になるような旅になるように、現場で何かを見て何かを感じることである。この目的を達成するためには、これまでの失敗経験や今まで成長したことを参考し、まだ不十分のところをやり直し、考え直し、計画を立て、一人旅を体験したい。

皆も興味にあったら、ぜひこの本を読んで、大学生のうちに、ひとり旅を一回だけでもいいから、試してみてください。

参考文献 「理想の旅は自分でつくる」 酒井 修一

大学でやりたいこと

呉限

学校の意味は教育を受けるところなので、大学に行ったら一番大事なことは勉強だと思う。

大学はもちろん勉強だけでなく自分でやりたいこともできる。大学でやりたいことは今までやったことないことをやってみたいし、四年間でやはり有意義なことがやりたい。

実際にはボランティア活動に関してとても興味がある。今の中国は発展途上国だから貧乏な人が多いので助ける必要がある。いつも、人間とほかの動物の違う処はなんだろうかと疑問がある。可哀想の物事を見たら涙に自然にでるだろう。だから、良知や同情は人間が特有の本質である。今の貧困状態に陥っている人々が無視するなら人間の特性が失ったことである。現在に他人に助ける人は将来の自分を助けることである。なぜかというと、誰でも将来のことは予測できないから自分が貧困層になったらどうすればいいのか。もし皆は貧困に陥っている人々に助けた視点を共有しながら、世界の貧困問題を見つめなおしていただければ、ありがたいと思う。

貧困問題は複雑な問題であり、しかし、何もしないといけない。何とかやりたいので今の階段はホームレスに助けるボランティアに一番やりやすいと思う。とりあえず周りがあるから地理的に近い。次は母がホームレスに助ける機関に働いているからよくホームレスのことが聞かれる。知らないことは母に聞いたら教えてもらえると考え。まずボランティアのことをしっかり勉強したいからボランティアの本を読み始めるが必要である。

ボランティア活動をやりたいので夏休み中に「幸せを届けるボランティア不幸を招くボランティア」という本を読んだ。色々なボランティアのことを学んだ。ボランティアは簡単なことではない。「ボランティア、興味あります」「人助けするっていい気持ちです」きっと最初はこんな感じで始まる人も多いかもしれない。しかし、続けてやることが大事であり。中途半端な

ことはしない方が良く、本当に必要なのは自分の安心感ではなく、副産物として自分のためになるのはいいが、あくまで相手のためのボランティア活動だ。相手が幸福を感じられて、希望を持って過ごせる人生になってほしい。自分はそのための黒子にすぎないのだから。自分のことは目的ではありません。相手が安心できたり、幸せになってくれたことが本来の目的であるはずだ。

今のこども食堂という施設がある。親や家族が仕事などのために留守で、こどもが一人で食事をする。こどもが一人でも入れるのが「こども食堂」。公民館や地域センターなどで栄養バランスの取れた食事や人々のふれあいの時間を子供たちに提供する取り組みである。こどもは、無料または安い価格で食事が取れるようになっておる。ボランティアスタッフは調理だけではなく、食事の準備や片付け、子どもたちの遊び相手をしてくれる人も必要とされている。このボランティア活動が多く人が助けられるだと思っている。現代社会はからだの健康だけでなく、こころでも大事なことである。両親は仕事が忙しいなら子どもを家で留守しかない。毎日やり続けて子どものこころに対して悪くなる。人と人の交流機会もすごく増えると考えている。もしこのこども食堂はホームレスも支援したらホームレスが多少に助けてもらう。ボランティア不足なので多くの人にボランティアの精神が影響したい。ボランティアの精神があれば困難を克服できると思っている。

本を読むとボランティア活動がそんな簡単なことではない。ボランティア活動に関するまだおおくの問題点がある。例えば、障害者に対してボランティアはどんなことをやったらバリアフリーが感じられる。障害者たちでも尊厳があるので障害者たちの立場に立って考えることが不可欠である。または災害被災者や大変な病気を患ってお金が負担できないなど生まれると、支援といって駅で募金を集める偽ボランティアもいる。そして、この問題の解決策または短期間のボランティア活動をやって深く影響に与えるも大事なことである。中国のボランティア活

動はまだ発達ではないから、日本のボランティアの経験を学ぶことが必要である。今、中国の毎年3月5日はボランティアの日である、学生たちが公園や道路の掃除、老人ホームを慰問するなどのボランティアことを行っている。しかし、その日が終わった後ボランティア活動も終わった。ボランティア活動は皆さん普段の考えることではない。だから、ボランティア活動に人々に普段の考え方になるが非常に大事なことである。

ボランティアに関して一番興味があるものはホームレスを支援することである。ホームレスは大変な社会問題の一つだと思っている。中国でも多くのホームレスがいる。しかし、日本のホームレスと中国のホームレスの生き方は全然違うと考える。日本のホームレスは物乞いをせず。また障害者があまりいないと思う。一方、中国のホームレスはほとんど物乞いでありお金をもらえる職業だ。またホームレスの中には障害者やお年寄りが多い傾向がある。なぜかという、障害者やお年寄りは仕事ができないからだ。ある調査は大都市の「プロ」物乞いの一ヶ月間収入は16万円だと言われている。本を読むと日本のホームレスは意外と普通に働いている。その多くが日雇いやアルミ缶拾いなどで生活している。中国は「救助管理站」という政府機関がある。この機関は物乞いまたは寝食に困っている人、頼れる相手がいない人、保険などがなく最低限の生活が保てない状況にある人が収容されるが物乞いの人たちは絶対に行きたがらないようだ。なぜならばお金をもらえないし、自由もあまりない。現在の中国ホームレス人数は最低でも何十万人だと思っている。その何十万人は極限の貧困状態で生活している。では、自己責任というのは何かというと、貧困状態に陥った原因も、そこから脱するもの、自分の責任という考えること。しかし、自己責任を根掘り葉掘り尋ねると、最終的に社会が崩壊すると思う。

私は、人間の最大の知恵は何かというと、人は一人では生きてはいけないということを知っ

たということではないかと思っている。だから、何をすれば必ず他の人が存在する。人間というのは、単純な競争面ではなく、共存が一番の大事なことである、もし誰でも自己本位の考えるなら人間と他の動物の差別がないと思っている。

ホームレスが社会問題なので社会の人々が一緒に解決することが必要である。それには、政府と民間が協力してやったほうが良いと思う。知る機会というものが全員に平等でない以上、「知って終わり」ではなく、知ったら知ったで、何ができるのか。この筆者の意見は私も賛成だ。今、私は理解できないことが今の社会、みんなはホームレスを手伝いに行かない。しかし、野良犬などをたすける人のほうが多いのに。この現状は本当に可笑しいと思っている。助けを受けたい人たちは誰でも助けてられていない。実際に助ける必要がない動物はみんな助けたがっている。さらに恐ろしいことはホームレスたちのことを知らないのではない。一番怖いことは皆知っているのに何もしていないことだ。社会を進めて行く動力は皆のお互いに協力することだ。誰もがこの社会で独立に生活している。誰もがお互いに助けることができるなら、どんな困難も克服できると思う。だから、知った次にもう一歩、考えてやったら自分も他人にも大きな影響を与えられる。

総合政策は人と人の共存問題、人と環境の共生問題を解決するために学問だ。皆は誰でも一人だけで生活はできないので存在している個体ではなくて、だから他の人に助ける意識が不可欠な事である。可能であれば誰でもたすけてあげたい、これはボランティアの意味だと思っている。ボランティアをやってみたら異文化理解ができると思う、交流もできるし、世界の中に色々な人もあえる、いろんな友達も作られる、自分のコミュニケーション能力を訓練できる。以前の僕は時間が遅いものだと思っていた。いまはその考え方が全く消した、高校時代でもいつも自分がまだ若い、後でやっても行けると考えていた。それで多く時間が無駄になる、大学で毎日に充実した生活したい。ボランティア活動の準備するつもりだ。そして、ホームレスの資

料を調べる、他の人の意見を聞く、経験者と相談など、他の人に教えて前に自分は教えて情報が正しいかどうかの確認も重要なことである、だから、今は正しく知識を学んだ、自律な生活している。諦めないように頑張りたいと思っている。

感想；明日のことは誰にも分からない。誰でもホームレスになる可能性はある。そして、ホームレスのボランティア活動をやりたい。一年間にレポートを書き続けている。皆さんと先生の意見を聞いたと自分の文章はまた不足ところが多いと思う。将来は日本語をもっと工夫しなければならない。このレポートを書いたことは非常に有意義なことであり、なぜかというと、一気に4000字を書いていることはとりあえず無理と考えている。4000字の内容を書いても無駄の字数が多い。このようなレポートの繰り返して書いたことが大事である。ほかの授業はレポートを提出することだけであり、繰り返すはあまりないので自分の文章の良くないところも分からなくて続けて書く。日本語授業のレポートは毎回でも皆の文を読んだり感想を述べるとか。自分の分は不足の部分直し、皆の文の良いところを学ぶ。これは日本語に上手くなるのとても良い方法である。外国語を学んだ時普段な学校は文法や語彙などに中心している、文法や語彙などやはり言語の基礎けど、もう一つ重要なことはコミュニケーション能力である。学校が書くことや聞くことなどに中心の結果は話すことできない、つまりコミュニケーション能力が不足である。日本語授業は意見を話すことが多い、自分のコミュニケーション能力も上がった。この一年間の日本語授業は楽しみに勉強した。次の学期も頑張りたいと思っている。

参考文献：「幸せを届けるボランティア 不幸を招くボランティア」田中優

日本旅行を通じて疎通を学ぶ

氏名：鄭太泳

日本に留学に来るようになって最も感じるのは今まで生きてきた韓国での周りの人たちがな
いということだ。そのため他国で最初から作る人間関係の必要性をたくさん感じるようになった。
私は日本全国を旅行したい。そして旅行を通じて色んな人に会いたいし、同時に地域の特
色も知って行きたいと思った。

日本に来たばかりの私が結婚し、大阪の妻の実家に引越した時、隣人に「君、出身はど
こ？」と聞かれた。そこで私はすぐ「韓国です。」と言ったら、そのおじさんは「あ、そうか…」と
言って会話は終わった。他の人だったら普通の会話かもしれないが、私にとってこの出身とい
う言葉はとても印象深かった。何かこれ以上の話を続けることが出来ない自分自身に失望した
し、日本の地理に関して何も分からなかったのここから出身地を聞くことも出来なかったか
らだ。いや、正確に言えば、日本語をできないことを含めて日本に関して完全に白紙の状態だ
ったため、配偶者が日本人なのに何も知らない私が恥ずかしかったからだ。今考えて見ると、
そのおじさんにありがたいと思っている。そしてなにか他の話をしていたらよかったのかなあ
と思う。とりあえず、私はここで日本の地域を知りたいと思うようになった。

もちろん日本人だけが出身地を重要に考えるわけではない。他の国も同様に、初めて会う場
合、出身地を問うのは一般的だ。私はこのような当たり前なことを日本に来て新しい感じで刺
激を受けた。自分の出身地を聞いてくれるのはありがたいことで、さらに、相手が自分の出身
地を知っているのは本当に喜ばしいことだ。ここで暮らすようになり、さまざまな人に会っ
たが、韓国を好きな、韓国旅行を行って来たことある人との対話は本当に楽しく、良い印象を持
つようになった。逆に私も相手の出身地域を知っており、旅行で行って来たことがあればきっ
と縁で発展できると思う。

また、義父も、日本旅行をしたいようになったきっかけとなった。義父は若いときに2年間、
日本全国を旅してその経験をもとに本を書いた。大阪で始めた旅が鹿児島、東京、福岡、北海
道などを経てその地域の特徴などを書いた。お金がない時は現場で色々な仕事をしながら旅行
を続けた。義父はいつも私に助言をしてくれるし、人と人の関係とつながりをもっとも重要に
思っている。今は社長で、会社を経営しているが、昔に困った時に、人々から多くの支援を受
けたという。だから私のしたいことは日本の旅行で多くの人間関係を作るのだ。

今までの私は旅行した場所は東京だけで、日本旅行をたくさんすることができなかった。日

本に来てすぐ結婚準備、大学入試の準備で1年間、余裕なくとても忙しく過ごした。義父に聞いた話では鹿児島など九州から大阪で働くために来る人が多いということだ。そして九州地域は自然環境が美しいとされ、歴史的にも韓国と近いために我が国の文化が九州地方に多く流入されたと言われている。そのために先に一番行ってみたい地域は鹿児島を含めた九州の地方だ。そこで旅行をしながら楽しむ事とともに、なぜ九州地方の人たちが大阪で就職をしにきてるのか理解し、人間関係を作りたい。

しかし、ある人は直接に旅行するよりインターネットなどを通じて十分に間接的旅行ができるという。確かにそうすることによって金、時間を節約することができる。しかし間接的な旅行と直接旅行することの差は大きく3つがある。一つは誰かと一緒にすることができるということだ。好きな人と旅行しながら良い思い出を残せるということ。これはとても楽しいことである。二番目には私が考える旅というのは実際に行ってみて苦勞しながら感じることだ。日本に来る前は海外旅行に対する恐ろしさと漠然としたことがあった私が、旅をしてみた後、留学という決心に役に立ったし、今もこのような日本の生活をもとに、全世界どこでも機会があればまた他の国へ留学してみたいという考えを持つようになった。もちろん、最初の旅行する時は電車に乗ることさえ難しくて非常に苦勞した記憶がある。しかし、こんなに苦勞を一度してみると、次の旅行の時は勇気が生じる。道に迷ったり、ほかの人に助けってもらったりする全ての経験は後に私に自信として返ってくると思う。3番目は最も大きな理由で、自分の周辺に人々が増えるということだ。旅行をする見ると、様々な人々に出会え、会話ができる。その人が大切な友達になることもできるし、重要なビジネスパートナーになることもある。つまり、人間関係を作ることができるということだ。これらは間接旅行では絶対にできないことだろう。

最後に、日本の様々な地方を旅行しながら大学生活ではもし私が書くとしたら本の内容になる色々な経験をしたい。旅行なら、その地域の特産物、おいしい食べ物や方言など多くのことが浮かぶ。しかし、私はただ旅行だけでなく、その地域に対する私だけの考えを整理しておくことが最も重要だと思う。今まで会った大切な縁も多いが、これからめぐり合うことになる多くの良い縁のために多くのことを見て感じたい。

そのために私は大学生活の中では多数の旅行エッセイと本などを読んで見て私だけの旅行計画を作ってみることだ。そして春、夏休みを積極的に活用して旅行に行くつもりだ。また、休みではなくて学期中でも大学の諸番組に多く参加してみるのも良い方法だ。実際、私は学校プログラム中に韓日交流セミナーの通訳者として、良いまちづくりの参加者など様々なプログラムに参加してみた。通訳者活動では、ただ韓国人と日本人大学生たちのコミュニケーションを助けるボランティア活動だと思っていたが、実際神戸出身の日本人学生とのフィールドワークをしながら学んだことが多い。神戸出身の学生たちのガイドで最高の旅行ルートだったのはもとより、自分の故郷について率直な意見を聞くことができたし、それを素材に韓国人観光客の

立場としての助言をしてあげることができた。とても神戸に関して分かることができた旅行だったと思う。三田良い町作りでは私の学校の外国人学生を紹介し、三田を広報するプログラムだったが、その地域の人々の率直な話と地域の特徴を知ることができた時間だった。三田は韓国の済州島と姉妹都市だったことと想像より外国人がたくさん住んでいたということなど普段に知らなかった新しい知識を学んだり、町の人たちが発展するために様々な話を聞くことができたり、した旅行のようだった。私は見学も旅行と同じだと思っている。多くの人々の考えや情報を共有できるだけでなく、もっと広い視野を持つようになると思う。もちろんそこで出会った人たちは今も連絡をしており、お互いに助ける大切な縁になった。

私は大塚勝美『ブチあたりの青春』を読んだ。この本は義父が書いた本であり、私が旅行をしたいと刺激を受けた本だ。内容は大阪から出発して日本全国を旅行中の出来事を日記形式で書いた本だ。ほぼ無銭旅行だったので、旅行の中で短期アルバイトをして過ごし、1年という時間がかかったという。多くの人々との出会い、地域の特性について筆者の主観的な考えを読むことができた。

1月4日大阪から出発し、初旅行は近畿地方をはじめとした。そこでは旅に対する期待感とは違って、人々の冷たい反応に最初から苦労した。お金の節約のため野宿をしたが、寒い冬だったので、お金と家の大切さを感じる時間だった。冬が過ぎて春になり、二番目の舞台は九州地方である。節約方法も要領を得て、野宿生活に慣れていった。鹿児島では良い人にも会って色々な話ができただが、仕事探しはほんとうに難しかった。特に他の地域からの渡りの旅行者だったため、短期アルバイトをしようとしても'ノー'という返事ばかりだったという。苦労の末に得た超短期アルバイトは橋を建設する仕事だったが、仕事ができたと嬉しい気持ちで、肉体労働は全然つらくなかった。そのようにお金を少し貯めてまた旅行を始める。ノウハウもできて、旅行中に短期アルバイトの幅を広げるため、夏には大阪に寄って運転免許も取得した。いつのまにか秋になって北海道に向かう。筆者は北海道の景色が一番気に入ったという。そこでは木の人形作りなど、様々なアルバイトをすることができた。北海道で会った人たちは筆者と今も連絡をしているほど助けをたくさん受けており、いい人だという。その後東京を最後に1年の旅を終わらせた後、再び大阪に戻ってくるという内容である。

この本では旅行における新たな出会いと別れを繰り返していたらこういう寂しさを感じられたという。

「何かに導かれるように駆けていく稚児、驚くほど大きな波紋、もうひとりの私。もうひとりの私は、たったひと言、この寂しさを伝えたい。」 (p. 148)

旅行においてはやはり新たな出会いと、それに伴う別れがある。別れの後には寂しさがついてくる。同じ場所であることにも初出会いの時と別れの時は雰囲気がだいぶ違う。私はここで人との出会いもその地域の雰囲気を決定することもあると考えた。別れの時の悲しさが多く残っている人なら、きっと、その地域に対する考えもいい思い出がたくさん残るだろうと思う。

私はこれから私の旅行に先立って、追加的に他の旅行エッセイを読んで見ながら他の人たちの感じた点を参考にしてみたいと思う。同じ場所を旅行しても人によって感じる点が異なるからだ。もちろん、直接目で見て旅行することが最も重要だと考えていることに変わりはない。なぜならこの本を読んでから何より一番大きく感銘を受けたところは筆者が旅行で出会った人々とまだ連絡をしているということだ。このような縁がなかったら、今の筆者はありえなかったという。旅行を通じて縁の大切さを感じる。私が一番したいことだ。

そして初めて会う相手でもいい印象を与えることができる人になりたい。最終的には日本で、外国人としての会話より隣人としての自然な話をしたいと思う。そのためには、何よりも日本を理解する必要がある上、それを受ける側だけでなく、先に手を差し出す側になりたい。これからは誰かに「君、出身はどこ？」と聞かれても、「韓国です。あなたはどこですか？」と答えられるようになりたい。

【参考文献】

大塚勝美『ブチあたりの青春』（昭和48年）東京文研出版

《感想》

今度、日本語でレポートを書きながら一番良かった点は私のレポートに関して他の多くの友達の意見をいただくことができたという点だ。他の人のアドバイスが加えてつれて、完成度の高いレポートがなることができたし、私の短所をよく把握することができてよかったと思う。

レポートを書くことは難しいことだが、特に外国語である日本語で書くのはもっと難しいと思う。しかし、今回のレポートを通じて私は発展した。

精神科についての勉強

大学の中で

陳釗填

中学校の頃から、心理学に対して興味を持っていました。その為日本に来た時、いろいろな大学受験して、心理学部お通いたいと思っていましたが、なかなかうまくいかず、最終的には心理学に入れなかったです。しかし、日本の心理学に関する資格の中では、必ずしも心理専門の人ではなくても取れる資格があります。また、心理学にはいろいろ領域があるので、私は一体どの領域の資格を取るのか、これは今後の勉強次第です。

元はと言えば、なぜ私は心理学に対して興味を持っているのでしょうか。それには理由があります。その一はで言うのは中国の子供たちの学習環境です、中国の子供たちは、高圧的な環境の下に育てら、小学校から高校まですべて基本的に大学受験テストのために勉強し続けます、その環境の下で、学校の先生や、保護者などは、子供の考え方や、感情を、あまり重視していません。そのため、子供たちはいつも自分の感情を表わさず、いつの間にかそれが病気になった、自虐傾向が現れます。そしてその結果青少年の自殺率はどんどん増えていきます。だから、心理学の普及と教育はすごく重要なことです。個人の考え方から見てこれは身に着ける必要な技能の一つだと思います。

2つ目は、現在の社会の高圧的な環境の下、今私たちの周りには、意外と鬱病にかかる人は多くいますが、これはどうやって判別するのか、正直いうとこれは極めて困難な事です。人の考え方はそれぞれなので、鬱病にかかる症状も違います。ある人は、すぐに消極的な状態を表し、精神状態も悪化することが明らかに分かります、こうタイプの人に対しすぐに医者に診断

する事は可能です。しかし、一番恐ろしいのは、表面から見ると、精神の方面から見ると、健常者と全く区別できない人で、そういう状況の場合だとすると、よほどの心理学の専門家が周りにいないとを見つけることは困難です。実際にこれはあった事ですが、中学時代、クラスの中ではすごく仲がいい友人がいました。その友人はとても外向的な性格で、友達の間でも人望があり、じつに朗らかな人だと思われていました。しかし後で考えたら、全然そのような人ではありませでした、あれは2013年12月11日の夜の事です。夜中に突然電話がかかって来ました、友人からの電話です。ちょうどその時私はゲームを遊んでいたの、あまり彼の様子を気にせず、簡単に雑談しただけで、電話を切りました。しかしその翌日、友人のSNSを見ると、非常に長い文章をホームページに書かれていました。最初からおかしいと思ったが、その後凶報が来ましたが、あの友人は昨日夜自殺したメッセージ。その時私はふっと思いました。昨日友人が電話を掛かできた意味がよくわかりました、あれは多分、救いを求めているかもしれませんが、もしかしたらその時、私が友人の異常な行為に気がついていたら、そんな惨劇にはならなかったかもしれません。もしそのとき、ゲームに集中するのではなく、もっと友人の事を考えたら、自殺する地に落ちないかもしれません。もしそのとき、心理学の知識を備わっていたなら、この異常の状況を感じることができます。これによって、友人が救えるのだろうか？ 私はそう思いました。このような悲劇によって、私は心理学の重要性をわかりましたです。

これは私に実際にあつた事です。厳しい環境の下で、もし自分ができるだけ心理学の知識について勉強したことがあつたら、自分自身に対しても周りの人に対しても役に立ったと思います。そういう知識を備えるには、自分に対しての自力救済にもなれると思います。

心理学部を落ちたのに、心理学を学ぶのはもはや不可能な事かもしれないと思うけれど、関学にも、心理学の授業があります。それは学部に関わらず、全員履修可能なので、私は即時に

その授業選択しました。専門の心理学部ではないですけど。これも心理学を勉強する第一歩だと思います。それは良い始まりになるのでしょうか。私は心からそう思っています。

最終的に大学の間にはどんな計画を立てればいいのかを考えています、まず資格を取りたいと思います。国家資格は多分無理だと思いますが日本には沢山の民間資格があるのでそれを取るのも1つの戦略だと思います。それ以降だんだん正式の資格を取れたらそれもいいと思います。

私が最も心理学の中でも勉強したいのは精神病における治療、特にうつ病に関する治療ですが、心理学の基礎から勉強しなければならないものがいくつあり、続いては三つの本を紹介したいと思います。

《精神科における予診・初診・初期治療》—笠原 嘉

《精神症状の把握と理解》—原田 憲一

《新版 臨床精神病理学》—クルト・シュナイダー

この中では最後選んだのは

《精神科における予診・初診・初期治療》—笠原 嘉

参考資料

国家資格

公認心理師 - 日本初の心理職国家資格で、心理師と記載できる唯一の資格となる。「公認心理師法」は 2015 年 9 月に可決成立、2017 年度施行予定。文部科学省・厚生労働省共管。

学会認定の民間資格

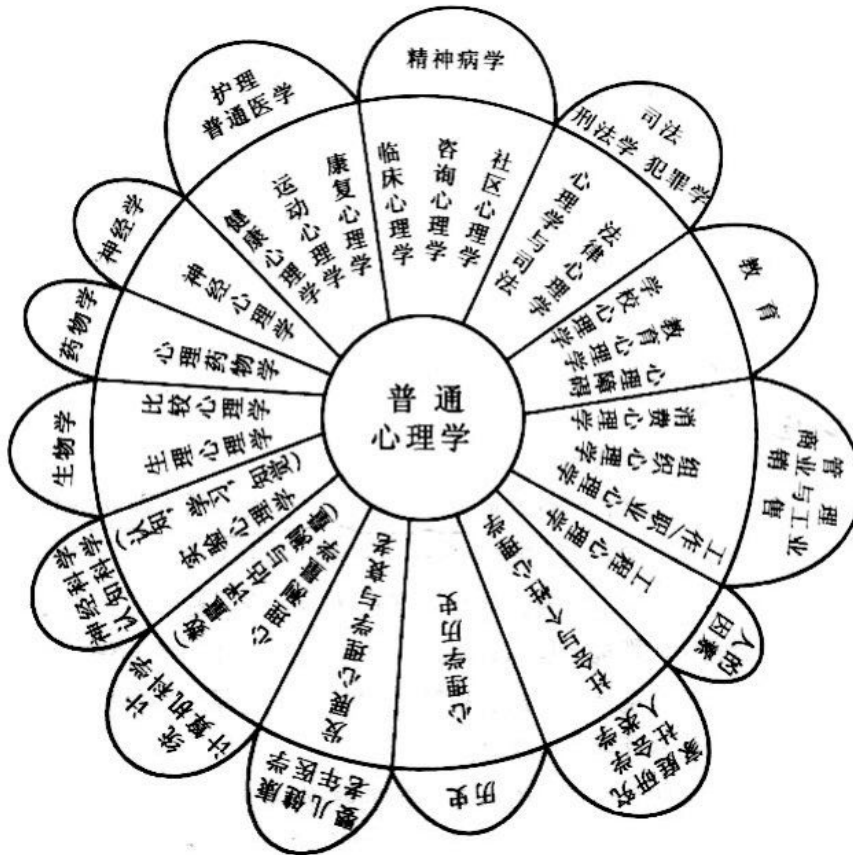
日本学術会議に属する心理学関連の学会のうち、何らかの資格を発行する学会の資格名称と学会名称。学会として専門家育成を企図するものから、受講条件を問わない実質的な「学会商法」まで、内容は幅広い。

続いて本の内容について説明したいと思います、最後決まった本はこの1冊です。なぜこの本を選択したのはたぶん疑問を抱いているでしょう。精神学の本と心理学の間には、なんの関連性があるのか説明したいと思います。

まず心理学について、心理学は哲学と科学の結合体ともいえる。19世紀中期まで、心理学はいつも哲学の範囲にやっている、しかし1879年には、ドイツの生理学者、哲学者ヴィルヘルム・マクシミリアン・ヴントはライプツィヒ大学に心理実験室立て、新しい学問分野として心理学が成立しました。もう一方から見ると、心理学は自然科学の範囲でもあるし、社会科学でも含む、これは、心理学を研究の基礎とは人間の脳と神経、これは自然科学の範囲です。しかし人間は社会動物として、社会の中に研究をするので、これによって、社会科学の一面も含んでいる。

今から精神病学について説明する、精神学と心理学は大きな関係があります、例として説明すると、心理学の中にはたくさん分野ある、その中でも、最も重視されているのは異常心理学という分野です。私の視点から見ると、精神病学と異常心理学は似たような点がたくさんある。それは単純に、1つは医学の観点から見るものです、もう一つは人の心理状態から見ることです。精神病学の方面から見ると、精神的な病気について、主に要点として記載されている、例えば治療方法とか、薬の使い方とか、そういうものについて主張しています。これに対して、異常心理学の観点から見ると、治療法についてあまり重視していない、主に要点として記載されているのは、なぜそういう現象があったのか、心理的な面から考える多数だと思う。主に言うと精神病学は医学の範囲です、異常心理学は心理学の範囲です、でも事実上、両方の

学問には精神病人のために努力をしている。こうみると両者の内容はそんなに大きな差がないと思ふ。下の図に通じてわかりやすく見える。



この図は中国バージョンです

この図は心理学の分野を示されている、この図を見ると、心理学とはいろんな分野との関連性があるということがわかる。そして夏休みのとき読んだ本の内容について説明したいと思います。

ひとまず、今から紹介する本は、この人自分自身の経歴により、長年からまとめたもので、精神科(特にうつ病)の予診・初診・初期治療の分別にはわかりやすく書いています、それでは、今からこの本の中身の内容についてお話ししたいと思います。私たち一般人が、特に予診の心理面からしなくてはならない。これはいかにも早めに、周りの人の心理状態を把握するため有利な情報です。

- 予診の状況から。

患者の反応から確かめる。

図 1

1. 患者は死を宣言されたとき、反応として人が一時他責的になる心理はよく知られている。(p20—8—9)
2. うつ病の場合、抑うつ、抑制、朝の無気力、周囲への興味の喪失、決断能力の低下のすべてが「睡眠障害」どういうことの結果です (p20—15～17)
3. 人生におこりうるいろいろな出来事のなかで、私の経験上、また文献上、「心因」たりうると考える出来事である。(a) 過労 (b) 対人葛藤 (c) 離別もしくは死別。ホームシックというように必ずしも人からの離別とかぎらぬ。物でもよい。ひっくるめて「喪失体験」とした方がよいかもしれない。あるいはこの点の研究に長い歴史をもつ精神分析に敬意を表して「対象喪失」といってもよい (d) 試験、あるいは試験に準ずるところの「試される」状況 (e) 遭難 (f) 日常環境の比較的急な屈折的变化 (g) すぐぶる苛酷な非日常的環境になげこまれること。(p39)

精神科的予診の特性と、それをいかに短時間にまとめるかというテクニックの一端をお伝えできれば、これこそ予診の目的です。

- 初診の状況から

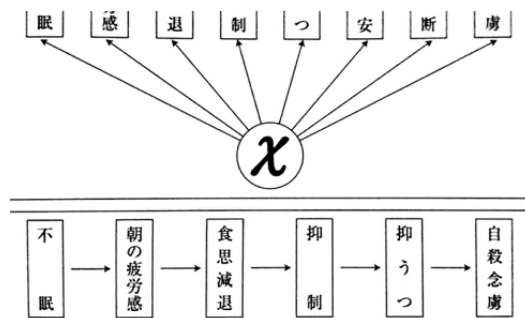
1. 不眠こそ無気力や食欲不振や体重減少などすべての症状の根源と思ってやってきたうつ病の人に対しては、不眠もまた諸症状の1つにすぎないようなχという根源があること、そこを治療しないことには不眠もまたなおらないこと等を、場合によっては図1のような図解をもって説く。(p56)
2. 診断のためのいくつかの要点 (体因性→内因性→心因性)

まず第1に体因的な可能性、いかえれば「身体的基盤をもつ精神障害(シユナイダー)」の可能性を考える。それが否定できるか、ほとんど排除できるとき、はじめて2番目の内因性の精神疾患(統合失調症圏のものとうつ病圏のものともに軽症者を含めて)の可能性について検討をはじめ。そして内因性疾患の可能性もまた否定できるか、あるいはほとんど排除できると考えたとき、はじめて3番目の心因性、環境因性の場合を考慮する。決して逆をやらな

い。

3.国際分類(ICD-10)(1993)の「気分障害」のなかのうつ病エピソードの項(これによってうつ病が分かります)(図3)

図 2



F32	うつ病エピソード
F32.0	軽症
00	軽症で身体症状を伴わないもの
01	軽症で身体症状を伴うもの
F32.1	中等症
10	中等症で身体症状を伴わないもの
11	中等症で身体症状を伴うもの
F32.2	精神病症状を伴わない重症うつ病エピソード
F32.3	精神病症状を伴う重症うつ病エピソード
30	気分と調和した精神病症状
31	気分と調和しない精神病症状
F32.8	その他
F32.9	特定不能

注: 「気分と調和した精神病症状」とは心気、罪責、貧困、否定、主題をもつ妄想などをいい、「気分と調和しない」のは迫害、誇大等の妄想をいう。

● 初期治療の状況から

1. うつ病に関しては心理的環境的な条件が脳に神経伝達物質の問題をひきおこすと考えれば、うつ病の一面はきわめて心身症的です。
2. 病人が言語的・非言語的に自分を表現できるよう配慮をする。
3. 基本的には非指示的な態度を持ち、病人の心境や苦悩を「そのまま」受容し了解する努力を惜しまない。

4. 病人と協力して繰り返し問題点を整理し、彼に内的世界の再構成をうながす。しかし、治療者の人生観や価値観を押しつけない範囲で、必要に応じて日常生活上での指示、激励、医学的啓蒙を行う。

最終的に、作者はこう言いました。『心の診療には、こうした対人関係の修羅場とでもいうべきシーンが、稀にだが、はさまる薬物の使い方に習熟することも大事だが、われわれのアイデンティティはむしろそういう経験をどれくらい通りぬけてきたかということにある、と私は思う。一種の勲章です。逃げ腰にならない方がよい』。

この本を通じて、私自身が大学4年間でなにを勉強したいのか疑問を出した。私考えたことは心理学を勉強して、できるだけ周りの人を助けたいと思っています、4年の間でできるだけ心理学の知識を勉強して、そしてもし可能だとすると、国に戻った後心理学の資格を取って、つついて多くの人々のために自分の力を捧げます。

気づかぬうちに今学期ももうすぐ終わるところです。この1年の時間の中でこの日本語授業のクラスに通して私はいろんな留学生の友達をして楽しい1年間を過ごしました。そして日本語の文章の表現についてもたくさん勉強しました。去年の私に比べてもっとすばらしい文章書けるようになりました。心からこのクラスの先生とクラスメートを感謝しています。まだ来年もこの授業を楽しみにしています。

いい習慣を身につけたい

ホウギョウギョク

大学は人生の新たな一歩だ。大学の生活に憧れていた私にとって、大学の四年間では時間を有効に利用して、前に体験しなかったことを体験したい。例えば、旅行や、新しい外国語を勉強することなどだ。やりたいことを全部やるのは時間的に大変そうなので。時間をうまく利用するために、いい習慣を身につけることがもっとも大切なことだと思うようになった。

自分にとって、その習慣は自律だと思う。なぜかというと、自律は自分をコントロールできるようになれば。限りある時間で自分の目標を達成することができるからだ。しかし、自立といっても、自律の概念がたくさんあると思う。例えば、時間性や効率性など。人はそれぞれの理解が違い、自分にとっては、自律は時間性と効率性の二つの意識を構成した習慣である。時間性というのは、簡単に言うと計画だ。一日は24時間があることを意識する。そして、どうやって把握するのか計画が必要不可欠である。計画を立てて、決まった時間でことをやる。また、効率性というのは、時間性の上に、実行する。つまり、計画を立てた上で、ちゃんとやることだ。

大学生になった私は、今この二つが足りない。限りある時間で、毎日課題や復習がたくさんあるから、時間をうまく利用すべきだ。しかし、私はのんびりしているので。課題は期限までギリギリ、復習は試験までギリギリになってしまう。ギリギリという単語はいつも私のそばにあって、毎日、気持ちが楽にならない。やるべきことをやってないから心が不自由になる。また、毎日通学の時間は、約2時間にかかるので、家に帰ったら、もはや遅くなっている。が、私は行動が遅く、30分で終わることは、1時間、1時間半に終わることもある。また、夜はよく、遅く寝ることもある。その結果、朝はなかなか起きられない。一日中元気がないから、授業中に眠たくなる。また、授業を終わって家に帰ったら前と同じく悪循環になる。これらの私の行動は様々なことに影響を与えているから、今の私にとっては大変直さないといけないくせである。そして大学と前まで通っている学校が違って、すべては自分でやり放題。つまり、自己責任が重要である。そんなの時、いい習慣がつけば、有効な学習になると思う。さらに、自分は自分がどれだけ高めるのか自分の努力で決めるから、よりいい習慣を身につける重要性がある。

話とは言え、自分はまだ習慣を成り立たないから、有効な学習がなかなか進まれない。課題を完成する時間がたっぷりなのに、私はいつも、残り時間をわずか、deadlineまでにギリギリ完成した。無事に提出したけど、たまり、課題の質が悪くて、成績に影響を与える。また、徹夜で書くから、授業中に眠たくなる。こういう風に、成績を下がるかもしれない。結果として、とても大変だと思う。

そこで、いい習慣をつけるために、私は「七つの習慣ティーンズ」という本を読んだ。この本は、七つの習慣を紹介している。第一の習慣は主体的になる、第二の習慣は終わりを考えてから始める、第三の習慣は一番大切なことを優先する、第四の習慣はWin-Winを考える、第五の習慣はまず相手を理解してから、次に理解される、第六の習慣はシナジーを創り出す、第七の習慣は自分を磨くというものだ。私はその中の第三の習慣が一番参考になる。主に自分にとって大切なものを先にやるという習慣の紹介である。その中で「時間管理のマトリックス」というモデルがある。自分の時間はスーツケースを例える。スーツケースに荷物を詰めるとき、手当たり次第に放り込むのではなく、衣類をきちんとたたんで整理して入れたほうが、もっとたくさんのものが入る。同じことが時間も言える。自分の生活を整理すれば、それだけたくさんの物を入れられるようになる。例えば、家族や友人と過ご

す時間も、勉強の時間も、自分のための時間も、自分にとっての重要なことに取り組む時間も増える。それを達成するために、重要性和緊急性という二つ分類がある。そして、四つの時間の領域に分ける。横は緊急、緊急ではない。縦は重要、重要ではない。第一コマは自分ではコントロール不可能で、ぜひとも片付けなければならない用件。つまり、テスト勉強を早メリ終わるなどの先延ばすタイプな人。第二コマは、優先順位をつける。一番楽な物を最後にして、そうすると、やる気が出る。第三コマは、イエスマン、つまり、緊急ではあるけれども重要ではないもの。第四コマは無気力、つまり休み時間である。この四つの時間の領域で、自分の時間を企画すれば、いい習慣になるかもしれない。図1

生活の面を例にすると、日本にいるとき、私はよく遅く寝て、遅く起きる。一日の生活はほとんど午後から始まり、やることも少なかった。大半の時間を無駄にしている、命は無意味で流していた。しかし、夏休みに、国に帰って、短い休暇で悪い習慣を変えることを決めた。そこで、計画を立てた。だいたい、8時ぐらいを起きて、昼まで学習の時間、午後から11時まで自由の時間。11時ぐらいに寝る。最初はこの計画の意識があるが、なかなかやり続けられないので、家族の助けを借りたところ、やり続けることができた。その結果、一番得たのは自律である。次は自律から得た影響、肌はツルツルになって、外見をよくなることもあるし、体も元気になる。

そろそろ夏休みを終わるとき、日本に戻った。最初の何日は、自律を続けていた。が、あるきっかけで、元の習慣に戻った。それは、アルバイトであった。なぜかという、今をやっているアルバイトは夜10時で終わる。家に帰ったら、11時ぐらいになっていた。そんな時に、早くシャワーを浴びて寝るはずなのに、体が疲れて、動たくないから。そのまま、座って疲労を取る。少々元気があったら、もはや、遅くになっていた。寝るときも、当然遅くなったから。そんなの時、私はいい習慣を簡単に潰されると思つた。

特に、海外で一人暮らすのは、習慣を成り立つことが一番難しいと思う。自分はどうして続けられないのか。一番大きいな原因はスマートフォンだと思う。今を考えたら、一日中に、寝る時間以外には、ほとんどスマートフォンを触っていた。時間を無駄にするだけではなくて、1時間で終わりことは、何倍の時間を使って終わらせる。こう考えたら、スマートフォンは習慣になれる道の途中で大きいな邪魔である。自分は、もはや携帯依存症になったかもしれない。現社会では、誰でも長時間でスマートフォンをさわって、やることが延期に完成する経験があると思う。いま、わたしは、完全にスマートフォンを触れない方法をまだ見つかっていない。出来るだけ、普段の生活で、目に見えないところを置く。何回を試したら、効果がある。スマートフォンを触っていない時間で、集中が出来ていて、効率性が上がる。

また、生活の中に、自分は早起早寝や運動など諦めて、時間をかけて自分の人生を考えず、無意味な一日を過ごしていた。しかし、年を取ると共に、一日中に何もしなかったことが多くて、自分は苦しくなりつつある。その原因は、怠けは習慣になり、自律がなかったからだ。このままだと自分の心、外見、さらに人生が崩れていく。だから、夏休みのうちに、こころから決めて、今までの悪習慣を変えようとした。すべてを変えるのは難しいから、小さなことから始めた。寝る時間と起き時間を変えることである。前は、ほとんど深夜2、3で寝て、午後から起きていて、一日2食、しかも、食べ時間も遅い。最初は難しかった、でも家族の支援で、だんだん無意識に夜の11時ぐらい眠たくなる。それから、朝9時ぐらい目を覚める。食事が増えて、一日三食がある。寝る時間の変化だけではなく、体の表面的なものも変わる。皮膚がツルツルになって、クマもどんどん消えてくる。健康になる。それから、一日の時間が長くなる。そして、他の習慣も、ちょっとずつ変わっている。今日やるべきことどんどん今日で済み。一日がだんだん充実している。もはや、今まで最高の達成感だ。

いい習慣を養うために、三十日で続けることが必要不可欠であると言われていた。そういう変わった経験があったから、その話を十分に理解できる。いい習慣を続ける過程が一番難しいけど、できたら、宝物のようなものになることを信じている。

そして、大学の授業では、いい習慣を意識して、保つ授業もある。大学生として自立した人格と能力を身につけて、将来の就職のためという授業だ。授業の中で、習慣はメインで教わっている。この授業を通して、さらに意識が高まった、習慣は今の短いものじゃなくて、一生についていくものだ。

自律を身につけたら、大学の生活だけではなく、将来、社会人になっても、役に立つと思う。そして、自分の人生が大きく変わるだと思ふ。将来の自分を想像に見ると、自分は毎日やるべきことをやって終わるから。暇の時間は、自分をもっと充実するため、運動や読書などやったりする。だから、今のうちに、自律の習慣を養うべきだ。

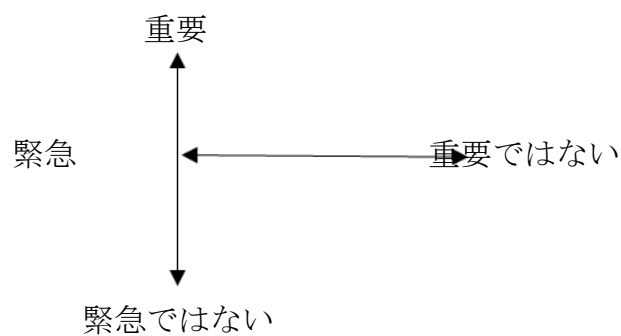


図 1

参考になった本

「7つの習慣ティーンズ」 ショーン・コヴィー(著)

感想：

このレポートをようやく書きあげた。最初は最終的に 4000 字以上を聞かれた時、ビックリしました。あり得ないと頭に浮かべて、出来なかったかもしれない。しかし、最後は、私は出来た。一瞬は感動した。習慣というテーマを選んだ理由は、書きやすいと実に習慣を身に付けたいことである。しかし、実際に書いてみると、書きにくかった。そこで、私は先生とクラスメートに感謝したい。毎回の助言があるから、レポートの内容が豊富になっていた。

また、この一年で文章を書く訓練で、文章を書く能力がアップしたと感じていた。一年前後に比べて、一番得感想というのは、書ければ、文章をどんどん書かれる。この一年間で有意義で過ごした。



2017 秋学期 日本語Ⅱ

大学でやりたいことをテーマとしたレポート（最終版）*

「自分を賢く、卒業後競争力のある人材になることを目指す」

免責条項：このレポート*全ての内容が関西学院大学三田キャンパス総合政策学部一年生氏名劉格のことが作り、書いたもので有り、事前に同意の得てないCOPY行為、他者の著作権を侵害する事は一切無いと保証。また、このレポート*は学習交流を目的とした方法のみ使い、トラブル回避の為、内容全般の解釈権利は劉格のことが留保する。

* cover page and page 1 to 6

第一回修正：2017年10月09日

第二回修正：2017年10月23日

第三回修正：2017年11月20日

第四回修正：2017年11月26日

✍️：2017年12月11日

劉格

リュウカク
劉格

By 2017.12.11

学生番

レポート構成図

1. 大学でやりたいことの発見と背景
2. やりたいことの展開
3. やりたいこに達成する為にすること
 - 3.1.レバレッジとは何か
 - 3.2.思考体系の構築
 - 3.3.人格魅力の培養
 - 3.4.民族性を中心思想の指導方針に
4. 結論

1. 大学でやりたいことの発見と背景

意識形態を問わず、先進国であろうと、途中国であろうと、どの国の社会においても、残酷で更に事実であるのあるピラミッドのような形がし、目に見えない段階のものが存在している。同様に、教育についても、そのピラミッドが深々と人々に影響させつつある。例えば、ブルーカラー向けの教育やホワイトカラー向けの教育、統治階層向けの教育などのような、様々な人に様々な機能がする教育が分けている。ブルーカラーの教育では、簡単な仕事確保できるように技能を習得し、流れ作業ラインの一つの環節とし、綺麗に仕上げが出来れば、目標に達するのである。上に登り、中流層向けの教育では、人文的な素質が強調され、独自の考え力を磨かないといけなく、育成の中心は創造力のである。ただし、中流階層の教育から出来た人材はエリートではなく、工芸品のである。要は素敵に展示させ、社会に入ってからもっと上の階層の人に選考され、統治層の機嫌をとる能力が欠かせなく、比較的の良い仕事の確保が根本な目標。統治層の教育では、人の機嫌をとることやルール、いろいろな繁雑規則に従うのような勉強は無しに、目標は人の統御術、リーダーシップの育成、政策や選択の習得が中心。このよ

1 うなルールがしている社会像を自分が見当を付けなければならず、心当たりがあってからそれ
2 に応じて、努力して行く方向をはっきり見つけ、自分の人生、学習、生活をどんな様子に変わ
3 らせたいのかを発見し、計画するのは私が留学し、大学でやりたいことなのである。

4 2. やりたいことの展開

5 50年前のならば、社会のピラミッドが固化し、各階層の間の流動は不可能の時期だった。
6 統治層は殆ど一般の人の持つともなく、知る方法とも無い情報を持ち、情報、データを寡占
7 していた。今の情報化社会では、階層の間の流動の可能性が高くなって着た。情報、データは
8 誰とも手に入れることが容易に出来、あとは多く資源を得ることのみだ。統治層は既に何世代
9 も人脈、金銭、権力を積み重ねて来たので、ゆえにその持っている各資源の量を比べることに
10 なれない。今、そのピラミッドの上の層に登りたいのならば、競争力伸ばさせたいのならば、
11 そのキーは「梃子の原理」、金融用語でいえば、「レバレッジ能力」なのである。

12 3. やりたいこに達成する為にすること

13 3.1. レバレッジ能力とは何か

14 「レバレッジ能力」は元々金融用語であり、自己資本をもって経済とした目的の活動をす
15 る際に利益率を高めたいと意味する。私はこの言葉をここで運用して行きたい意味を簡単に言
16 うと、借金の能力、力を貸す能力、資源を貸す能力なのである。他人や各主体に投資、支持、資
17 源をもらえば、同じ一緒に始まって開始し、競争する人と比べると、もっと速い進むプロセス
18 が出来、成功する可能性も横方向で比べ、比較的が高い。主流の現代社会では資本と資源はど
19 んな条件であろうと、どんな環境であろうと、利益を追うのは当然。利益さえあるのところへ
20 行くのは生まれつきの天性なのである。社会で見ると、智慧と人格魅力を輸出できる人に、資本
21 と資源が言わなくても能動的に招いて来ており、各主体からの投資、投入、支持が勢の強く得
22 ることが出来る。大手会社好んで1~2割の年間利益も越える価値で能力のあるCEOを雇うこ
23 とは一番レバレッジ能力の重要性を説明できる良い例なのである。レバレッジ能力を高めるには
人によってそれぞれの方法はあるが、私なりの方法では、それをできる為智慧と人格魅力の
養成と輸出、独自の見解、見方、自分の考え体系の築くことが根本のであると思う。多くの私
たち凡人ので有り、社会で活動するとき、基本のルールは金銭の支払いと貨物の提供は同時

1 に行い、ひどい時に貨物の提供ができでも支払ってくれるさえ出来ない場合が少なく無い。こ
2 の様な同時に進む取り引きは何か欠点があるのかと言ったら、大したデメリットはないが、但
3 しこれを基づく発展のスピードは遅い。一方で、影響力と資源を持っている人達を見ると、大
4 部の人は彼らに自ずから近づいたり、自ずから情報を共有してあげたり、自ずから各種な便利
5 を提供してあげたりすることが多い。こうした結果、さらに勢力圏が広くなり、実力が強くな
6 り、この同時に進む取り引きのルールに従わなくても、様々な財力と人脈力が大勢に寄って来
7 る現象の原因とは何かというと、今寄って行けば、投資すれば、後で何倍の利益が得られるの
8 を予想できるのからだ。彼らはレバレッジ能力を利用し、一段と資源を持つようになり、一層
9 に成功するようになり、返って、払った代価は想像の通り、散々では無い。逆で見ると、一般
10 の人に自ずからサポートして来る場合が少ないので有る。その原因、他者はあなたがどのくら
11 い価値を持っているのか、未来性はあるかどうかを先に判断し、資産評価をし、良い投資対象
12 では無いと判断されてしまえば、一秒たりとも止まってなく去る。だからこそレバレッジ能力
13 の重要さはいうまでもなく、良い活躍を目指している私は、自分のレバレッジ能力を高めない
14 といけないと思う。

13 3.2.思考体系の構築

14 統治層教育を受ける彼らの授業では、多く考えたり、回答されたりする問題は人工知能が
15 人類社会に与える影響はなにか、増税および減税が社会へどんな結果をもたらすのかなどのこ
16 とのである。このような問題は正しいのA選択肢、正しく無いのB選択肢というはっきりとした
17 答えはなく、問われるのは学習者の論理性、自分の観点に支える根拠の捜査と分別という能力。
18 彼らの将来において面する環境はただしいか正しくないかと限りした問題ではなく、全ては責
19 任と選択ので有る。凡人の私とし、どうやら逆襲出来るのか、そのキーはレバレッジ能力を身
20 につくことだ思う。それができたこそ、他者に投資、投入、支持、資源を要求する時比較的
21 容易に手に入れられ、スタートするのは早く、優勢を占める。ただし、大半の投資側はかなり
22 口が肥え、視野が成熟で、未来性の見えないプログラムには投ずるのはほぼ不可能。そこに、
23 自分が良いプログラムだと見せることには、真にの智慧輸出、人に鮮烈なインパクトを与え、
さらに人に大いにの啓発が極めどころなのであると私はこう思う。言い換えれば、仕事場であらう
と、社会であらうと、学校であらうと、時々刻々に私たちは資産評価されているのであり、そ

1 の人は独自の見解と観点は持っているかどうか、きちんとした思考体系が築いているのか、問
2 題にの解決力は強いなのか。従って、自己の思考体系構築出来るには、大量で各分野の知識と
3 情報の吸収を通し、量の積み重ねから質の変化に達するという過程のである。現代社会では総合
4 力的な人材が貴重品という背景に応じて、総合政策学部は絶好の学びの場だと思う。なぜなら、
5 2年の階段から会計学、経営学、企業法、社会保障法、財政学、行政学、公共哲学、国際貿易
6 法など分野の幅広いの科目履修が可能で、私にとって、この全ての内容を摂取したい。一つの
7 分野に絞って専門家になるのは良いが、でも長い目線で見ると、具体的な身近で発生している
8 様々な問題どちらであろうと、複雑な要因の絡んでいる問題ではない問題はない。だからこそ、
9 幅広い分野のことに触りながら、良い輸出ができるように工夫するのは思考体系の構築のであ
10 る。私にとっては大学を出る前にこの能力のアップは議事日程の一番目重要のである。

11 3.3.人格魅力の培養

12 思考体系の構築が出来た後は、あるいは同時に、人格魅力の培養も不可欠。ただし、思考
13 体系の築くことは人格魅力の上せることの充分必需条件である。相当に磨いた人格を無くして
14 は、魅力にならない。鋭いの考えを無くしては、魅力的な人格とは言えない。人格は人という
15 媒介の違いによって、表した素質はそれぞれ、一括に人格魅力を論述するのは困難で、反証の
16 ならば、人格魅力の無い者は人の言うことに同調し、定見はなく、判断を下す時に果敢に出来
17 ない。一步譲って言わば、自信昂揚、自負せず、他人からの見方を自分の道の交通信号にさせ
18 ず、目標明確、眼差し堅固。

19 3.4.民族性を中心思想の指導方針に

20 更に自分の民族性の特色も加えれば、アピールできると私は考えている。大きく広い視覚で
21 一覽すると、以前の何倍にも変化の激しい世界に生きている人間として、衝突やトラブル、身
22 近にも屢々周囲からの敵意や偏見と排斥などの気が迫ってくるのをよく感じをし、体験したこ
23 とがある。とはいうものの、それをものともしない方針を立ち、言い換えるとそのような鋭い

1 状況にあっても、平穩に対応をし、落ち着けることができには、方法は民族文化を尊重し、奥
2 深いところにある智慧を自ら探すことのである。こうしたら、世界がいくら変化しても、自分
3 の民族文化への復帰と温習に通し、最古の知恵を用い、冷静で落ち着いた心身状態でこの世界
4 を観察し、この未知のことが多い時代に、よく知らない物事に適度な畏敬を持ってうごくのは
5 最も賢い姿勢であるとする。現代社会学、現代経済学、現代科学などの知識を掌握ができた
6 上、民族性を自分の核にさせ、これをきっかけに私は「莊子」という代表的な本を選んで読ん
7 だ。中国哲学や文学と道徳観などの分野において、彼は深く大きな影響力を持つ。作家として
8 人たちに響いてくる。例えば本のかなで、莊子は次のように述べている「君子之交淡若水，小
9 人之交甘若醴」。意味は、賢い同士間の関係は水のうような、薄く、互いに冷静的な存在で有
10 る。「子供の頃に全然こうとは思わなかった、年をとるにつれて、この言葉の意味を賛成でき
11 るように、理解できるようになった。見た目は非常に親しく、大騒ぎばかりの関係、根本的に
12 はその正反対、脆弱だ。何か小さなトラブルや喧嘩が生じるとすぐ崩れてしまうのをよく見え
13 る。私もその辛いことを体験したことが有る」と私は感想した。さらに、莊子は次のように述
14 べている「大知閑閑，小知间间；大言炎炎，小言詹詹。」最も知恵を持っている人は、常に闊達
15 で開豁でおおらかな姿勢を示している。細々にしすぎなことをこだわらないと意味する。私は
16 確かにそうのであると感じた。いまはちょっとずつ改善しているが、以前は緊張しやく、神経
17 質な人間だった。なぜ自分はそうだったのか見当もつかなかった。よくこの言葉を味わうと、
18 確かにこの言葉が言い当てている。緊張しやく、神経質だったの私はつまり修行がたりなく、
19 知識の量はまだそこそこのレベルなのに、集中にの必要ないことが気になり、考えすぎており、
20 結局じぶんが自分の障りになってしまった。違う都市を歩いているとき、特に違う国を歩いて
21 いるとき、ある微妙な感じが生じてきた。ひとつはこの世界が技術の発展かつ誰でもテクノロ
22 ジーを容易に使えるようになったがため、拒めないの勢いで同一に成りつつあるのであり、一
23 方で、違う文化のインパクトや感じ出来る違いの激しさは依然として強い存在感を持っている。
それぞれの国の私たちが育てたそれらそれぞれの自然気質には、見た目関係ないの思想家の思
想は実際に重要な位置が占められ、さらに人々の世界観、人生観、価値観、いわゆる三観に影
響させるのである。

4. 結論

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23

情報社会で生きている私たちは非常に幸運なのである。散々の情報の中で正しい情報を吸収し、レバレッジ能力を目標とし、堅く、穏やかに工夫すれば、私は卒業後、競争力のある人材で立派な人間になれるに間違いなく自信を持っている。

* * *

* * *

字数統計：4409

日本語授業Ⅱ感想

1. 一年間の日本語授業の勉強を通して、『大学でやりたいこと』というテーマに基づいて、文章を書く能力の向上と、本当に大学でやりたいことの発見。両方も出来たと感じている。自分にとって有利で、かなり有意義の授業のであらう。

1. きっかけ

福島第一原発事故発生以来、マスコミとSNSで流される非科学的なデマによる、世間には原発に対する印象が悪くなってきた。全世界の反核運動と同様に、原子力関連のデマは人心を惑わすため、時々感情的な訴えを投げ、非科学的、誇張的な話をする。こういうデマの影響を加えると、無色無臭の特性を持つ放射線に対して、一般大衆は本能的に怯えている。こういう恐怖な雰囲気に伴い、「原発を廃止」という声も高まってきて、野党と社会運動団体に通じて、国家政策（エネルギーミックス）までも多少影響した。（例えば今年夏、8月15日全国的な停電事件が起きた）こういう現状に対して不満を持つ僕は、「我が国の未来を変えたい！」という願望が生まれたから、総合政策学部にいる四年間に、エネルギー政策についてもっと研究したいと考えている。

2. 流されぬ

前に言った通り、原子力関連のデマはの影響力は強く、これらのデマは人々を本能的な恐怖を喚起（放射線の無色無臭の特性）に通じて、「反核」（国の政策に影響する）という目的に至る。これら強力なデマに向けて、実に僕も反核側の一員であった。

けれど、日々活発になってきた社会運動、つまり「誇張な反対理由を持つ反対側が主流意見になった」ことに対して、僕は引いた。「単純な恐怖を理由とし、原発を反対するのが本当に良いのか？」「原発のことを知らないまま反対するのが本当に大丈夫なのか？」当時の僕は疑問を持っていた。やがて、僕は家訓の『流されぬ』を思い出し、「原子力のことをもっと深く勉強したい、現状を自分の力で解説出来たい」という自己目標を設定してきた。

3. 知識を身につく

「核爆発は、90%以上の核分裂性物質が必要。原発が使っている燃料棒は5%の核分裂性物質しか持っていないため、原発の核爆発は不可能である。」。高校の時、物理教科書にこう書いてあった。文系の僕は、理科の成績が普通だったけど、科学に興味を持っていたため、このような基本の科学知識は、進学校生として普通に覚えていたが、活用していなかった。

家訓を思い出し、「原子力のことをもっと深く勉強したい、現状を自分の力で解説出来たい」という目標を掲げた僕は、高校二年（復学後）の夏休みから、民間科学団体「原子力流言結者」での交流を積極的に参加した。それに、この団体を通じて、国立清華大学主催のエネルギー合宿研修に参加した。そのときは四日間の集中授業を受け、最終日は台湾原子力第四発電所（未稼働）を見学した。同年の十二月も「中華民国原子力学会」主催の核燃料処理会議に出席した。その後も、様々な講座や、見学に行き、経験を積んだ。最も近いのは2016年夏、ほぼ一年前台湾電力主催の第三原子力発電所（稼働中）の研修であった。七日間の密集授業と各施設（リアクター周辺、核燃料貯蔵プールなど）の見学で、もっとたくさんの知識を得た。

けれど、知識を覚えてままだけではいけない、問題点を発掘して、捉え上げ、社会のゆくえを導くのが、我々専門知識を持つ文系人たちの使命だ。

4. 誤解を解く

ここで、エネルギーミックスや、原発に対して常時大衆に間違えしめ、いくつかの誤解や原理を説明する：

- ① 福島第一原発事故は、地震と津波によって電源喪失。そして降温できずに、ジルコニウムが酸化（水から酸素を奪う）による水素生成。最後に炉と格納容器の「圧力耐性が弱い」設計欠陥による、溜った水素が漏れて、水素爆発を起こしただけだ。
- ② チェルノブイリ原発事故は、燃えやすい黒鉛（炭素）で中性子を減速と、格納容器

が設置されていないという根本的な設計欠陥だ。従業員の操作ミスによって、火災が発生、そして黒鉛の燃焼が核燃料に波及した結果、大量の放射性物質が煙と一緒に大気中に突っ込んで、大面積の汚染を至った。

- ③ 核燃料の中に、核分裂性を持つ物質（U-235、Pu-239 など）は5%しかいない。約90%以上の核分裂性物質を持つ核爆弾とは違い、原発で使う核燃料は物理的に核爆発できないのだ。
- ④ 第三世代リアクターの使用済み核燃料も、第四世代リアクター（高速増殖炉、熔融塩原子炉など）に発電し続けられ、半永久的な「循環可能」エネルギーとして人類社会の繁栄に貢献できる。（キーワード：核燃料サイクル）
- ⑤ 核燃料の半減期も、核変換技術（高速増殖炉、陽子加速器など）による、より早い（短い）半減期の放射核種に転換できる。それに、最後に「ガラス化」を加えたら、後に続く処置も易くなれるだろう。つまり、使用済み核燃料は決して永久不滅の「廃棄物」ではない。

すなわち、これら反対側の指摘が、実際には誤解である。原子力について正しい知識を周知しないと、温暖化は悪化し続けるだけだ。

5. 原子力と温暖化

近年、地球温暖化によって、極端な気象現象が世界中に起こっている。我々人類今最大の課題が地球温暖化である。化石燃料に高度依存している人類社会は、毎日約一億トンの二酸化炭素（CO₂）を排出している。このまま進むと、2050年紅葉の季節はクリスマスになる。氷山溶解による太陽光反射面積の減少、海水酸性化による珊瑚の石灰化、温かい海水によるスーパー台風、熱膨脹による海水準上昇などなど。言い換えれば、我々は毎日自分の首を少しずつ絞め、毎日滅亡に近づいている。

地球温暖化を防ぐために、二酸化炭素などの温室効果ガスの排出を抑えないといけない。IEA（国際エネルギー機関）の「世界総発電量」の内訳を見ると、2010年全世界の電気のエネルギーソースは：石炭41%、天然ガス21%、水力15.9%、原子力13.4%、石油5.5%とその他2.8%であった。

こういう現状に対して、国連特設の機構IPCC（気候変動に関する政府間パネル）が、同じく分類が「ベースロード電源」の原子力で、石炭発電を引き替えによって、「二酸化炭素の排出を抑える」という方向を報告された。

いわゆる、エネルギー政策というのは、人々の好きや嫌いで決めるものではない。我々の課題は「原子力を大規模稼働することが必要なのに、世間はまだ原子力に怯えている」ということである。人類は動物ではない、火を操るものであり、アトムを操ることも困難ではないはず。

6. 努めたいこと

僕は「自らの知識を増やすことなく、単に何かを怯えて、そして何かを反対する。」ということが嫌いだ。噎に因りて食を廃すことは絶対正しいではない。特に人類存亡に関わる事態で、人心がこういう状態になれば、人類はいつか自らの愚かさに殺されるだろう。こういうあり得ない結果を生み出さないよう、僕はこの局面を逆転したい。

日本は世界中唯一、戦争における原爆を受けた、それに深刻な原子力事故が発生した国だ。言い難いことだけど、日本は原子力安全、及び放射線による人体への影響などの研究にとって、恰好のサンプルだと思う。だから僕はこの四年間に、原子力とエネルギー政策についてもっと研究したい。

7. 今年夏の出来こと

今年の夏休みに、僕は元々福島当地のNPOが主催され廃炉講座を受講したいと思ったけど、先方に事情があり、いけなくなった。しかし、前にお世話になった清華大学の葉教授に連絡したら、逆に教授と放射防護センターに依頼され、直接台湾から飛んできた傅さんと一緒に提携校の「福島県立会津学鳳高校」と「福島県立福島高校」へ訪問（インタビュー）しに行くことになった。また、浜通りの管制区域周辺で放射線量を測定しに行く予定になった。面白いことは、福島高校に訪問（インタビュー）しに行った時に、『福島第一原発廃炉図鑑』にも執筆した共同著者の林智裕さんはスペシャルゲストとして、風評被害や福島復興の現状について色々話し合えたことだ。『福島第一原発廃炉図鑑』は福島第一原発の現状、問題、廃炉の手順と周辺地域住民たちの復興現状、風評被害について書いてあった。林智裕さんは、福島関連デマの撲滅を務めている方で、『福島第一原発廃炉図鑑』の中には主にデマの検証とコラム執筆を担当している。（『コラム検証 福島第一原発・廃炉関連のデマ 林智裕』）林さんは、福島関連デマの撲滅を務めているので、インタビューの時はこう語った：「…実は僕は、原子力についての常識は、必修として、義務教育に入るべきだと思う…」、「…世間にはまだ『放射線はうつる』のようなデマが流れている…」。僕は林さんのこの発言に対して、感触がかなり深い。台湾でのデマは完全に非科学的、感情的であるもの。物理規則や常識を無視し、ただ恐怖を散布するだけだ。特にインタビューの時に、高校生のあやめも風評被害の遭遇を語った：「…当時は生活機能が不便過ぎて、うちは二年間神奈川県に移住した。でも従兄弟が『あやめ家は逃げてきたの？』と聞いて…」。ここまで聞いた後、僕は一つ大事な事を理解した：「風評被害は悪意を含めた言葉種類だけではなく、無意識の中に言葉遣いを間違っても、ある人への風評被害になるかもしれない」ということだ。

福島訪問旅行の終わりと共に、今年の夏休みは終わった。清華大学の教授たちも、来年十月くらいに福島第一原発へ行く予定があると語った。もし機会があったら、僕は絶対福島第一原発へもう一度見学しに行きたい。それは、台湾と日本は同じく燃料の輸入を高度依存する独立電力系統なので、エネルギー政策の組み方も近いはずだと思う。だから僕は進む。これが、僕の四年間努めたいこと。

8. 授業について感想

この一年間日本語の授業を受けて、この日本語学校に通ったことない僕は、文章を作る能力が結構伸びてきたと思う。ほかの人たちの文章と比べると構成はまだボロボロかもしれないけど、過去の自分と比べると、結構変わったの気がする。それに、この「四年間計画」を作ることに通じて、自分の歩んだ道を再検視した。自分は一体何がやりたいのか、何を目標とするのかをもう一度確認した。先生たちには感謝しかない。

参考資料：

- 開沼博 『福島第一原発廃炉図鑑』 2016年 太田出版
- 澤昭裕 『精神論ぬきの電力入門』 2012年 新潮新書
- 台湾電力『断然処置についての補充資料』 2013年 台湾電力
- 経済産業省『エネルギー基本計画』 2014年 資源エネルギー庁サイト
- 経済産業省『日本のエネルギー』 2014年 資源エネルギー庁サイト
- 経済産業省 『エネルギー白書2017』 2017年 経済産業調査会

コミュニケーションを身につけたい

魯晶媛

やりたいこと

大学生活はとても自由で楽しい時期と言われています。私大学四年間で色々やってみたいことがあります。その中で最もやりたいことはコミュニケーション能力を身に付けることです。

定義

まずコミュニケーションとは何でしょう。人によってコミュニケーションの定義も違ってきます。私が思ったコミュニケーション能力は、言語力、自己表現力、交渉力があって、自分の考えを明確に表現する能力、そして、相手の気持ちを尊重して、話すとき相手に不快感を与えないということです。

きっかけ

私は日本に来た後、コミュニケーション能力はどんな大切なことが気がきました。初めて日本に来た時、たくさんの人と出会うことが出来て、例え初対面の人と会った時は相手に嫌われるか、ちゃんと会話返事できるのかなど考えたらずも緊張して、何を話せば良いかわからなかったです。色々考えたらずもなかなか声をかけることができず、後会話が止まるのがとても辛いだと思って、なかなかうまく話せませんでした。私は目立つことがとても苦手なので、学校で活動があった時も表現力がないから、いつもチャンスを逃がしてしまいました。そして、日本に来たあと日本人の友達を作りましたが、その時日本語も全然できず、交流するのは顔の表情と身振りとかしかできませんでした。本当はそういう意味ではないけど、伝え方によってその時よく勘違いしました。一つのことだけではなく、生活中で、たぶたぶ間違っ、誤解もあって、辛い時もたくさんありました。みんなこんな時がなかったのでしょうか。同じ意味の言葉で、伝え仕方によって、聞く人の気持ちも違い、結果までも変わってきます。例えば、友達があなたの欠点を指摘する時、表情や話し方がきついと、相手の気持ちがわかるけど、ちょっと不快感が出て来ます。一方、話す時の表情と話し方が優しくして、気持ちもよくて、すぐ納得できる。私自身もたくさんこんなことがありました。だからその時、コミュニケーション能力はこんなに大切なのかと気づき、大学生になったら、高めたいと決心しました。

コミュニケーションの重要性

日常生活する時、友達と付き合う時、初めて出会う時、初対面の印象はとても重要です。初対面の時は服装などももちろん重要ですが、でもどんなにかっこう良くても、表情が怖くて、会話がダメなら、いい印象が残らないです。だから、コミュニケーション能力が必要です。そして、日本語は今日本にいるので、コミュニケーションの前提として不可欠の一部です。また、表現力がないと、ほかの人があなたのこと知りたいけど知ることができない、チャンスがあってもすぐ失ってしまいます。初めて出会った人とうまく話せますか、

自分が伝えたいことがちゃんと伝えられるか、話す時はほかの人に傷つけなかったかはとても重要です。だから、自己表現力、話し方や会話の仕方、人間関係の築き方などは全部コミュニケーション能力の一部です。今だけではなく、今後の就職でも、職場の中でも、社会の中でも、必ずコミュニケーション能力は不可欠の能力です。

高める方法

この能力を身に付けるため、今は日本語はコミュニケーションの前提として日本語を高めるように毎日日本語を勉強して、日本人と会話して、日本語の会話力を高めたいです。そして大学ではまず授業の時積極的に発言して、発表がある時は出来るだけ緊張せず、自分が伝えたいことをちゃんと伝えるように頑張りたいです。後は、学校は交流とかのチャンスがあったら、わついても出来るだけ取り組みたい、萌う逃げ出したくないので、勇気を出したいとおもっています。今後友達でも家族でも、初対面の人でも、会話をする時話す前はまず相手の立場に立って、相手に傷ついてないか、相手の気持ちをちゃんと考えてから話たいと思います。その後、以前アルバイトをしたことがないですが、今後アルバイトを通り、色々な人と出会うことができるので、話し合っってコミュニケーション能力を高めたいと思っています。

言葉はとても複雑で不思議な学問です、表情と一言の違いによって、結果も変えますし、他人の感じも変わって来ます。だから、自分のためでも、相手のためでも大学四年間で色々を通りコミュニケーション能力を身につけたいと思っています。

本

そこで、コミュニケーションを高めるため、夏休みで「伝え方が9割」という本を読みました。この本はまず筆者の体験から伝える能力の重要性について書いてあります。まず伝え方はコミュニケーションの中で一番重要なことです。伝え方や言葉の技術を持っている人は働く時の成果が良いと書者が言いました。働く時だけではなく、学校の中でも、生活の中でも同じことだと私は思いました。そして、どうやって相手からの返事は「イエス」にできるのかも一つの能力です。伝える時の言葉でイエスの確率をあげることができます。まずそのまま言葉にしない、そして相手の立場に立ち工夫することです。この本はたくさんの方が書いてあります、例えば「話す時相手の好きなことをいう、嫌いなことを回避、選択の自由、認められたい欲、あなたの限定、チームワーク化、感謝」など、これらの方法を使ったら、コミュニケーションも上手になれます。読む時も、あの時こうじゃなくてああ言えばよかったと思った場面が思い出されました。

本の例

伝え方や言葉によって結果も変わっていくと私は思いました。本の中にもこの例が挙げられます。例えば職場で「この領収書、おとせますか？」という場合もしあなたは目を合われることなく無表情に言えば、その時「それはおとせません」と返事させる確率が高いでしょう。では伝え方を変えてこう伝えたらどうでしょう。「いつもありがとう、山田さん。この領収書、おとせますか」そして、目を合わせて言ったら、これだけの差で、成功な確率も上がります。この事例を通じて、ひとつのことを分かりました。頼むことがある時ありがとう言ったら、人も否定しにくいから、後は言葉の後名前を付けて、相手も返事したいです。

そして、本の中でもう一つの方法が書かれています。それは強いこと場を作ることです。ある調査の中で今の社会では、情報量が多く、感動のない言葉なら無視される時代です。同じ内容なのに、強い言葉と弱い言葉がある、例えば、「記憶に残る選手」より、「記録より、記憶に残る選手」の方が印象に残るではないですか。そして、強い言葉で何ですか。これは心が揺さぶられる言葉デズ無視しておけない言葉です。例えば、言葉の前で「びつ

くり、そうだ、ほら、実は、など」をつけたら感じが変わってきます。

まとめ

この方法は仕事の間だけではなく、学校の間でも、友達と付き合う時でも同じことです。以前言葉の力がこんなに大きいと思いませんでしたが、本当に話す前に名前をつけたり、一言で感謝を言ったりするだけで聞く人の気持ちも変わっていくことが分りました。

コミュニケーションが上手な人はどんな程度になったら上手に言えますか。これを全部できたら、他の人ばかり考えたら、自分を失い、円滑な人になるではないか。私も最初思いました。これで本当にいいことでしょうか、最初私もよくわからなかつたです。でもどんなことでも行き過ぎない方が一番なことだと思います。相手を考えて傷つかないことがもちろん、自分の考えや原則を守ることも重要です。そして、方法を使って話すではなく、言葉でやはり感情が大切です。感謝がこもっていない言葉に人が動かされることはありません、感謝が込めている言葉だからこそ、人を動かされるのだと思います。コミュニケーションも感情を含む言葉を振り返す伝えることです。

本の中はたくさんの例を上げて、方法も一つではなくたくさん書きました。でもこの全部の方法を理解し、生活の中で運用できるのは誰でもできる事ではないと思います。一番簡単な方法は相手の立場に立ってから話す、なぜなら、もし自分なら、この言葉を聞いてどんな気持ちになるか、この表情でいいのかを考えたら大丈夫だと思うからです。コミュニケーションは本当にさまざまな定義があつて、どれが正しいのは言えない、でも本を読んだ後私にとってのコミュニケーションは伝え方、どんな方法でも伝え方が基礎なので、これが一番重要な事だと考えました。

普段生活の中でもし伝え方がよければ、不要なトラブルや喧嘩も少なくし、もっと楽になるではないか。だから、この能力は生活の中で不可欠な能力だと思います。この本の中に書いた方法は簡単に見えるが、実際にする事が簡単ではないです。でも今後も時間をかけて、自分に合う方法を探し出し、うまくできるように頑張りたいと思います。

コミュニケーション能力は一瞬に身につく能力ではなく、生活の中で自分に合う方法を探し出し、実践しながら高めていくことです。今後私も実践しながら大学の四年間で高めていきたいと思っています。

授業の感想

この一年間で日本語授業を通じて、レポートを完成しました。最初ジャ大学でやりたい事何千字を覚のは無理だと思いました。でも何度も発表して、意見を聞いて、修正する事によって、やっとレポートを完成しました。この一年間で一つのレポートを書いただけではなく、この過程の中に日本語を高め、他の人にどうやって自分の考えを説明するか、プレゼンの能力も高めました。そして、何回も振替したのですが、毎回新しい意見や考えを出て、修正するところがあります。だから、今後のレポートも何度も読む返して、中の足りない部分をだんだん修正して、書いてレポートがいいレポートになるように頑張りたいと思います。

引用文献

伝え方が9割 2013 佐々木

3 クラス

担当 横野 さゆる

概要

はじめに：日本語留学を決めた理由 (1)

大学でやりたいこと

1. 新しい環境に慣れていきたい。
2. 日本の文化を理解したい。
3. AI について興味が生じ、勉強してみたい。
4. 日本語をもっとペラペラになるよう頑張りたい。

5. 結論

6. 感想

(1) 私が日本留学を決めたのは高校3年生の時です。韓国の受験は英語点数が必ず要るが私は英語ができませんでした。しかし、やはり大学の勉強をしてみたいと思って、出した結論が日本留学です。何故日本留学かというところと日本は韓国と近い国で韓国と似ているところが多く、韓国より先進国なので日本を選びました。しかし、日本語を勉強したこともないし、元々理系だった私は、最初から、漠然としていました。でも、諦めず約6ヶ月ぐらい本当に頑張って勉強しました。この結果としてあるのが今の関西学院大学にいる私です。

1 私が大学生になって、一番やりたいことは新しい環境で友達をたくさん作ることです。様々な理由の中で、一つは日本の文化を理解するためです。将来、日本で就職したいので、日本を理解することは必ず必要なことだと思います。では、一体、他国を理解することはなんだろうかと聞かれると、私は自分が心から本音で、その国の人々の行動を理解し、ついて行ってあげることだと思います。そして、私が他国を理解するために一番大事なことは直接、人と会うことだと思います。直接あって、一緒に生きると本とかテレビなどには見えない姿が見られると思います。なぜかというと、私が高校の時、私はイスラム教の人は、全員がISみたいな人々だと思って、イスラム教自体が危ないと思って、どうして、こんなに危ない宗教が世界3大宗教の一つだろうか考えるほど、私の中でイスラム教の認識はよくないでした。しかし、実際にイスラム教の人と交流して見た友達の考えは私とは違いました。例えば、私の友達はイスラム教の皆がISの過激な方式に賛成していることではないし逆にISのせいでイスラム教についての偏見が生まれるのを恐れている人たちもいる、

話し合ってみると IS のことを嫌いなイスラムの人もいたと言いました。この状況で私が感じたのは文化と言うものはテレビとか新聞を見るだけではきちんと理解できないし、理解出来ていない状態では、先入観が生じるだけで、その文化の人と交流する機会を失ってしまうということです。一方、その文化と直接交流してみた人は少し違う視線で見られると思います。そのため、私が先入観なくきちんと日本の文化を理解するためにはテレビや本、ネットだけではなく、近くで一緒に生きることが必ず要ると思います。例えば、一緒に旅行に行ったり、買い物に行ったり、カラオケに行ったり、食べ物を食べたりするなど友達と一緒にするすべてが、一緒に生きることだと思います。つまり、直接人と会い、いろんなことを経験しながら体で感じさせるのが一番大事だと思います。

3 また、春学期に、私はやりたいこと、興味を持てることを探したかったのです。そうしていたところ今回の夏休みに AI に興味を持ちました。AI に興味ができたきっかけは本です。最初選んだ 3 冊の本ではなく新しい本を選んだ理由は、私が最初に選んだ 3 冊の本の中では素直に言ってあまり私が興味を引かれる本はありませんでした。しかし、宿題はやらないとダメなので本を読む選択肢しか持たなかった私は、とりあえず書店に行きました。書店で本を探している途中で AI について色々なことがいっぱい書いてある本を発見しました。その本の名は松尾豊（まつおゆたか）さんが書いた「人工知能は人間を超えるか」という本です。私は、今回夏休みに読んで、「あー将来 AI にかかわる仕事をやったらおもしろそうだな」と思いました。松尾豊さんは東京大学工学部電子情報工学科を卒業し、卒業の後、人工知能、ウェブマイニング、ビッグデータ分析また、人工知能論文賞など様々な賞を受賞し 2014 年には日本トップクラスの人工知能研究者の一人として認められました。この本は人工知能、つまり AI について扱っています。私たちが持っている AI の誤解、例えば、最近世の中には、AI がいつもは人間より賢くなって、人間を脅かすかもしれない、ターミネーターみたいに人間を支配するかもしれない、もしくは、現実的に人間は仕事を奪われてもっと就職が難しくなって、生きることが辛くなるかもしれないなど平凡な人々が考えそうなものについて叙述しています。それ以外にも AI の原理とか、未来にはなくなる仕事、新しく生じる仕事など色々書いていました。この本を読んで私は AI について興味が生じました。AI の究極の目標は AI 自身が自ら判断し、学びながら、ほかの AI を教えて最後には、自分より賢い AI を AI が作ることだと思います。

もちろん、現在の技術力ではできないことだと書いてありました。私が読んだ本はただ1冊であり、私は専門的な知識もなく、これが本当なのかどうかはわかりません。しかし、今はっきり言えることは

私はこの本を読んで、実際もうすぐ来る AI の世界は素晴らしいと思い、実際に私も AI について勉強してみたい、作ってみたいと思いましたが私は理系ではないので将来 AI 開発に直接参加して大きな業績を残すことはできないと思いました。しかし、理系分野でも、絶対文系の思考を必要とするところがあるだと言われました。この言葉から勇気を得て、将来、AI について業績を残すため一生懸命頑張りたいと思います。そのため、AI を勉強させるプログラミングを作ることを目標として、まずプログラミング技術を学ぶことが必要不可欠だと思います。そのためには、社会メディア学科に入って、プログラミングスキルを勉強する必要があると思います。また、決めたばかりなので、何を勉強するべきか、どんな企業に入ったら良さそうかとかは正確にはまだわかりません。そのため、この秋学期はプログラマーになるための必要な技術とか、必要な勉強、知識などを調べて勉強して見つけるつもりです。たとえ、ただの本一冊でいきなり出た夢だけど私は心から面白いと思いました。この秋学期には、頑張って私の将来の夢のため、走る準備を終わらせたいです。

4 それ以外にも、日本語を喋る機会が増えて日本語もぺらぺらに話すことができるようになることも期待しています。当然なことですが、将来、日本で生活とか、就職する際に日本語は必要です。特に漢字よりはアクセントや発音とかがもっと自然になること、つまり、日本人みたいに喋れるようになることに気に入りたいです。日本語アクセントとか発音は一人では勉強できないと思います。実際、韓国人は‘つ’の発音ができないらしいです。このように気づけない発音があります。

これは日本人に直接教えてもらわないとダメだと思います。でも、今、もう春学期が過ぎた時点で私はあまり日本人と仲良くなれていないと思います。日本語勉強をしている間に日本の文化の理解をもっと深くするためにはなによりも日本人と会って直接身に付けることが大切だと思います。そのため、今回はミリネへ入って日本人の友達ができるように頑張りたいです。日本人友達が出来たら文化を理解しやすいので私の日本語の実力が大きく上昇することを期待しています。なによりも、留学の一番いいメリットは色々な外国人と会えることだと思います。そんな理由で、色々な人

と交流したいです。また、友達は人生にとって大事な財産だと思われるので、できる限り多くの人といろいろな人と仲良くなりたいです。

5 以上の内容によると、私は大学に入ってやりたいことは三つであります。一つ目は日本文化をもっと理解し受け入れて共感できるようになることです。ただの理解では足りないと思い、将来日本で就職などのためには必ず要ると思います。二つ目は、一つ目と関連性がありますが今よりもっと日本語に慣れていくことです。慣れることはただの日本語がうまい外国人ではなく、本当の日本人レベルになることです。また、日本語に慣れると慣れば慣れるほど日本文化を共感しやすくなると思います。最後の三つめは究極的に人工知能の発展に寄与する仕事をやりたいです。このため、大学ではメディア社会学科に入って、プログラミング言語を学びながら、人工知能について勉強して行きたいと思います。

6 この日本語授業は日本に来たばかりである私に、日本語に慣れるいいチャンス与えてくれたと思います。最初、来た時は日本語にあまり慣れてないので聞き間違ったり、自分の考えを伝えることが難しかったりしました。しかし、この日本語授業のおかげで少しは慣れる機会になったと思って自分なりにはほんとにいい授業だったと言えます。また、考えなければならぬことだが日常では考えにくいことについて考えてみるいい機会になったと思います。将来のこと、今やるべきこと、ここに来た意義など様々なことを考えられて面倒なところもあったが結果的には私に役に立ったいい授業だと思っています。来年また新しく入ってくる留学生たちにもこの授業は新しい日本生活に大きい役割をしてくれると信じています。

有意義な大学生活に送る

石勝

大学でやりたいことは2つに分けられる、一つは日本語能力を上達にすること。大学を卒業まで日本語のレベルは日本人ように話せるという目標を目指している。もうひとつは複雑な社会問題を解決すること。

今は日本にいるから目の前に茨の道は日本語である、生活や授業や交流など殆ど日本語を使うから、日本人の友達とコミュニケーションが大丈夫けど、でも専門的や意味深長の言葉や片仮名語など一回に聞いても分からない場合が少なくない。例えば授業で先生が講義内容を解説する時、たくさん片仮名や難しい文法が出てきた。自分にとって全くヒントが出てこない時、自分に対して無力感が襲われた。確かに私は外国人として分からなくてもしょうがないと他人に慰められた。しかし、私はそう思わない、子曰く「由よ、汝に之を知ることを誨えんか。これを知るをこれを知ると為し、知らざるを知らずと為す。是れ知るなり（孔子先生はおっしゃいました。お前に『知る』ということを教えてあげよう。きちんと知っていることを“知っている”とし、きちんと知らないことは“知らない”としなさい。これが知るということだよ）。この言葉は私の座右の銘である。講義を理解するために日本語が不可欠になる。ですからこれからもずっと勉強していく。分からないことを先生または友達に聞いて分かるに至るまで頑張っていくと思う。

勉強するために色々な手段を使って、自分の場合にとって一つ目は歌詞を通して勉強する。例えば 縹色（薄青色）、黄昏、月代（江戸時代以前の日本にみられた成人男性の髪型）、東雲（夜明け前に茜色にそまる空）、齷齪（細かいことを気にしすぎて余裕がない様子）、埒（鳥の寝る所）など単語。よく歌詞の中に出てきます。意味と発音がわからないと歌えないでしょうか。しかも、歌詞の全体の意味を把握した上で作者を伝えたいことも理解することができる。二番目は小説を読むことである。例えば「物語シリーズ」という小説の中で書かれた言葉を挙げると、剣呑（危険な感じがする）、剣ヶ峰（富士山）、胸突き八丁（目標に達する直前の最も苦しいところ）百日の説法屁一つ（長い間の苦労が、わずかな失敗のために無駄になってしまうこと）清濁（善でも悪でも分け隔てなく受け入れる。度量の大きいこと）など言葉一回読んだわけわからない場合が少なくない。ですから2つ方法を合わせて勉強する。

もうひとつ大学でやりたいことは複雑化社会問題を解決すること。今日も昨日も、世界は様々な問題であふれている、深刻な問題、大きな問題。自然破壊と環境問題、飢餓と飽食、平和と人権、先進国と発展途上国の問題、異なる民族や人種問題、宗教間の対立、男女差別など、現代社会の抱える問題は複雑に絡みあっている。そこで解決するために何のスキルを身に付けなければならないが大切である。

小さい頃から新聞やニュースをよく見た。新聞記事やニュース報道など莫大な社会問題が相次いで出てきた。政府からいろいろな解決政策は事件に対して対策した。事態により、解決策も違う。どの部分がもっと力を入れるが、どの部分が緩めにするか。コツを飲み込むことが重要だ。自分にとって問題を解決することがすきだ。例えば難しい数学問題を解いた喜び感を味わうこと、財布が見つけない場合は当日を通ったところを推理して、落と

しやすいところが順番を決め、そして訪れる、そういう流れで財布が落とした問題が解決することができる。細やかな問題を解決しても喜び感がある。大きな問題を解決した場合はどうなっているか。だから、大きな問題に挑戦したい、その頃から社会問題に関心を持っている。いつか自分でも社会問題に対して力を注げるかことを期待している。

したがって二年生の時、総合政策という学科を選んで。特に公共政策フィールドにたいして興味をもっている。公共政策フィールドでは、経済や政治、さらには政策の理念や目的を考える倫理学の成果を複合的に学びながら、人間を取り巻く様々な問題に対する具体的な解決策を出す。「公共政策」は一体なんですか。豊かな社会を作っていくためには、地域の問題から、国家レベルや国を越えた世界的な問題まで、解決するために私たちが積極的課題を取り組んでいかなければならない。

大学生のうち自分ににとって興味があるものをいっぱい触れて、有意義な大学を送りたい。先輩からいろいろな意見を聞いたが、最も重要なのは日本語能力と専門分野の知識と言われた。グローバル化が進んでいる世界中で留学生として異文化交流すると言語の能力が不可欠である。様々な人に出会って、違う文化を味わって。これは留学している間でもとても白いことである、または政策についてもっと知りたいことがある、策がどうやって作ったか、具体的実施するのはどんな困難が工夫するかなど、いろんな問題が抱えている自分は総合政策学科に入ったら解けるはずだ。

<日本のジェンダーを考える>川口章 有斐閣 2013

本書は作者が生まれてから引退までのライフコースに経験した。様々なジェンダー問題に対して深く考えた。人生では繰り返して巡り合う性役割の不条理に読者はどう対処すべきか。本書は教育、就職、結婚、子育て、性別分業、雇用制度、女性差別、色々な方面から染み渡ってジェンダーの問題点を分析する。

本の中で一番印象が残っている部分は「性別分業」日本では「男は仕事、女は家事」という分業を主とする。日本の性別役割分業は、社会に「家」が確立した中世から存在する。中世日本では、夫は「家」の対外的な活動を担う、妻は「家」の中の活動を担う。戦後、明治民法において制定された家制度が廃止され、夫は仕事に出かける。妻は育児、家事、に中心して家庭づくりに励んでいる、つまり核家族のイメージが広く一般化した。企業の賃金体系で男性に手厚いことになっていた。高度成長期に、既婚女性は労働から解放された。家庭の収入増加と生活安定によって、既婚女性が家庭主婦の場合が大勢を示されていた、性別役割分業が広まった。日本の工業化が進んでいるが原因のひとつであった。1990年代から2000年代の経済の停滞、賃金が下がる傾向によって、夫婦共に働くことが増加した、夫婦間の役割が見直されつつある。少子化から労働力不足ため、労働力の増加を期待した男女共同参画の政策を政府が進めている。

男女共同参画社会基本法が制定された。この法律は、男女が性別にかかわらずではなく、能力を發揮できるような社会を実現するために作ったものである。しかし、現代の家庭には、性別役割分担の考え方が残っている。そのため、女性が仕事、家事、育児もしていることも多く、負担が大きい。また、女性は育児のために、一度仕事をやめてしまうケースが多い。このため、管理職などの高い地位になることが難しい社会になっている。性別が原因で、不利な状態になることは良くない。そして、女性でも自分の能力が最大限に發揮できるような仕事をして、男性中心の社会を変えるべきである。このような理由から、性別役割分担をなくすべきだと考える。また、女性に対して賃金の格差がある。男女間の賃金格差(男性は100%すると)支給する現金は62.4%(厚生労働省雇用均等・児童家庭局)この現金給与額というのは、交通費などの手当を含み、所定内給与額とは手当を含ま

ないもののことである。このような男女間の賃金格差があるので、男性が育児で仕事を休むと、家庭が成り立たないというものである。しかし、このような賃金格差は、性別役割分担がなくなれば、解消されると言える。性別役割分担がなくなると、女性は仕事を辞めることが少なくなる。そうすると、管理職になる女性が増加し、賃金格差が徐々に縮まっていく。そして、女性は自分のやりたかった仕事につくことができ、仕事にやりがいを見出すことができる。

男性の労働時間が長いと家事、育児の参加が減る。仕事では残業などもある男性は仕事で忙しく、家事や育児ができないという現状が、遅くに帰ってくる男性が多い。そして、男性は仕事で忙しく、家事や育児ができないという現状が厳しい。このような忙しい男性にも休みの日は、子供の世話をしたり、家事を手伝ったり。

現在の日本は性別役割分担の考え方が根強く残っている。このように性別で役割を決めたことは良いことではない。これからこの考え方をなくす必要がある。そのため男女の賃金格差をなくす。そして、男性の育児・家事参加を促進する必要がある。日本もスウェーデンのように、男性も家事や育児をできるだけ分担して行うべきである。日本の男性もスウェーデンの男性を見習って、積極的に家事や育児に参加することが望ましい。そして、これからは性別役割分担をなくしていくべきである。

大学生のうち自分に興味があるものをいっぱい触れて、有意義な大学を送りたい。先輩からいろいろな意見を聞いたが、最も重要なのは日本語能力と専門分野の知識と言われた。グローバル化が進んでいる世界中で留学生として異文化交流すると言語の能力が不可欠である。様々な人に出会って、違う文化を味わって。これは留学している間でとても白いことである、または政策についてもっと知りたいことがある、策がどうやって作ったか、具体的実施するのはどんな困難が工夫するかなど、いろんな問題が抱えている自分は総合政策学科に入ったら解けるはずだ。

関西学院大学で日本語の授業に一年を通った、一年の間で様々知識や文章の表現力や発表力などを勉強した。自分で書いた文章が先生に評価するだけではなくクラス全員に向けて、いろんな意見を聞いた上で文章を直す。または自分がクラスメートの文章についてアドバイスを言ってあげる。他人が書いた文書はどこがうまかった、どこが足りないが一目瞭然である。他人の文章の優れている点を吸収して、劣っている点を注意する。だんだん文章の表現力が上達にする。

参考文献

日本のジェンダーを考える 川口章 有斐閣 2013

働く女性の状況-生労働省

www.mhlw.go.jp/bunya/koyoukintou/josei-jitsujo/dl/14b.pdf

家庭と職場における性別役割分業―働き方へ及ぼす影響

teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/bitstream/10083/.../5/3_41-53.pdf

日本の男性は家事をしないのは <https://togetter.com/li/1158855>

新しい米中冷戦時代の幕開けと私たちの暮らし

総合政策学部 1 年 孫政勝

私は中国の大連に生まれ、私の子供頃から家族が日本に在住していることがきっかけで、小さい頃から、日本という国に興味を持っていた。高校を卒業した後、すぐ日本に来た。日本語学校で約一年半の勉強を経て、琉球大学に入学し、3年間沖縄で学生生活を送った。父が医師として、一生懸命仕事に励む姿を見て、日中両国の架け橋になるような医師になりたいと決め、大学を辞め、塾を通いながら受験勉強を続けた。しかし、中々結果に結び付かない状況が続いたので、将来何をすべきか、もう一度自分を見つめ直した。

私は4回も医学部に挑戦したが、結果的に受験に全部失敗した。これ以上努力しても、年齢的にも体力的にも限界を感じたので、受験を諦めた。4年間ずっと毎日忙しかったのに、突然やる事がなくなった自分の存在意義について色々と考えた。しかし、なかなか答えを見つけることが出来なかった。(故郷の大連では、日本の企業が多数進出しており、中国のハイテク基地になっている。) その時、日本と中国で公認会計士の仕事をしている母から一冊の本を借りた。経済戦争の理論に関する本だった。暇つぶしのつもりで読んだ本に、いつの間にか寝食を忘れるほど夢中になった。アジアの巨人である中国はこの10年間、世界の工場と莫大な市場規模を背景に、凄まじいスピードで成長してきた。国際的地位の向上を求める中国とアメリカを中心とする自由資本主義陣営の間では既に激しい争奪戦が始まっている。中国が仕掛ける AIIB とアメリカ主導の TPP がその象徴である。遠くない将来に物理的な紛争ではなく、経済による争いが必ず起こると私は思う。そして、日本は地理的にも、政策的にもこの紛争を避けることが出来ないと予測する。現代資本主義の経済(資本)を如何に守り抜くことがこの戦争の鍵になると私は考える。また、生まれ育った中国の社会と日本社会の間に、私は来日当初から、ある違和感(矛盾)を感じていた。それが、日本は中国以上に社会主義的な国であり、また、中国はアメリカより格差社会になりつつあることを感じたことから、政策及び経済の魅力を感じ、私は改めて、日中両国の架け橋になるような仕事に就きたいと決め、関西学院大学受験に踏み切った。

グローバル化が進む中で、ネットを通じ、世界の交流が日ごとに活発化している。観光を始め、多くの人や資本など、国境を越え、世界中に進出している。その結果、世界的な規模を持つメガカンパニーや大企業による経営統合(M&A)が必要な流れであると考えられる。去年からのシャープの買収劇や今年に入って、TOSHIBAの経営破綻問題など、これらは全て米中が仕掛けたことだと考えられ、経済戦争によるほんの一部に過ぎない現象だと思う。日本の同盟国であるアメリカ vs 膨大な市場と人口を持つ中国との新しい冷戦時代に突入したこの21世紀では、日本はどうすれば自分を守り切れるだろうと考え始めた。

中国の東北地方で生まれ育ち、長い間家族と日本に在住していることが、私の unique 性である。日中両国の文化を熟知し、自由資本主義の原理を理解している私はコミュニケーション力の一つである両方の言語を自由に使えることで、これから始まる経済戦争に備え、資本主義を守ることが私

のすべきことであると確信した。それは私が日中両国を舞台に活躍できる公認会計士になりたい理由である。

関西の名門私大である関西学院大学に入学することはずっと私の夢だった。本来、公認会計士を目指す人の殆どは商学部や経済学部に進学する。しかし、グローバル化が進んでいる現代社会では、国家や地域という境目が段々となくなり、今までにない、地球規模の複数からなるボーダレス社会が出来上がってきた。誰も経験したことがないこの現代社会では、昔の経験で将来を予測することが極めて困難になった。去年の11月に、アメリカのトランプ氏が大統領に当選したことを始め、北朝鮮による核、ミサイル問題、ヨーロッパのイギリス離脱、ISによるテロ事件など、戦争が再びやってくるのではないかと不安を感じる人が多いはずで、それがきっかけで、世界の株価市場が変動し、リーマンショックからまだ完全に回復してない程、経済に大きく影響を与えた。企業側が将来不透明なアメリカ社会に懸念を持ったことがその理由であると私が推測する。また、20世紀に入ってから、世界各国でも少子高齢化問題が顕在化し、それによって経済成長にどのような影響を与えるのかについて、私は関心を持っている。中国からきた留学生という立場から、今後の30年間、中国の経済にとって、最大な猛敵は、アメリカではなく、中国自身が作った一人っ子政策のミスで自分で自分のケツを拭く事に最近気づいた。それに従って、私は、これからの時代では、世界の経済や金融市場に影響を大きく及ぼすのは、他ならぬ、政府による政策と時事による大衆心理だと気付いた。それを正確に予測できることこそ、この波乱万丈な混乱に満ちた21世紀に求められるスキルだと考える。そういう理由で、あえて私は総合政策学部に進学した。

公認会計士は上場企業の監査をはじめ、コンサルティングなど様々な分野で活躍できることで、私にとって非常に魅力を感じる職業だ。しかし、合格率5%にも満たない日本三大難関資格の一つとも言われていることから、長期戦を覚悟し、三年の後半から始まる就職活動を全て投げ出す覚悟をしている。今年の12月から公認会計士試験の勉強をはじめ、4年目春の合格を目指している。私は将来、国際を舞台に活躍のできる公認会計士を目指しているので、国際政策学科に進学することを決めた。米中と違って、自然資源のない、加工貿易をメインとする日本にとって、保護貿易ではなく、上手く調整されたグローバル的な自由貿易政策こそ、21世紀の新しい冷戦を始めた米中両国からの生き残る道であると考えたからだ。9月中国の共産党大会が終え、より安定した習政権にとって、国内総生産GDPを如何に高成長に維持できることが、今後中国にとって、内部紛争を避ける最も有効な手段である。統治者にとって、まさに死活問題である。そのため、中国国内にある市場が新たな形に生まれ変わる必要性が迫られ、世界の工場から世界の市場に変換しなければいけないと私は考えている。地理的に近い、文化的にも共通性がある日本にとって、千年に一度のチャンスが巡ってくる。今後日中両国において、貿易と文化交流が今よりさらに活発していくと予想している。私は大学にいる4年の間に、必要な知識、コミュニケーション力などを身に付け、悔いのない4年間を送りたいと思っている。ここで作った友達こそが、将来自分の大切な仲間であり、一生の宝物だと私は強く信じている。

夏休み期間に読みたい本 候補

「米中二大帝国の戦争はもう始まっている」 作者:B・F 出版:かや書房 2017年

「地政学から読み解く米中露の戦略」 作者:佐藤優 出版:別冊宝島 2017年

「少子高齢化とアジア地域統合時代の経済政策」 作者:蛭名保彦 出版:明石書店 2007年

私は中国からきた留学生であるという特別な立場から、現在、中国国内で抱える様々な問題に興味を持っている。ソ連の崩壊を教訓に、中国が市場メカニズムの導入を土台とする改革開放策を取ることで、経済の高度成長につながった。しかし、その裏側では、貧富の格差や、環境問題、官僚による腐敗問題、少数民族による独立運動問題、少子高齢者福祉問題など、体制内では到底解決できない事が数多く残っている。特に一人っ子政策による超少子高齢化問題において、非常に興味を持っている。夏休み期間に少子高齢化に関する本を読んだ。

中国で有名な政策の一つに一人っ子政策がある。1979年からこの政策を実施して以来、今年までおよそ38年が経った。(政策自体が廃止になったが、影響はいまだに続いているので、38年間の計算)これにより中国国内の出生率が著しく低下し、人口ピラミッドは急激に底まで減った。他の国と比べ、年齢別の人口が想像付かないほどアンバランスになった。(下から細長い漏斗形)その影響で、遠くない将来の中国に取り戻すことが出来ないほど悪影響が必ず起こると専門家は予測する。(＜少子高齢化・アジア地域統合時代＞第2部第3章東アジア地域統合と地域活性化により)

また、中国では、儒教思想の影響で、男尊女卑の傾向が強く、男児の数が女児より平均37%も多くなっているため、これが将来大きな影響を及ぼすのではないかとされている。

さらに、国民の少子化問題のみならず、高齢化も進んでいる。現在、人口基数の多い中国は世界で高齢者が最も多い国であり、しかも、高齢化の進展が最も早い国になりつつである。高齢化が進行するにつれ、労働人口の低下も懸念される。医療の発達と所得の上昇で平均寿命が延び、高齢者の年金受給期間も増えた。年金の支出は政府にとって、財政的に大きな負担となる。少子化が進んでいく中で、その負担はさらに大きくなると予想する。(＜少子高齢化・アジア地域統合時代＞第1部第1章少子高齢化と社会保障により)

もう一つ懸念される問題は、若い人口が減ることにより、労働力の不足である。2025年以後、中国の労働力市場の需要と供給のバランスが崩れ、労働力の不足による解雇危機が生まれると作者はそう言っている。それと同時に若い世代の人口が激減することで不動産をはじめとする消費資金のサイクルが崩壊され、経済バブルがはじける誘因を作る恐れがあると考えられる。(＜少子高齢化・アジア地域統合時代＞第1部第2章少子高齢

化と経済成長により)

中国の高齢化の特徴として、他の先進諸国のような自然発生的なものではなく、政府の政策で直接影響を与えることで、生じた社会現象問題であると文献を調べて私は感じた。今後の数十年間、これを解決しない限り、中国の経済がいずれ破綻すると予想する。

日本語クラス3授業に関する感想

総合政策学部1年 孫政勝

2017年の4月から、憧れの関西学院大学に来ました。三田キャンパスは思ったより、少し田舎寄りのイメージが有ったので、どこに行っても、なんとか新鮮感がありました。日本語3のクラス教室に入った時の様子を、まるで昨日の出来事のように今も鮮明に覚えています。私は受験浪人をした期間が長かったので、周辺の同級生と上手く付き合っていけるかなと、最初からすごく不安でした。でも、クラスメイトはみんなノリが良く、先生もとても優しくかったので、入学してすぐ大学生活に馴染めました。

この一年間を振り返ってみると、楽しいことがいっぱいありました。最初の頃は、クラスメイトと話すことを恐れていましたが、この授業では、発表が多い故に、グループワークがどうしても必要になってきます。自分も気づかないうちに、みんなと仲良しになりました。このクラスで、日本語に関する勉強だけでなく、日本の社会と文化等、色々を先生から教えて頂きました。このクラスは一年間しかないのですが、私の人生において、最高に素晴らしい、充実した大切な一年間でした。

知識人になるために

ハンゴンホ

私は高校3年生から日本語勉強をはじめ、卒業後、もう一年勉強して関西学院大学に入学した。浪人してまで、日本への留学を決心するきっかけになったのは母の知人である。彼は先生で日本の留学生だった。当時何の考えもなく勉強ばかりする私に留学した時の話をしてくれた。その時は日本と韓国の間で色んな問題があって多くの人が彼の留学を反対したが、日本という国に直接触れ、韓国との関係を改善してみたいという自分のやりたいことのために自分で留学を決めたそうだ。そして、そこであった大切な出会いと学んだ知識を持って、韓国の学生たちを教えることを見て、私もそのような知識人になりたいと思ったのである。それで普段から関心があった日本に留学を決心した。この4年間有意義的な大学生活をおくり、人々との出会いを大切にしながら、様々な知識を身につけたい。

まず、4年間の大学生活をつうじて、将来についてもう一度考えたい。私は高校生の頃、母が働いていたボランティア団体で自然の大切さを広げるために様々なボランティア活動をしたことで、環境に興味を持つようになった。それで、日本が韓国より環境政策に優れている点やエコタウンに注目したのである。関西学院大学の総合政策学部では自然と人間の共生を中心に環境政策について勉強することができる点で関西学院大学への入学を決心した。しかし、最近、高校生の時の友達があるインターネットコミュニティで間違った情報を流したことで、信頼を失い、炎上するなど、苦労していることを見てネット社会に興味を持つようになった。友達以外にもサイバー社会で悪質なコメントや炎上することによって被害を受けている人が多く、ひどければ、自殺するひとがいるほど、サイバー社会の問題深刻とも言える。現代社会では情報化社会と言って、誰でも情報を収集し、自分の意見を発信することができるようになった。一方、不適切な情報の共有することや悪質なコメントを使うなどのインターネットマナーが深刻な問題になっている。その中で私は情報の流れを把握しながら、ネット上の秩序を守るなど、サイバー社会をもっと暖かい場所に作るための知識を身につけたいと思っている。そのために、2年生ではメディアの勉強をして、サイバー社会について知り、メディアを利用して、情報化社会の問題解決に力を入れたい。関西学院大学のメディア情報学科では「人にやさしい豊かな社会を築く情報通信技術のあり方を考察」といって人にやさしい豊かな社会を築くための情報通信技術の活用法と、それによる政策提案とマネジメントについて研究。人間を中心に据えた情報技術や社会のあり方を、情報技術を通じて展開しうる人材を育成するためのカリキュラムを設けている。という点でサイバー社会の問題

点を知り、悪質なコメントや炎上がない人にやさしい豊かな社会を作ることができるのではないかと思った。しかし、こう見ると私が将来に「何をしたいか?」、「何を考えているか?」自分の将来についてはっきりではないが、この4年間しっかりとした大学生活をつうじて、「私が本当にやりたいことは何か?」など、将来についてもう一度考えるつもりである。

二つ目は、日本語をうまく喋れるようになることだ。私が日本で一番感じたことは私が「外国人」であることだった。何か困ったことがある時、日本人に話をかけると、私が外国人であることを知って、英語で答えてくれることや非常に気を使ってくれることがあった。そのたびに、気持ちはありがたいだが、自分の日本語に自信感を失うことがあり、少し、恥ずかしくなることもあったのである。それで、大学生活で様々な人との出会いやコミュニケーションを機会に日本語をうまく喋れるようになって、日本人と無理なく、普通に話せるようになりたい。

三つ目は、日本語以外にも英語や中国語など様々な言語を身につけることだ。多様な言語を学ぶことは「将来に役に立つ」ということもあるけれど、なにより私が他の国の言語を学ぶことを好きになったからである。私は高校1年生の頃は外国語の勉強に多くストレスを受けるなど、あまり外国語が好きではなかった。しかし、日本語勉強をはじめたことをきっかけに外国語の魅力を知り、もっと様々な言語を身につけたいと思うようになった。日本語を学んだことで他の国の人と話せることがどんなに楽しいことかを知ったのである。しかし、まだ日本語の実力が足りないので、1年生には日本語勉強をして、2年生からECの授業をつうじて、考え方や価値観を共有できる実質的なコミュニケーション能力を磨きたい。また、中国人の友達とのコミュニケーションや中国語の授業をつうじて、大学卒業までは韓国語、日本語、中国語、英語の4つの言語を話せるようになりたい。

最後には日本で新しく作った友達と一緒に様々なところに旅行してみたい。私の趣味はパソコンゲームや音楽鑑賞など家で楽しむことばかりだが、私が知らなかった事実や文化を知ることができ、友達や家族と特別な思い出を作ることができる旅行も私の趣味の一つである。旅行の魅力は「新しさ」である。人は地域、国によって文化や生活が違う。そのようなことを直接感じるができるものが旅行だ。私は人々との出会い、地域の特色を持った建物などを見て楽しむことが好きである。だから、後で、日本の有名な観光地はできるだけ多く行ってみたい。特に、京都、北海道、沖縄には私が大学生の間にぜひ行ってみたい。また、私は昔から海外旅行に行く機会がなかったのでお金や時間的に余裕ができたなら、中国、スペイン、ドイツにも行ってみたい。

ところで、私は夏休みに3つの本を選んだがその中で1つの本を紹介しようと思っている。

その本は「知識人とは何か」という本である。この本は大学のお勧めの「総合政策学部の100冊推薦文集」の1つで、知識を身につけることだけではなく、この学んだ知識をどう使うかについて書いた本である。私がこの「知識人とは何か」という本を選んだ理由は単純な好奇心だと思う。現代の社会では才能、能力、財力など、様々なものが重要にされているが、一番多く求められているのは「知識」ではないかと私は思っている。「その知識をどう使うべきか?」、「真の知識人になるためにはどうすべきか?」など著者の考えが気になってこの本を選んだのである。

この本は エドワード・W. サイドが1993年に行われたBBCリース講演全6回を収録したもので、知識人をめぐる歴史、社会、世界などを論じているものである。この本の内容は、「知識人」とは「専門的知識を重装備したエキスパートではなく、アマチュアである。ひとつの分野に呪縛されて、ひたすら何かに奉仕する専門家ではなく、各分野を自在に横断できるアマチュア」。ここで言うアマチュアとは「社会の中で試行し憂慮する人間」のことである。この知識人の役割とは、「世界人権宣言に記されている行動規準と規範を適用すること」だと述べるなどサイドのシンプルな主張がコンパクトにまとめられている本である。そしてこの本を読んで特に印象に残った文章があった。「読者もこの本を読んでいる以上、「知識人」となるか本物の知識人となるかを選択することになる。」という文章だった。例えば、高い位置にある政治家としてもお金と権力のとりこになった人を私たちは「知識人」と呼ぶべきか? サイドが述べている「知識人」のモデルは「常に権威に懐疑的・批判的」、「アマチュアであり周辺的存在」、「いついかなるときも、真実の表象に最善をつくす」。「あちら側」と「こちら側」の境界線を引かず、あらゆる知的領域を自由自在に駆け巡る論争家で、とてもシンプルである。しかし、ここでサイドが語る「知識人」のモデルは今、現代思い出す人があまりいない。本ではサイドが例としてチョムスキーの名前を挙げている。チョムスキーという人物を簡単に説明すると彼は言語学者で、言語学だけでもいい人生を送ることができるはずにもかかわらず、戦争に反対する運動に飛び込んだ世界最高の知識人とも呼ばれている。彼の言葉は「むやみに信じるのではなく、直接確認すること」。直接確認してみ、自分が考えること。何が嘘で何が真実か明らかにする、したい思いを持つこと。このような文章を見て知識人とはこんな人だなと改めて分かった気がした。

以上、私も大学でしたいこととして色々なものを書いた。ネット上の秩序を守るために知識を身につけたいとか、様々な言語を勉強して他の国の人々とも違う言語でコミュニケーションしたいなど、多くあった。しかし、私が様々な言語を知っていて、情報化社会、メディアに対する知識が豊富になってもそれだけで知識人になるのではない。このような知識を持って「あちら側」と「こちら側」の境界線を引かず、人々のために、世界のために貢献し、自分

が信じる道を歩いて行くことこそ「本物の知識人」ではないかと思っている。私も今後、このような知識人なるために努力したい。

最後にこの1年日本語教室であった色々なことや経験を大切にしたい。授業最初にはただ留学生が集まって、基本的な日本語学びたり、話したりするだけだと思ったが、そこには大切な出会いと意味があると思っている。まず、日本人以外にも多様な国の友達に出会い、様々な価値観を分かった。今まで絶対理解できないと思った国について理解し、それを共用したりなど、自分の価値観が広がることを実感することができた。また、外国人にも優しい日本語授業をつうじて、基本的な日本語、コミュニケーション能力、記述など、色々勉強になったと思う。今後、1年生が終わり、2年生になって、新しい日本語授業に入ると1年生にはできなかったことや粗末にしたことをもっと頑張りたいと思っている。また、新しい出会いにも期待している。

参考文献

1. エドワード・W. サイード、1998、「知識人とは何か」、平凡社出版

プープーマウン

この4年間でなりたい自分になれるのか

概要

- ❖ 関西学院大学に進学した理由
- ❖ 本の紹介
 - ① 選んだ理由
- ❖ 大学でやりたいこと
 - ① ボランティア活動
 - ② 日本語能力
 - ③ コミュニケーション能力
- ❖ 結論
- ❖ 授業の感想

● はじめに、関西学院大学に進学した理由

私は、高校に入った頃から留学に興味を持っていた。それで子供頃から親しんできた日本を留学先として決めた。なぜ日本だったのかと言えば、特に日本の教育システムに憧れてきたからである。ミャンマーはまだ途上国であり、教育レベルも低いからこれから、レベルの高い日本の教育システムをもっと知りたかった。それで、2015年の10月にミャンマーから来日し、大阪日本語教育センターで日本語を1年半ぐらい勉強した。留学先を日本にしたからこそ関西学院大学で勉強することが出来、本当に良かったと思う。なぜ関西学院大学に入ろうと思ったかと言えば、総合政策学部の国際政策学科で勉強しながら、将来の進路を考えたいからである。将来、国連職員か大使のように国際的機関とかかわる就職がしたい私にとって、グローバル的な知識を持つとは大切だ。関学大には総合政策学部の国際政策学科がありまた、関西学院大学というのは他の大学より外国人の教師も多い上に、国連で働いている先生方もいらっしゃる。だからこそ自分の将来を実現するため、関学大の国際政策学科が多く援助してくれると信じている。もちろん大学での勉強だけではなく、経験のある先生たちと出会い、いろいろな知識を得たいので関学大に入学した。

● 本の紹介

この夏休みに私はある本を選んで読んでみた。それは太田英基さんが書いた「日本がヤバいではなく世界がオモシロイから僕らは動く」という本である。この本を読んで、私は（思考の枠を日本から世界へ広げれば、もっと心がぞくぞく震えるような人生を送れるのではないかと心を空き動かされた。簡単に要約すれば、一章のところには（日本は今、「モノ」ではなく、「ヒト」で負けている）と始めながら日本の現状が書かれている。日本はアジアの中に経済発展国だし、技術も進んでいる国である。しかし、世界へ出て就職をしている数はわずかに少ない。二章には、実際に世界へ飛び出した先駆者の経験談のこと。

そして、三章、自分がもう世界へ出ると決まったら、まずどこの国の何処の州に行くかを調べて情報を得ること、実際に行ってみたら、何とかなると考えずに行く前から余裕をもって準備をすることが書かれている。四章には英語の必要性が書かれている。海外と取引する仕事では、英語は必要になる。世界へ出て様々な国籍を持っている人々とコミュニケーションをとる時、みんな英語を使用している、などが書かれている。また、最後には世界へ出るということは「日本を捨てる」「日本はヤバい」ではなく、「世界がオモシロイ」から僕らは動くと、題名への思いを述べている。（世界的人口はやく70億人であり、日本の役400倍だから、どこでもいつでもたくさんの人と出会える時代になっている。そんな時代に生まれた我々は本当に運がいいから、自分に与えられたチャンスを使ってみてください）[太田 英基, 2013]と英基さんが提案している。

私にとって本章の中から一番印象に残ったのは、四章の英語について書かれたところの方式である。それは、(must+want=best) という方程式である。自分なりに訳すると「やる必要があることを自分からも欲してやれば、成功するのだ」と理解した。現代、学生たちは親の命令に従って留学をするとか、海外へ出たら自分を成長してくれるとか それぞれの考えをもって世界へ出るのがやるべき事であると考えられている社会である。もちろん、世界へ出たら、たくさんの人々と出会うから自分を成長させる。しかし、これを自ら欲してやらないと無駄なことである。この世の中に海外に行っているけど、ほかの国の人とコミュニケーションをとらずどんな出来事にも参加していない人々も少なくはない。だから、英基さん(must+want=best)と述べているかも知れない。

● 選んだ理由

また、印象に残ったもう一つの部分もある。それはこの本を選んだ理由でもある。

- 「今、あなたがしていることは、なりたい自分になるために本当に必要なことか？」
- 「今、自分がいる場所は、本当になりたい自分になるために最適な場所なのか？」
- 「そもそも、なりたい自分は見つかっているか？見つかっていないなら、なりたい自分を探し続けているか？」という 3 つの問いである。

これからこの 3 つの問いから一つのキーワードを出して大学でやりたい事と繋げた。それは、「なりたい自分」というキーワードである。

● 大学でやりたいこと

現在、自分の第一志望の大学に入学したし、学びたかった総合政策学部で勉強している。それゆえ、私は今、「なりたい自分」になるため、何ができるのか？また、何をすべきであるか？に基づいて書いていきたい。

① ボランティア活動

「なりたい自分」になるために、今私がいる場所で、何が出来るのかと、言えば、やっぱりボランティア活動だ。国際的機関と関わる就職をしたいと言ったのにどうしてボランティアという単語が出来たのかと思うかもしれないけど、私にとってはとても大事だと思う。国際的機関に働きたいと考えたら、まず、いろいろな生活を持っている人々と関わっていかないとけない。また、様々な人物と交流できる力、相手の気持ちを理解できる力も必要。大学時代にそんなことができたなら、なりたい自分になれる道が早く開くのではないか。多くの本にいつも出てくる話がある。それは、「学生時代にやってみてほしいことは“ボランティア”だ」という話である。

関西学院大学の総合政策学部では世界と学生たちを繋げる海外ボランティア団体がたくさんある。その中から私は「J-Fun ユース K.G」という学生団体に入った。その団体は特に難民たちを支援している学生団体である。たくさんの人々と関わりたいなら、どんな団体に入ってもいい。しかし、様々な人の気持ちを理解できる力を持ちたいなら、やっぱりこのサークルだと思う。なぜなら、難民とは紛争や人権侵害などいろんな理由から住み慣れた故郷を追われ、逃れざるを得ない人々のことある。そんな人々の心が理解できれば、どんな方々の心でも理解できるようになれると私は信じている。だから、「J-Fun ユース K.G」は難民たちのため、自分たちが出来るだけ支援して、彼らの心を理解していこうという団体だ。我々はこの世界で一番大きい国はどこか、経済の発展が一番速い国はどこか。そういう良い国のことだけに注目しているが、この団体に入ってからこの世界で最も難民が多くて貧しいんでいる国々のことも知るようになり、また、実際に難民たちと出会う機会もあった。今はまだ一回性だから活動にあまり参加したことないけれど、これから、いろんな国からの難民たちと出会っていききたい。そのボランティア活動から得たたくさんの知識、経験は「なりたい自分」になる力になると思う。

② 日本語能力

これまでの“ボランティア”とは「なりたい自分」になるため、この大学生4年間で出来ることだった。では、「なりたい自分」になるため、今、自分は何をするべきであるだろうか。それは、日本語能力を高める事とコミュニケーション能力を深める事である。まず、日本語能力を高めるのはなぜやるべきのことであるかは言うまでもないと思う。母国ではない他国に留学している私たちに対しては、その国の言語はととても大事だ。どんなに英語ができれば、良いのだと言っても「郷に入っては郷に従え」と言うことわざもあるのを忘れてはいけない。だから、私は今まで持っている日本語力はたった一年八ヶ月だけの程度なので、まだ足りない。また、漢字を使う国から来たわけではないから、漢字も苦手だし、まだ知らない単語、文法とかも数え切れないくらいある。これから、もっと日本人たちと会話ができ、新聞とか日本語で書かれた本とかをすらすら読めるようにならなければならない。もちろん言語を学ぶというのも大変なことだけど、自分が相手に伝えたいことをはっきり言えない時、相手が言ってくれたことをちゃんと理解できない時は困る。特に、サークルの活動をしに行く時も、日本語を使って会話をするから、日本語力は大事だ。もちろん、スピーキング力だけではなく、これから、三回生になると、ゼミに入って卒業論文に取り込まないとならないから、読解能力とライティング力も必要。それに、国際的機関にかかわる就職をしたい私にとっては日本語、英語両方が良く使えれば、最も「なりたい自分」になれる力にもなるのだ。

③ コミュニケーション能力

最後にはコミュニケーション能力を深める力ということ。今まで出会った仲間たちを大切にしていきたい。仲間というのは人生の中にいなければならない存在である。これからも、コミュニケーション能力を高めながら、たくさんの人と出会い、一人一人を大事にしていくべきだ。

ある時、友人からから手伝ってもらわないといけない事もあるはずだ。だから、お互いに協力し、助け合って共に動けばみんながやりたいこと、なりたいことが実現してくるだろう。そして、この大学生時代に会う仲間との関係さえ深めることが出来ないなら、世界へ出ることが出来ないとは私は信じている。

● 結論

この大学四年間で将来「なりたい自分」になるため、自分は ①今、何ができるか、②今、何をすべきか。と二つの点を挙げて述べた。①のところには“ボランティア”をメインとして書いた。ボランティアからたくさんの人々と出会い、様々な人々の気持ちを理解し、それが「なりたい自分」になるための力になるという話である。②のところには、日本語能力とコミュニケーション能力と二つに分けた。日本語能力を高める事はもちろん日本で留学しているから、三つの言語がぺらぺら喋れるようになりたいから。2つ目のコミュニケーション能力を高めるという事は、仲間というのは人生の中でとても大事だから、大切にしていこうという話だった。

参考文献

太田 英基. 2013. 日本はヤバイではなく、世界がオモシロイから僕らは動く. 2013.

https://l.facebook.com/l.php?u=https%3A%2F%2Fwww.refugee.or.jp%2Frefugee%2F&h=ATOWWWA6VDHQ6ugyWWBqHJ7ibRA_89Kiq2Cp9MpNf29i9diOUW4dlcTzbP1dRsfNBfnFuLEhATBSyTIH5F_gSPe8T0SIXYFuF5imGdPChsS6po8e3Q34blnFgDRoQT_GCiQtiuesXdHGYg

https://l.facebook.com/l.php?u=http%3A%2F%2Fblog.gururimichi.com%2Fentry%2F2013%2F05%2F25%2F234658%3Famp%3D1&h=ATOWWWA6VDHQ6ugyWWBqHJ7ibRA_89Kiq2Cp9MpNf29i9diOUW4dlcTzbP1dRsfNBfnFuLEhATBSyTIH5F_gSPe8T0SIXYFuF5imGdPChsS6po8e3Q34blnFgDRoQT_GCiQtiuesXdHGYg

● 授業の感想

この1年間お世話になりました。まず、良かった点は一つのテーマについてずっと考えてレポート書くという事。普段は違うテーマならいくつかも書けるけれど、同じテーマだけを繰り返し考えながら書くのはなかなか進まなかった。しかし、もっと書けるためたくさんのお話を思い出したり、小さいことまで考えようになった。Writing力も高まったと思う。考え出す力も強くなったと感じた。

そして、この一年間楽しかった。このメンバー、この先生で良かった。

大学時代の異文化コミュニケーション

日付 12/10

名前 マンセイケツ

構成

1. 違う日本文化の体験
2. 異文化コミュニケーション
3. 本の紹介と感想
4. 結論
5. 授業感想

本文

1. 私は大学でやりたいことは、日本のすべての県を旅行することである。こうしたい理由は、日本この国は地域によって、様々な文化また方言があるから。自分は日本の中にある違う日本文化を体験したいと思っている。

このきっかけは、自分は東京から関西に来て、まったく違う世界だと感じたことである。違う世界は具体的に言うと、例えば、東京の人雰囲気から感じたのは静かで、あまり話さないことである。又、みんなは自分の世界と他人の世界をちゃんと分けていることである。更に冷たいという感じがあった。一方、関西の人は明るい、熱い感じがある。まるで正反対だと感じし、関西と東京は全然違うと思った。外国人の目から見ると同じ和民族の日本人にしても、日本語を使っても、まったく別人間の気がした。ここから考え出して、関西関東だけではなく、日本国内の違う文化まだたくさんあるではないかと思った。だから、他の日本国内の異文化はどうなっているかを理解したいと考えた。理解する目的は、違う文化は簡単に言うと地域によって、人間また事の差である。この差はどうして存在していたか今後の課題として研究したいと思う。

そして、そうしなければならない理由は、日本の生活はただ学校生活にたくないです(勉強、レポート)。つまり、大学生活と留学生活を一緒にすることである。室内の勉強ではなくて、外(日本の社会)で勉強するのは留学生にとって大切だと思う。今日本で留学しているので、日本の文化からはじまり、旅行して、地域の文化を体験して、他の人はあまり得られない知識また経験を身につけたいと思っている。

旅行することのメリット二つがあると考えた。一つ目は、例えば、メディアとかで得た情報は実際に現場で確認できることと地域の中で自分が聞いたことだと違っていたことが見つけられることである。世の中には間違っている文化の理解がたくさんあるから、これを実際に自分の目で確認したい。つまり、本当の文化を見て、理解したいことである。どうして本当の文化を知りたいかという、理解し間違っている文化を理解するのは、文化の本当の価値が得られないと思う。更に、文化をきちんと理解しないと、文化の不尊重になる。

二つ目のメリットは、地域はどんな問題が起きているか、現場研究するのは一番速いことである。例えば、活性化する必要がある地域、今また深刻な問題になっているかどうか、どのくらい解決したか、今地域の住民たち何を求めているか。現状と事実を知るために、現場に行くのは凄く大切だと思う。現場研究のために、現在の学年でそういう実験する課外授業を取っていて、実際に体験して行きたいと決めた。

自分は2年になったら都市政策学科に行くつもりだから、特に地域と都市デザインを中心として研究したいと思って、実際に色々な場所に行かないと、都市に対する認識はこのまま薄いし、将来の勉強のためにも役に立たないと思った。それと、自分は旅行が好きで、たくさん旅行すれば、人生の経験も豊かになるのではないかと考えているから。旅行は勉強になれるし、自分のこととしても楽しめる。

2. もう一つやりたいことは、違う国の人と友達になろうことである。つまり、異文化コミュニケーションをすることである。(最初から書いた「違う日本を体験したい」こともこの中に含めている)。

自分は日本の文化を体験したいだけでなく、できればたくさんの世界文化を体験したいと考えた。今日本に留学しているところだから、世界の文化をちゃんと体験できるように日本国内で外国人の友達を作る

ことしかできないと思う。もちろん、大学内の留学生同士だけではなくて、色々な場で友達を作って行きたいと思う。(外国人交流会、地域から外国人向けのイベント、他の大学の留学生、外国人がよく集まっている場所)。こうやりたいきっかけは、昔の日本語学校で、たくさんの国から来た外国人がいて、そういう仲間たちと交流して、世の中の面白い情報を聞いて、世界は本当に広いと感じた。たとえば、各国の人と交流する前に、新聞やネットから得た情報だけで各国のイメージを作ったが、実際に交流することによって、各国にはまだそんな自分が知らないことがあるか、自分は昔から得た情報とたくさん違ったことがあることなど、世界にある各国に対して新しいイメージ(文化、情報)が出来た。また、時代は変化しているから、文化と情報とか変わることはある。

しかし、世の中にはまだ更新されていない場合が多いし、まだ何十年前のイメージを持っているのは普通だと思う。だから、新しく正確な情報と文化を得るためにコミュニケーションが重要だと考えた。

もう一つきっかけは、自分から例を出す。聞いた情報と実際の情報は大分間違いがあることである。自分は香港出身で、たくさんの人は香港人なら普通に英語が上手いと思っているかもしれないが、実際は1997年にイギリスから返還したことによって、現在の香港人は凄く英語レベルが下がった。しかし、留学しているところで何人に「香港人なら英語はペラペラ」だと聞かれたことがある。また、香港で使われている第一言語、公用語は中国語だと思っている方もたくさんいた(実際の公用語は広東語と英語だ)。このような誤解は香港だけではなくて、世の中全体はそうなっていると感じた。

だから、自分は正確な文化、もしくは理解し間違っていない文化を理解したいと思った。それと、自分は世の中の情報たくさん知っている人間になりたいと思っていて、そのような情報は新聞やネットとかのメディアで得られない情報だから、実際にコミュニケーションを作らなければならない。

そのために、いろいろな国から来た外国人の友達が必要だと思う。また、自分は将来もう一回留学したいと思っているから、日本でたくさんの国から来た人と友達になるのはメリットだと思う。具体的に何のメリットかという、その国行く前に紐帯ができることである。だから、将来どこの国に行くにしても、その国の情報も知っておいた状態で行くことができると思う。たくさん違う国の人と友達になって、異文化をたくさん理解するのは、この4年間の大学生活のもう1つの大きな目標である。

3. 今回選んで読んだ本は[大学生のための異文化 国際理解 差異と多様性への誘い]である。この本は最初の1部に異文化 国際理解とフィールドワークについて紹介した。自分は持っている文化と他文化の間でフリーに往復することである。つまり、他の文化を理解するために自分から脱出する必要がある、そして、再び自文化に戻って考えることである。2部は歴史について、特に江戸時代に貿易が始まった日本における、異文化の受容状況などを紹介した。3部は、異文化の人と異国が、同胞の人との向かい合うこと。また、異文化との共生方法について述べた。4部は、国境を越えた民族の話である。国籍は違うけど、持っている文化と使う言葉は同じことである。つまり、同じ国籍ではないが、同じ民族であること。

この本は4部分があるけど、一部の異文化とフィールド、4部の民族の話を中心にした。[自文化と異文化の往還]この話が凄く印象が残った。異文化コミュニケーションをする時、一番難しいのは、普段から使っている考え方や話し方は異文化の相手が理解できるかどうかと思う。更に誤解が起こるのはよくある。例えば、日本人とコミュニケーションをしたら、日本人は常に遠慮していることを考えなければならないこと。日本人に対しては、[日本的な形]で話さないと失礼だ。そういう思いを準備して置いた方がいいと思う。そして、自文化の立場に戻って、二つの文化を比べたら、もっと相手の気持ちを理解できるようになる。この本を読んで、フリーにたくさんの文化に往還できるのはグローバル力だと思った。

4部の民族の話について、私は前文の大学でやりたいことの中に、「外国人とコミュニケーションによって、本当の文化と情報を理解したい」と書いた。一つの民族は必ず一つの文化があるはずが、一つの民族は一つの国に限っていないと思う。だから、文化の研究は国の違いより、民族の文化から始めたいと思った。互いから相手は外国人けど、持っている文化と使っている言葉が同じである。例えば、チャイニーズだと言ったら、「中国」というイメージが出るが、しかし、チャイニーズは一つの文化であり、中国以外にもたくさんの国また地域に生活している。(タイ、マレーシア、シンガポール、台湾、香港、マカオ)。民族と国の関係は誤解しやすいから、国と国の文化から区別するより、様々な民族は持っている文化を区別する方からやりたいと思った。

4. 正確な文化を理解した上で、たくさんの文化を持つ人間になりたいと思っている。その文化はただ違う国と違う民族に限らず、同じ民族にある違うことも理解したい。だから、文化を持つために、まずは文化を理解することである。そして、理解として一番重要なことは異文化を尊重し、相手の立場で問題点を考えなければならないと思う。最後、手段は実際に色々な文化を持っている人とコミュニケーションを作ることである。たくさんのお会いによって、たくさんの文化を知ることができるのではないかと考えている。また、正確な文化を理解する方法としても、コミュニケーションを作る方法は一番簡単で、効率的だと思う。(メディアとかの情報は情報が多いため、探すのは時間かかる。また、正確かどうか判断できない)。

だから、人との出会いから、大学での異文化コミュニケーションを進めたいと思う。

5. 八月にかけてレポートを完成した。最初のレポートと比べたら、増えたのはただ文字数だけではないと思う。日本語の書く能力とやりたいことについている考えは結構深くなった。それと、大学でやりたいことをしっかり考えたから、実際にやっていきたいと思う。

参考文献

2 大学生のための異文化・国際理解：差異と多様性への誘い
高城玲編著。― 丸善出版, 2017. 1. <BW03901402>

ワンパターンではない人生の「正しい」決め方

ムンセファン

私は以前、韓国で大学に通っていたが、二回生のとき日本の大学に入るために中退し、日本に留学をすることを決めた。2015年10月から日本に来て大阪の日本語学校に通って今年、自分が将来やりたい夢を叶えるため、英語のレベルが高いことで有名な国際学科があり、また他学部の授業をとることができる情報を耳にして自分の学科の授業だけではなく他のキャンパスの授業も受けることができるこの大学に入学した。

この学校でやりたいことは交換学生として英語圏の国へ行くことだ。なぜなら、私の夢は世界を舞台とする韓国語の先生になりたいからである。その夢を叶えるためには世界の人々とかかわることができるコミュニケーション力が必要だと思っている。そのためには基本的に世界で一番通用している英語を取得するのが優先だと思った。そして私は教員という仕事は言語能力だけではなく様々な能力と知識が必要だと思い、英語だけではなくたくさんの方のことを相互的に学べるこの学校を選んだ。

その夢を持ったきっかけは、韓国にいるとき通っていた塾で出会った日本人の先生だった。その先生と親しくなり、この先生が歩んできた様々な国での人たちとの出会い、その国々の独特な文化の体験、海外で先生自身の母国語を学ぶために熱心に授業を聞いていた学生たちの様子などの先生の様々な話を聞いて、先生の今までの人生は本当に楽しいことが多かったと思い、この先生のように人生を過ごしたいなと思った。私が聞いた話では、この先生は今まで色々な国々を回って自分の母国語を世界の人たちに教えてきたのだ。このような方法でも世界を舞台として活躍することができるのだと思い、この先生のようになりたいと決めて、それを叶えるためには世界の人に通じる英語力を取得したいと思い、交換留学を大学の第一目標に決めた。

もちろん将来世界を舞台にするために、英語が必要だと思うなら、この日本で4年間集中して英語の勉強をすればいいのではないかと疑問を持つ人もいるかもしれないが、私が日本に来て一番驚いたことは私の日本語が日本では通じず、日本人が言っていることも聞き取れなかったことだ。私は韓国で自分なりに日本語を頑張って勉強し、塾の日本人の先生ともすらすら会話ができ日本に行っても問題なく話せると思ったが、現実はそうではなかった。教科書に出る文法は会話と全然同じではなかったし、辞書にも載ってない若者言葉や方言にショックを受けた。そのとき私はやはり言語は本に書かれているものが全てではないことに気づいた。だから英語を使っている国に行き、本当に通じる英語を学びたいと思い、英語圏の国へ留学行きたいと思った。しかし、英語が使われている国に行く前に、基礎的な知識がないと限られている時間にうまくするのは難しいかもしれないと思い、交換留学行く前に日本でも頑張って英語を勉強しておこうと思っている。

ここで様々な国々を経験し、三か国語以上が喋れるようになって、なぜ先生になりました

いのかという疑問を持つかもしれないが、私が考えている母国語の先生とは一般的に考えられている先生と少し違い、学生が教科書に書かれているものを習って問題をすらすら解けるようになるための勉強だけではなく、自分の国の全てをできるだけ学生たちに間接的に経験させる仕事なのだ。たとえば、外国で韓国語を学ぶ学生たちに韓国語だけではなく、韓国の様々な情報や文化などを学生たちが実際にその国へ行けなくても経験できるように教える、いわば夢と夢をつなぐ素敵な仕事だと思い先生になりたいと思ったので、自分が持っている能力がもったいないとか、あまり稼げないとかは関係ないだろうと思っている。いくらお金をもらおうが、いくら豊かな生活ができようが、やりがいがあって自分が人生を過ごすとき満足できる仕事をしながら幸せに人生を過ごせるならそれでいいのではないだろうかと思い、私にはそのような仕事が教員だと思ったからである。

ここで留学生という立場で世界を自分の舞台として様々な経験を重ね、自分自身が経験したことが書かれている「海外留学は人生を変える」という本を紹介したいと思う。この本を簡単にまとめると、日本の大学生が大学時代に海外、特に英語圏の国へ留学することで学生時代の留学が自分の人生にどのような影響を与えたか、今生きている人生にどのくらい影響があるかが書かれていて今、私も学生の時代に日本という海外に留学している留学生として、この本を書いた人たちの思いを誰よりも共感できると思いこの本を選んだ。

[一橋大学アエラムック編集部編 (2015年)]によると、学生時代の留学があったからこそ、今がある (p. 72) と述べている。この話は著者が大学の掲示板に張り出されている一枚の告知で運命を変えたということから始まる。この著者は大学生の時アメリカのある大学に留学し、海外生活を過ごす中で一番印象に残ったのが人生というものはワンパターンではないということであった。アメリカの大学では様々な学生たちが学びに来ていて、会社で勤められていたが昇進のためにまた大学に入って勉強をする人や普通にトラックドライバーとして仕事をしていたが、違う人生を送りたいと突然思い学校に入った人など様々な人たちの話を耳にして著者自分も学生時代の留学の終わる頃には MBA を取得するためにまた留学をすることを決意し、就職してから 8 年経った時にまたアメリカに留学をして MBA を取得してアメリカに就職することになる。ここで著者は学生時代に留学があったからこそ今の自分がいるし、社会人いなくて出張などで海外に行ったり、社費で留学行ったりする人が多いけど、学生時代に違う文化に触れ合うことで自分の人生の考え方が変わるし、これから進む道の色々な選択肢が出てくると述べている。

ここに自分たちの経験を書いた人たちのスタート点はそれぞれであるが、その人たちが自分らの目標のために進む道の中で間違いは一つもなかった。失敗や、成功の話ではない自分が選んだ目標のためにそれぞれの自分のやり方で目標の道を歩んでいた。挫折であろうが、目標達成であろうが、この人たちには一切関係がなかった。ここに書かれている人たちには当たり前のように挫折や失敗も、もちろんあったがそれにもかかわらず、前に進んでいき、自分が最初に思った目標を達成した。その人たちの共通点として書かれていたのが学生時代の留学があったからこそ今の自分がいるということであった。

留学をしたことがない人たちがやりたいと思うが色々な考えと不安が重なってどのように行動すべきかが分からないという人たちは、学生時代の海外留学の影響の多さを知らないだろう。自分がいつよりもいきいきしている学生時代であるからこそ、恐れずに広い世界に足を運ぶ勇気が学生時代に必要であると思う。

はじめに新しい世界に出ると、目の前に他の世界が見える。次に他の目標ができてくる。また将来の自分も見えてくる。私はそのスタート地点が学生時代の留学だと思い、だからこそまだ自分がやりたいことや、自分が進むべき道がわからない学生時代に留学を薦めるこの本には自分が今考えていることと似ている点が多いからこそこれらの著者たちの経験談が私の心に深く刻まれたのかもしれない。

現状に満足し、その場で立ち止まってはいけない。私は強くこう考える。学生という立場は経験を重ねれば重ねるほど、目の前の道が開けるからであり、その道を開く鍵として学生時代の留学は絶対必要であると思った。

学生の留学について人それぞれ考え方が違うと思うが、私が現在日本に留学をしに来てから感じたのはこの広い世界で学べることはまだまだ多いということである。私の国である韓国にとって日本という国は非常に近いため、文化や言語など似ている部分が多くあると言われている。そのため、留学以前には大体両国は似ていて同じ感じであると考えていたが、実際に日本での生活をスタートしてみれば一から十まで違う国であることを実感した。だからこそ毎日が刺激的で、楽しく色々なことを学びながら留学生生活を過ごすことができている。ここで思ったのが、このような近い国同士でも異なる点が多く、学べることが多いため、さらに他の国へ行けばどんな新しい経験ができて、私を成長させることができるのかが期待される。そのため大学の4年間の間に違う国にまた留学を行きたいと強く思う。

学生時代の留学は子供の遊びで気軽に行くし、どうせ勉強せずに遊んで帰ってくるなど否定的な目線で言われても私は構わないと思う。また、この先の人生について何も決まらず迷いだし、この先どの道を歩んだらいいかをわからなくて選択肢を広げるための作業であっても良い。それこそ学生時代の留学だと思う。実際行って失敗をしてもそれは失敗というより自分の将来への投資ではないだろうか。色々な経験を重ねれば自分に合う何かが出てくる。それが何であれ、それを探す方法として私は大学四年の間に留学をまた行きたいと思っている。

ここで残念ながら人生の正しい決め方については私にとってはまだ触れられないが人生を正しく過ごすための一つの方法として私の考えを述べた。これが読んでいる側に役に立つかはわからないが、私は自分自身の考えに自信を持って先へ進むつもりである。

一年におけるこの日本語の授業を通して、コミュニケーション能力向上と日本語の知識をどう活用すべきなのかということ学びました。さらに、私のように夢を抱いて日本に来た様々な仲間に出会って話し合っただけで私の夢にも非常に影響を与えられた。私の夢を叶える架け橋としてこの一年間の日本語の授業は大切な経験と時間であった。この以後でも

色々な人々との出会いで私の夢への道が変わると思うがその中での人たちとの出会いを大事にしながら教員になれる力を養いたい。

参考文献

一橋大学アエラムック編集部編(2015)『留学は人生を変える』朝日新聞出版

1. 初めに：

私はグローバル社会の本当の意味を多くの人に分かってもらい、完全なグローバル社会を実現するために必要な政治や経済の知識を学び、グローバル社会に繋がる道を模索していきたいと思います。

2. グローバル社会の現状：

今私たちは日々色々な国のニュースや情報を手に入れることができ、色々な国の製品を普通に買えます。旅行に行きたいと思ったら、いつでも行けます。しかし、私たちは他国のことをどのぐらい知っているのか、異国の文化をどのぐらい理解しているのかを尋ねると、恐らく20%も満たさない人はほとんどでしょう。

グローバル社会とは、国家や地域という境界を越えて地球規模で複数の社会の間での結びつきが強くなることに伴う社会です。今の常識においては通常、入国審査を受けずに国境を越えると、逮捕されてしまいます。しかし、グローバル化が進むと、自由に国境を越えて、外国に入国することが可能になります。貿易の視点で見ると、グローバル化が進む＝関税の引き下げあるいは撤廃することです。今先進国の企業は人件費を安くするため、賃金の低い途上国で、工場を建て商品を作っています。工場や、事務所、現地で働く人が必要になるため、現地の人雇われるようになりました。豊かな国から貧しい国への資金の移動が始まっています。このように企業は「グローバル的」な商業を実現しましたが、グローバル社会はまだ完全に実現されていないというわけです。

3. グローバル社会を促進するために：

グローバル社会を実現するために有効的な方法は、互いに偏見と先入観を持つ普遍的な考え方を変えることにあります。つまり「日本は悪いんだ。」「中国はだめだ。」といったような、互いにぶつかり合うことを抹消し、「日本のこれがすごい。」「中国はこれがいい。」互いに認め合って、補い合えるように学び合う社会を作ることです。ですから、ここに言語教育が不可欠になるわけです。

言葉が通じないようでは、コミュニケーションは出来ません。コミュニケーションが出来ない以上、互いのことを知ることも出来ないし、分かり合うことも出来ません。学び合うに至るまでのプロセス、それが言葉の習得です。言語教育は国際理解においてこれほど重要な役割を担っているのに、アジアの国々ではまだ十分に施されていないのは事実です。中国も日本も韓国もみんな英語が大事、しかし隣の国の言葉は学校で教えていません。ヨーロッパでは隣国やほかのヨーロッパ系の言葉の習得は小学校から必修に入っています。今56%のヨーロッパ人は二種類以上の言葉を使えます。第二次世界大戦の後、ヨーロッパは民族的恨みを失くし、領土の揉め事もなくなりました。EUが立ち上がり、ヨーロッパ諸国は小さなグローバル化を実現しようとしています。これがコミュニケーションによって、国家間の罅を溶け合うことが出来たからこそ成し得たのです。つまり、グローバルといっても、いきなり世界中の国が団結し、一つになるということではなく、地域という単位から始まるのです。隣国との関係を改善する、イデオロギーを交換する、貿易を密接するの順に進めていかなければなりません。

4. 問題点：

しかし、ここで大きな壁が横たわっているのです。それが貧富の差です。貧富の差は国と国の間でも存在して

いるからこそ、今の世界に強い国と弱い国があるわけです。勿論皆が知っている通り、歴史における戦争はすべて利益にめぐって繰り広げられたと同じように、今の「商戦」という名の戦争はまたしかり。ただ、これは大国VS大国の戦いであって、途上国を踏み台にして始めたことです。安い賃金で作業員を雇い、安い値段で作り、そして自国や他国に輸出して高く売ってしまえば、何倍の利益を得られ儲けることになります。資金が先進国から途上国へ流れているように見えてるけど、実際にそうだろうか。

日本の製紙業を例として上げてみましょう。日本の製紙企業の拠点が東南アジアの途上国にあります。そこから木材を買って船で紙を作る作業を行います。できた紙は海路を経由して輸出し、利益を得るのです。これを言い換えれば、他国の自然資源を利用し、安くその国の木こりを雇って生産作業をする。そして、汚水をそのまま海に排出して他国の海を汚染することになります。これは途上国にとって、本当に利益のあるものですか。しかし、途上国は資源を売らざるを得ない理由があります。それが、だれか資源を買ってくれないと、失業や貧困がどんどん深刻になり、国政が持たないくなるからです。

以上の例からみると、確かに世界の経済が繋がっているのですが、互いの利益を図るための経済ではなく、先進国の利益を確保するための経済です。こんなものはグローバルと言ってグローバルではないのです。互いに利益を得、互いにリスクを負うような、平等な経済を行わないと、グローバル化はこれ以上進みません。

5. 自分のできることを考える：

このように、グローバル化はまだまだこれほど多くの問題を一つずつ解決していかなければ実現できないのです。私は大学でいろいろなボランティア活動に参加し、経験を積み上げたいと思います。そして、国際交流の活動にも積極的に参加したいと思います。二年生の時は国際政策もしくは総合政策コースに入って、グローバル社会実現のために私はどういう風に力を貢献できるのか、何ができるのかを考えたいと思います。

6. 「言葉と国家」読書レビュー：

「言葉が「言語」なのか「方言」なのかは、政治的に決まる。」 [1]お互いに似ている言葉でもそれぞれ国家をもてば、それぞれが独立した「言語」と見なされることがあるし、お互いに理解ができないほど異なる言葉でも、同じ国家に属するなら、共に「方言」と見なされることがあります。また、国家は共同体としての統一を保つために、共同体に共有される言葉をできるだけ一つに保とうとします。そのために「標準語」や「文法」があり、方言撲滅政策がとられることもあります。メディアは政治の道具であると言うより、言葉自体が政治に利用されているといったほうが正確です。

なぜか中国語、韓国語、そして外国語には全て「国」という文字が入っていて、しかし、英語、フランス語、ドイツ語には「国」という文字はないでしょうか。「国語」には「国」があるが、「日本語」というときにはありません。言語は民族と結びついています。とはいえ「フランス人が話す言葉がフランス語と知っているのか」というと、オック語、ブルトン語を母語とするフランス人はほとんどです。このように、「言葉」と「国家」との間には微妙だが、堅固な関係が存在することが分かる。

「言語学という分野は、日本では他の学問分野からいちじるしく孤立していて、言語学者が隣接領域にほとんど注意を向けない以上に、社会学者はここで起こってきたことを知らない。」 (p. 215) [1]と著者は言っています。私は全くそのとおりでと思います。言語学者は言葉ばかりの研究をしてはだめです。さらに社会的な視野を持って、言葉が社会にどんな変化や問題をもたらしたのかを知る必要がある。もし言語学者がこれを気づかないならば、社会学者も社会学における言葉という重要な要素を発見できません。

7. 考えなおしたこと：

ヨーロッパ諸国のように、互いの国の言葉話す上で、相互の理解を深まるような方法は、あながちアジアの国々の間でも通用するとは限らないと見直ししました。しかし、互いの言語を学んで、コミュニケーションを行うことは、グローバル社会を促進するための有効な方法であると確信しています。アジア諸国は地理的原因で、隣国との接触する頻度はヨーロッパ諸国に及ばず、まして文化や宗教はヨーロッパよりも多元的で相違性を持ち、中国のような多民族国家では、自国内において複雑な民族問題や宗教問題、あるいは地域的、政治的の問題がある以上、アジアにおいての言葉によるグローバル社会の促進は容易ではないと判断しました。

8. 新しい考え方で道を開こう：

ヨーロッパは一つの文化圏として、その中にある国々は類似性が高いです。しかしアジアでの国々は極めて複雑な国情が存在しています。言語をによる文化理解は教育制度にも深くかかわっている問題ですし、況して今アジア諸国共通の英語教育レベルから見ても、決して誰もが英語を喋れるわけではないし、英語文化圏の国への理解が深まったわけではありません。よって、言葉の習得から着手することは、あながち成果を上げることができるにも限らないかもしれません。

ここでは考え方を変えたらどうでしょう。最新の技術を使って、言語による国際理解を促すことはいい方法ではありませんか。信頼性の高いソーシャルキャピタルを作って、人々の協調行動が活発化することにより社会の効率性を高めることができれば、社会の信頼関係、規範、ネットワークといった社会組織の連携がさらに強くなります。これをグローバルの視野に取り込めば、国家間の第一時情報や世論、民意を素早く、且つ正確に世界範囲に広まることができます。これを実現できれば、互いの国への理解を深め、人々に異文化の真髄を再認識させることができます。つまり、我々が名前ばかり知っている異文化を、本当の意味で感じてもらえるように、グローバル的な視野をもたらせることができるのであれば、電子化になった言葉とはいえ、我々の意思を伝えることができ、異文化の相互理解を促すことさえ成し得るのではありませんか。

今後の課題として、どのように「言葉」の力を信頼性の高いソーシャルキャピタルに取り入れ、それをいかに完全なるグローバル社会の実現を促していくかを考えたいと思います。

9. 授業の感想：

秋学期の授業を通して、私たちは最終レポートを完成しつつ、これからの自分の大学生活を考えることによって、目標を見つかることができました。さらに、ほかの仲間たちのレポートを読んで、よかったところとダメなところを探し出し、意見を出し合うことによって、決して自分一人で思い出せない、考えが及ばない新しい発想やアイデアに辿り着くことができました。ほかの仲間たちの考えを知り、話し合いの中で互いの心に触れたことは、嬉しく思います。レポートの書き方や体裁を磨き、書くためのスキルを鍛えただけでなく、それよりも考える力をアップし、これまで微かにしか意識していなかった問題、または考えもしなかった自分自身のことを明確にしたし、興味のある分野を深く知ることで、二年生の学科選択のためのよいヒントをもらいました。非常に充実した授業でした。

参考文献：

1. 田中克彦. 言葉と国家. 出版地不明：岩波書店, 2016年11月4日.

より良く伝えるために

り しゅんかい
李 春海

私は大学でやりたいことは三つある。まず一つ目は自分のプレゼンテーション能力を高めたいと考えている。なぜ自分のプレゼンテーション能力を高めたいと思ったのかと言うと、そのきっかけは高校時代のころ、クラス委員を務めた経験のことである。多くの人の前に立ち、もう一人と全く同じことをしゃべったときに、きいている人は、自分の言葉には動じず、もう一人のほうに反応した経験から、なぜ私の言葉には力がないのだろうという疑問を持ち始めた。何に気を付けなければならぬか、どうしたらいいのか、聞いているひとに、私の言葉を聞いてもらえることが、どれだけ大変なことなのかを痛感した。

今参加しているゼミでは、先生が課題を出して、その後ゼミのなかで、4人か5人分かれ、独自に課題について、調査を行い、最後にパワーポイントを使いながら、発表するプレゼンテーションをしている。このゼミのなかで、発表するために、プレゼンテーションに使う資料を集めたり、整理することなどの方法を磨きながら、組の他のメンバーと相談し、資料、情報収集のやりかたや、パワーポイントを使いこなすような経験を積んでいきたい。ゼミ発表のとき、他の人の発表を聞きながら、どんなテクニックを使っているのか、テクニックを使うタイミングやどのような効果があるのかを学んで、これらの経験を整理し、自分のプレゼンテーションの時に、わたしはどのように使うのかを考え、練習していこうと思っている。

二つ目は勉強の方である。必修科目と基礎知識をクリアするのはもちろんのこと、単位をきちんととって、大学を無事に卒業することは最優先である。わたしは将来について考えていない、なぜなら、人間は未来のことを予測できないものであり、自分の将来も予測できないはずなので、予測できないというものを前提に考え、私はいつも短期の目標を立てているからである。例えばこの半年の目標はなにか、一か月や一週間の時間で何をやるのか計画を立てる。こうしたなかで、将来に何があったとしても対応できるように、整えたいつもりである。

自分の視野を広くするためにも、知識を幅広く学ぶことが大切だと思っている。では、なぜ自分の視野を広くする必要があるのかということ、一つは私は明確な将来図がまだできあがっていないからである。自分は将来何をやりたいか、どんな職業に就きたいのもわからない以上、暗中模索な選択より、もつと多くことや分野に出会うことが大事だと思っているからである。もう一つは日本に来て、大学の受験を経験して、自分はやはり知りなさすぎると思っているからである。初めて来る時は日本語学校で勉強していた、そのとき初めて、日本の大学の入試に挑戦し、そして、見事に破られていた。そのとき面接の質問に答えられなかったのは、日本文化と中国文化の違いや、大学でやりたいことなどの質問だった。その後、失敗から立ち直り、関西学院大学に入った。これから学校にいる4年間、自分の興味ある、例えば、格差問題と言った経済学や社会学のなか、格差社会はなにか原因なのか、なぜある人はお金持ちになり、多く人は貧困のままだろうか、そしてなにかに影響を与えるのか。格差社会になる原因を考え上で、わたしたちの格差社会では何が問題なのかを考える。

また、グローバル化が進み、違った価値観はどのように融合していくのか。まず、通常わたしたちが理解している価値観は、大きく二つに分けられれている、西欧的と東洋的な価値観である、なぜ西欧では、美術や古典音楽文化があるのか、東洋では「儒教」や「道教」的な文化を持っているのか。ではどうやって彼らと接するのか。また、わたしたちはいつも問題をどうやって見つけるか、どうやって解決することができるかを考えがちだが、問題を見つけたことや、解決方法があったとしても、それを他の人に伝えないと意味がないと思ひ、他者との共鳴が必要だと考えている。「伝える力」はまたコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力とつながる。だから、2年に進学したら、メディア情報学科を選び、情報集めや情報をよりよく他人の伝える力を身につけたい。

最後の三つ目は、自分の歌う力を伸ばしたいと思っている。自分の母国語はもちろんだが、私の母国語は4つある、二つの方言と二つの言語に分けることができる、

二つの言語とは中国語と広東語である、そしてこれからは日本語の歌も挑戦したいと思っている。そのため歌の呼吸法や筋トレを練習している。なぜ、呼吸法と筋肉トレーニングのか、それはネットで調べたら、プロや歌の達人たちはこれらの方法で鍛えているらしいからである、簡単に言うと、自分の息をコントロールしながら、お腹から発声する練習する方法である。彼女は私の歌が好きなので、これからも彼女のために、歌いつづけたいと思っている。歌うことが彼女のためでもあるが、「伝える力」にもあると思っている。

夏休み中、私はオギユスタン・ベルフさんの『日本の風景・西欧の景観 そして造景の時代』を読んだ。この本を選んだのは、留学生である私が日本に来て、日本と故郷の中国との違いや、価値観の違いなどのさまざまな違いである。なぜこんなにも違いがあるだろう。例えば、日本人と外国人のわたしたちはなおさら違いを感じた。「喫煙」についてだが、隣の人がタバコを吸っていると、日本人は嫌がる、外国人は何とも思わないかもしれない。また日本人は集団行動が好きなように、外国人は単独行動が好きなような違いを感じた。また、日本の価値観はどういうものなのか、西欧の価値観はどういうものなのかを知りたい。そして違った価値観はどうのように融合していくのか。この本を選んだのである。

『日本の風景・西欧の景観 そして造景の時代』では7つの章に分けられている。

はじめに『風景』というのとは何か、まだ、日本人と西欧人が『風景』について、どのような見方を持っているのか。西欧の影響や「二ボーンニズム」を例をあげながら、『風景』という言葉の由来を述べていた。次の章は野生の空間から自然の風景へでは、わたしたちが生きている空間の誕生、また現在のような日本と西欧の風景の違いはどう生まれたか、そのために、農民の風景や日本における、耕作地や森の関係を述べていた。歴史や変化を述べた後に、現代都市の話に移る、都市風景へでは、日本の「都」や「宮」はどのような存在なのか、また、都市において居住が自然環境を指向することにこだわり、都市という構築された環境にむかわないという事実を指摘した。最後、筆者の考えと現代において、西欧で近代の「風景」の危機とはなにか。また、いまはすでに「造景」の時代ということも述べていた。

まとめると、『風景』とはなにか、『風景』を見る人の目は、おもにその人が生きている文化によって支配されている。そして、一人一人は違う価値観を持っているため、わたしたちは他人を認めるところをもつべきである。また、『風景』という言葉の由来や発展などを説明した。例えば、「野生の空間」とはどういうものなのか、「野生の空間」とは生き物が自然の状態で生活し、人間の干渉のない空間である。その後、「野生の空間」の誕生や、近代になって、わたしたちにとって「野生の空間」の変化について、述べていた。そのあと、日本にしている田園風景、またはその歴史を説明し、「都」「宮」「都市」が日本文化におけるの意味を考えながら、西欧と比べて、最後に現代のポストモダンという状況が強い「風景」の見方は、日本よりも西欧に対して緊張をもたらすものである。そして、その緊張を緩和するには、東アジア的な非主体性を総合することによる、『造景』という考えが必要なのである。

筆者は「景観」の問題を考えるうえ、日本的なものや西洋的なものから別々に考えたほうがよく理解するところに賛成である。日本の風景と西欧の風景の違いから感じた文化や価値観の違いはさまざまあるのだが、もともと『風景』という言葉はなかった。人間が文化を持ち始めて、周りを変えてきて、やがて『風景』になり、言葉を生み出したのである。そして、今後は「造景の時代」という簡単にも賛成である。

『日本の風景・西欧の景観 そして造景の時代』を読み、日本的な庭園はどういう文化背景を持っているのか、その由来を知ることができた、読む前と読んだ後に、「日本の風景」の見方が変わった。また同じく、西欧的な風景の裏にどんな文化要素が支えているのかなかを少しわかってきた。文化的な違いは、今後少しずつ理解して行こうと思っている。

これからは「造景の時代」だ、筆者は述べている、私も賛成である。本書の最後に、何回がヨーロッパをめぐり、「風景の死」と述べていたが、私は著者に賛成できないである、逆に、わたしはいまこそ「風景の新生」だと考えている。「風景の死」というのは、今までのヨーロッパの「風景」が「モンパルナツス・タ

ワー」のような建物の次づぎ、壊していくのを「風景の死」と、筆者をそう考えていた。

しかし、わたしは「風景の死」ではなく「風景の新生」と考えている。なぜなら、従来のヨーロッパ「風景」というのは、歴史の流れの一部であって、いまの「風景」でも同じでもある。時代の価値観から創造されたものは、かならずその時代に合うものしか存在しないと考えている。だから筆者は最後の章にこれからは「造景の時代」と述べているのである。「造景の時代」はいわゆる、西欧の価値観や東洋の価値観が相互に混ざりあうことによつて、新たなものを作り出すことである。だから、わたしはいま起こっている「風景の死」は「風景の新生」と考えている。

読んだあとでは、やはり、東洋的と西洋的な文化や価値観の違いを感じた。「伝える力」を鍛えるために、何かが必要なのかを考えると、他人が持っている価値観を知ることが大事になってくると思う。他人と価値観を共有することにより、自分はさらに勉強できるのはもちろんのことだが、他人からでは、私は異質の存在でも、受け入れてくれることができる。だから、大学のなかでは異文化を紹介する授業を積極的に取り込むつもりである。また、学校のグローバル環境を利用して、お互いの文化を理解し合うようなイベントにも積極的に参加するつもりである。

今学期の日本語授業をきっかけに、中国からの留学生だけではなく、韓国や香港、またはミャンマーの友たちが出来た。彼たちとの勉強でわかったことは、やはり「違いますね」という感想だった。秋学期に東洋思想史という授業を取っていた。この授業ではイスラム歴史を教えている。初めて、イスラムのことを学び、イスラム文化やキリスト文化は自分の歴史を持つ、そして、信仰している人がいる、彼らと接するときに、文化や価値観を避けてはならないはず、授業で一番学んだことが、「他人の価値観」のことである。

「他人の価値観」とは、常に他人の立場から見る必要があるということである。いつも、自分が納得出来ることを他人でも納得出来るだろうと、あたりまえのように考えがちな”ワタシ”は、この授業を受けて、本当に勉強になった。今後のプレゼンテーションや人と人の付き合いなど、「他人の価値観」のことをもつと気をつけて、よりわかりやすい、納得しやすい「伝える」ことができるだろう。

この四年間

リトウリン

私は高校から日本語を勉強し始めました、学校の日本語の先生は日本に体験教学を一回来ました、まだ高校生の私に日本でのこと沢山教えてくれました、私は日本語が好きで、高校二年生のときから日本への留学を考えでいました、でも一人娘の私を日本に行かせることは親の中に一年も悩ませました、そして2014年の夏、私は大阪に来ました。

今でも来てよかったと思っています、大阪の日本語学校で日本語を勉強し、友たちを出来たり、アルバイトをしたり、充実していました、2017年の春、大学に入りました、初めての大学なので、考えことややりたいこと山ほどあります。私は言語が好きです、日本に来てからアニメの中にある標準語だけではなく、関西では関西弁、東北では他の方言があることを知って、これから日本での生活も楽しみも深めてきました。私は最初から大阪にいました、標準語よりも関西弁に慣れました、関西弁を使う間で感じたことは同じ日本語でも意味が違ってくることでした。東京では「直す」は物を修理することを示す言葉で大阪では物を元の場所に戻すのも「直す」で意味を伝えます。このような言葉使いの違うところを気がつき、標準語と関西弁だけではなく、他の方言にも興味を持ちました。大学というところは様々な人と出会ったり、様々なことを体験したりするところですから、ここで各地方の友たちを作って、各地方の方言に触れることを出来たらと私は思っています。言語を勉強することは、使わないと意味ないと私は思っています。ですから、自分の出来る範囲の言葉を使って日本中に回して、日本の文化も少しずつ知って行きたいと思っています。そして、この四年間出来れば、日本語だけではなく、英語も勉強したいです、高校の時英語の代わり日本語を勉強していました、英語は少ししか分からないです、これからグローバル化社会になって行く時代です、ひとつの言語ではなく、今世界中に最も使われている言語を勉強し、自分にとっても悪いことではないと私は思います。

そして、この総合政策学部でやりたいことは介護にかかわるボランティアや介護の福祉に関する研究したいです、これから日本は高齢化社会に成る一方という見込みがあります、そこで社会問題の中心は高齢者にあることが違くないです。昨年、私のおじいさんは病気で亡くなりました、その時は私日本にいました、おじいさんが病気を患ってからの状態はずっと悪かったです、でも子供たち皆、仕事で常にそばにいませんでした、おじいさんの世話をしているのはおばあさんしかなかったです。介護関係の人を雇ったらって思ったこともありました、ですがそれは私の甘い考えです、介護という概念はまだ中国では日本みたいに受け入れていません、施設に入ることは年々増えているのですが、でもそれは問題解決になってないと思います、施設に入ることはまずお金はかかります、その次は老人たち施設の中にちゃんと生活できるか、多数の家庭は最初のお金のことから手を上げてしまいます。個人介護も増えつつありますが、でもお金はともかく、個人介護をやっている会社はまず少ない、そしてその会社はほんとに信頼できるかも問題です。技術の進歩につれて、介護向けのロボットの開発も進んでいますが、でも開発することはお金の問題だけ

ではなく、介護することは老人の気持ちを考えながらやる仕事だと私は思います、もちろん技術がある限り使うものですが、しかし介護に関しては大事なのは患者さんに対する心使いだと私は思います。このような問題の対策を大学で考えて行きたいと思っています。もちろん私一人ではこの問題の深刻ささえ分からないと思います、ですので学校でのこの問題に関する活動を積極的に参加し、学校以外もネットを使って介護に関する情報を収集し、参加できるなら、学校以外の時間を使って実践して行きたいと思います。

大学四年間、この問題の解決方法探すのはあまりにも大きなことを言えないですが、せめて自分はこの問題の深刻さを知って行きたいと思っています、問題の本質を分かることは問題解決の第一歩だと思います。

夏休みには中村淳彦さんの「絶望の超高齢化社会」を読みました、この本は今の日本の介護職にかかわる人達のインタビューをして、その内容をそのままきさいし。2025年の日本は五人に一人が75歳以上、三人に一人65歳以上になります。その一方で介護職は100万人足りなくなるとも言われてある本です。この本を読んでから驚くばかりでした。私今までの考えが甘かったです、ただの傍観者の姿でこの問題を考えていたしか過ぎないです。日本の介護についての政策なら絶対中国に完全していると思い込んでいました。この本を読んでそうでもなかったです。例を挙げます、介護職に勤めていたシングルマザーの話からにしますと訪問介護事務所からおかしいでした、契約書も何もかもちゃんとしてなく、その上事務所は最初から言っている規模も書類と違いました、常勤7人いるはずの会社は自分と社長とその彼女でした。こういったようなとこを気がついて、会社を辞めました。会社を辞めた後、収入がなくなってしまう、アルバイトの給料では、子供と二人生きていけないです、国からの育児補助があるにしても二人の生活は前より厳しくなります。この様な会社はただこの一社だけではなくのことは私が思っていました、だから自分の考えが甘いと思っていました。

そして、本の第二章で書かれた人物の話を見ていたら、ものすごく自分の浅さを感じました。第二章の主人公は「国家資格の介護福祉を持ち、認知症対応型生活介護の施設長でしたが、でも2年前、ストレスとブラック労働で、勤務中脳出血で倒れた、緊急搬送されて一命は取り留めたが、右半身に軽い麻痺が残る。3級の障害者認定を受けている。」と書かれていました。この文字を見て、無力感を感じます、今までは私老人の立場でしかこの問題を考えたことはありませんでした、老人はどういう風に世話をすべきか、政府はどのような政策を出したら、問題解決になるでしょうなどしか考えていませんでした。本を読んで、この問題を解決しようとしたら、サービス側から考えないといけないことを気がつきました。介護職は不安定の状態であればあるほど、老人達の不安を消すことはないと思います。

介護職を完備することは国しか出来ません。まだまだ日本も中国も介護にそこまで重視していないと思います、中国は途上国なので、今のところは経済重視ってことは理解できるですが、日本みたいの先進国ではこの問題を何より先考えるべきだと私は思います、日本

は少子化とともに高齢化も進みつつあります、若者達の考えを変えるのはなかなか難しいことで、子供を生まれ育ちの時間もかかります、しかし、今から老人達のことを考えて、老人の部分を安定することが出来たら、社会的にも安定して行くとは私は思います。社会が安定に近いほど、国民の考えは変わっていくのではないかと、私は思います。本の中にはこのような一章がありました、現場にいった人のインタビューで、実際の状況を書いてありました、近年の介護職は女性ではなく、男性も増えつつあります、ある老人ホームでは三人の利用者も転落してしまい、なくなりました、それは自分が苦しいからではなく、介護職を務めている従業員達のストレスが発散出来なくて、最終的にこのような悲劇をおきました。そのうちの一人の男性を取材しました、彼は最初の時も老人達のために頑張っていました、そのうち会社のブラック労働で体的にも精神的にも疲れてきました、最終的には鬱病になってしまいました。直接老人に暴力を振ったわけではないが、ナースコールをなった時には、利用者「このボタンを押すと爆発する」といいました。利用者からのストレスだけではなく、その家族からのプレッシャーも半端なかったそうです。1から19までの条約を渡され、これに従って世話するようにつで家族から指示されました、しかし、会社では十五分ごとを分けるスケジュールがあります、規定時間で利用者を世話するだけでも時間がキツイのに、その上に一人の利用者だけ特別扱うことは出来ませんと家族に伝えていたら、大騒ぎになってしまいました。このような現状を見ていたら、言葉も出ませんでした、私たちはニュースや新聞など出で来る記事しか見ません、施設に又なんかの事故が起こしたら、それだけを見て施設のことを信じなくなります、事件の裏にはサービス側の苦情は考えもしなかったでしょう。私たち人間は主観的生き物で、自分の見たいものしか見ないのです。介護に関心を持った事によって、世の中のすべては裏表があることをさらに分かりました。

このようなことを言っていますが、実際これからどうなるのかも私が言えるものでもない、このことに関してこれから仕事を決めるわけでもないが、ただ、これからこの大学にいる四年間、この問題に対しての研究や実践などがあれば、是非参加したいです、こういったような研究などを参加することで、これからの進路を決めていくかもしれません。

前にも書きましたが、言語をもっと勉強したい、そもそも、日本語を勉強してから日本に来ました。日本語が出来なければ、中国との介護に関することは比べることができなかつたでしょう。二者全く関係がないとは言えないが、日本語を勉強になったことでの考えことだから、この力を生かしながら、考えを進みたいと思っています。

この一年間、日本語に関することをいっぱいやりました、最初、クラスに慣れなくて、誤解を招くことが沢山やったと思いますが、今は日本語のスキルも上げ、クラスメイトとの関係も柔らかくなりました。これからも頑張っていきたいと思っています。

参考文献

「絶望の超高齢社会：介護業界の生き地獄」 中村淳彦

関西学院大学総合政策学部

2017年度秋学期日本語Ⅱ レポート集

大学生活の希望

発行日

2018年1月20日

発行

関西学院大学総合政策学部 牲川波都季

669-1337 兵庫県三田市学園 2-1

編著者

関西学院大学総合政策学部

2017年度日本語Ⅱ 受講生

問合わせ先

牲川 波都季

segawa@kwansei.ac.jp
